

通
叶
衡
刚

九州大学文学部

九州大学大学院人文科学府

案内 2026

自分と向き合う

人文学は、人間が生み出す文化・社会における多様な課題の解決に向け、自ら問い、考究する学問です。文学部および人文科学府では、そのために必要な知識と方法論を学びます。

研究を行うにあたって、我々は少なくとも三度、自分と向き合います。まず、問いを立てる時。その問いは、果たして学術的意義を有した問いと成りうるのか。先人が何をどこまで明らかにしているのか把握し、自分の立ち位置を確認します。次に、論証を進める時。自らの主張に対して、経験的証拠を適切に提示できているか。客観性を有した論理の展開が求められます。そして、成果を発表する時。我々はその研究成果について、言語を用いて示します。言語化するにあたって、自分は書き手（話し手）であると同時に、最初の読み手（聞き手）でもあります。この時、どれだけ厳しい目で自分を見つめられるか――。

自ら問い、考え、言語化する。他者との関わりの中で自らを相対化し、真摯に自分と向き合いきましょう。

文学部長・人文科学府長

青木博史



目次 Contents

はじめに	1
I. 九州大学文学部および大学院人文科学府の特色	3
・沿革	4
・組織と規模	5
・教育組織	5
・研究組織	6
・職員数・学生定員・在籍学生数・外国人留学生数及び発行雑誌等	7
・国際交流	9
・学部卒業者・修士課程修了者の進路	10
II. 文学部	11
・アドミッションポリシー	12
・文学部 国際コース	14
・人社系副専攻プログラム	16
・研究室紹介	
・哲学コース	18
・歴史学コース	28
・文学コース	40
・人間科学コース	52
・先輩からのメッセージ	62
III. 大学院人文科学府	65
・沿革と組織	66
・文学部との対応関係	66
・九州大学における学府・研究院制度について	67
・アドミッションポリシー	68
・教育の特色	69
・広人文学コース	70
・歴史学拠点コース	76
・生活・研究活動を支援する制度等	77
・先輩からのメッセージ	78
・博士論文一覧	81
Overview of the School of Letters and Graduate School of Humanities	82

I 九州大学文学部および大学院人文科学府の特色

本学は、既設の東京帝国大学、京都帝国大学のほかに九州の地に帝国大学をという機運のもと、1903（明治36）年4月に京都帝国大学の一分科として設置された京都帝国大学福岡医科大学を母体に、1911（明治44）年1月1日、九州帝国大学として開学しました。以来百年にわたって知の拠点として機能しています。

文学部は、大正13（1924）年9月勅令第224号をもって法文学部の一学科として発足し、勅令第225号により法文学部の講座名称及びその数が規定されました。

戦後の1947（昭和22）年10月、帝国大学令が改正され、帝国大学は国立総合大学となり、本学の名称も九州大学と改められました。ついで1949（昭和24）年4月、法文学部が分離し、文学部が独立しました。同年5月には学制改革が行われ、旧制の九州大学は新制の九州大学に包括されました。また、1953（昭和28）年4月には新制度による大学院が発足し、文学研究科が開設されました。

文学部は設立当初20講座を有し、その後いくつかの講座が増設整備されましたが、1998（平成10）年に発足した大学院人間環境学研究科に文学部人間科学科所属の5講座9名が移動し、その結果、4学科24講座3大学科目の規模となりました。

また、1999（平成11）年5月の学校教育法の改正を機に、九州大学では、自律的に変革し活力を維持し続けるシステムの形成を模索し、2000（平成12）年4月の「全学大学院重点化」の完了と同時に、「学府・研究院制度」を全国で初めて導入しました。これは、大学院の教育研究組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」と、教員の所属する研究組織「研究院」とに分離して、相互の柔軟な連携を図るもので、文学部は、大学院教育組織「大学院人文科学府」、研究組織「人文科学研究院」、学士教育組織「文学部」の体制となりました。2018（平成30）年9月に、長い伝統を持つ箱崎キャンパスから伊都キャンパスイース

トゾーンに移転し、人文学の研究・教育の拠点としてさらなる発展の機運に満ちています。

人文科学研究院は、研究促進の母体として諸学問分野の伝統を重んじ、哲学、歴史学、文学の3部門の下に19講座を置いています。

大学院人文科学府は、研究者および高度専門職業人の育成を旨とし、個別の学問分野を基礎としながらも、人文学諸学問分野の多様性と有機的連関とに重きを置いて、人文基礎、歴史空間論、言語・文学の3専攻の下、10分野18専修、1コースから構成されています。

文学部は、幅広い人文学的な知識を習得し、人文学的な思考法を身につけることによって、知性と人間性を練磨する場として全体を一学科（人文学科）とし、哲学、歴史学、文学、人間科学の4コースの下に21の専門分野が置かれています。また、総合型選抜による国際コースが存在します。

本学部の卒業生は、第1期生の出た1928（昭和3）年から2025（令和7）年3月までの間に、旧制1,069名、新制9,994名、計11,063名に達しています。卒業生は、教育界、官界、さらには広く実業界にも迎えられており、現代社会の変化に対応できる新たな人材の育成に努めています。

大学院については、旧制大学院課程による文学博士の学位を授与された者43名、1953（昭和28）年4月設置の新制度による文学研究科の修士課程（2年）、博士（後期）課程（3年）における文学修士の称号を授与された者2,324名、博士の学位を授与された者296名となっています。また、論文提出により博士の学位を授与された者は、303名です。

2024（令和6）年に文学部は法文学部の創立から100周年を迎えました。他の文系学部とも協働し、次の100年に向けて新たな人文学の研究と教育の創造を目指しています。

組織と規模

Structure & Members

教育組織

文学部

学科	コース	専門分野
人文学科	哲学	哲学・哲学史
		倫理学
		インド哲学史
		中国哲学史
		美学・美術史
	歴史学	日本史学
		東洋史学
		朝鮮史学
		考古学
		西洋史学
	文学	イスラム文明学
		国語学・国文学
		中国文学
		英語学・英文学
		独文文学
	人間科学	仏文文学
言語学・応用言語学		
地理学		
心理学		
比較宗教学		
		社会学・地域福祉社会学

文学部国際コース

大学院人文科学府

専攻	分野	専修
人文基礎	哲学・倫理学	哲学史 倫理学
	東洋思想	インド哲学史 中国哲学史
	芸術学	芸術学
	広人文	文学コース
歴史空間論	日本史学	日本史学
	アジア史学	東洋史学 朝鮮史学 考古学
	広域文明史学	西洋史学 イスラム文明史学
	地理学	地理学
	言語・文学	日本・東洋文学
西洋文学		英語学・英文学 独文文学
		仏文文学
言語学		言語学

歴史空間論専攻に歴史学拠点コースを置く。

研究組織

人文科学研究院教員配置表

2026 (令和8) 年4月1日現在

部門名	講座	研究分野	教授	准教授 / (特定プロジェクト教員)	講師 / (特定プロジェクト教員)	助教
哲 学	哲 学	哲 学 基 礎 論	倉 田 剛			
		西 洋 哲 学 史	大 西 克 智			
		西 洋 古 代 哲 学				
		教 父 中 世 哲 学				
	倫 理 学	西 洋 近 現 代 哲 学			葛 谷 潤	
		西洋倫理思想・日本倫理思想	横 田 理 博			
		現 代 倫 理 思 想			吉 原 雅 子	
	イ ン ド 哲 学 史	倫 理 学 理 論・日 本 思 想 史			飯 嶋 裕 治 (基幹教育院)	
		イ ン ド 思 想 史	片 岡 啓			
		仏 教 思 想 史				
中 国 哲 学 史		中 国 古 代 中 世 思 想 史	南 澤 良 彦			
		中 国 近 世 近 代 思 想 史			藤 井 倫 明	
芸 術 学		現 代 芸 術 論				
		東 洋 美 術 史				
	西 洋 美 術 史			伊 藤 拓 真 石 井 祐 子 (基幹教育院)		
美 学	美 学			東 口 豊		
	広 人 文 学	日 本 文 化 論	Anton SCHWEIZER Ellen VAN GOETHEM	Caleb CARTER	楊昱 (Yu YANG) David WEISS	
歴 史	日 本 史 学	日 本 古 代 史				内 田 敦 士
		日 本 中 世 史			荒 木 和 憲	
		日 本 近 世 史			岩 崎 義 則	
		日 本 近 代 史				国 分 航 士
	東 洋 史 学	中 国 政 治 文 化 史				
		中 国 社 会 史			中 島 楽 章	
	朝 鮮 史 学	ア ジ ア 内 陸 圏 史 研 究				
		朝 鮮 政 治 文 化 史			小 野 容 照	
	朝 鮮 社 会 史	朝 鮮 社 会 史	森 平 雅 彦			
		東 ア ジ ア 考 古 学			鈴 木 舞	
日 本 考 古 学	日 本 考 古 学	辻 田 淳 一 郎				
	西 洋 現 代 史 論			今 井 宏 昌		
西 洋 史 学	ヨ ー ロ ッ パ 社 会 論	足 立 孝				
	ヨ ー ロ ッ パ 文 化 史 論					
イ ス ラ ム 文 明 史 学	イ ス ラ ム 社 会 史	小 笠 原 弘 幸				
	イ ス ラ ム 文 明 史	清 水 和 裕				
地 理 学	人 文 地 理 学			伊 藤 千 尋		
	文 化 地 理 学	遠 城 明 雄				
	空 間 動 態 論			外 柵 保 大 介 (基幹教育院)		
文 学	国 語 学・国 文 学	日 本 古 代 文 学			岡 田 貴 憲	
		日 本 中 世 文 学				
		日 本 近 世 文 学	川 平 敏 文			
		日 本 語 学	青 木 博 史			
	中 国 文 学	日 本 語 史 学				古 川 大 悟 (孫琳淨)
		中 国 古 代 中 世 文 学	静 永 健			
	英 語 学・英 文 学	中 国 近 世 近 代 文 学				
		イ ギ リ ス 文 学	鷓 飼 信 光			
		ア メ リ カ 文 学	高 野 泰 志 中 村 嘉 雄 (基幹教育院)			
		英 語 学			前 田 雅 子 大 塚 知 昇 (言語文化研究院) (Thomas ROBERT BATCHELOR) (Yannick WINKELMANN)	
独 文 学	ド イ ツ 古 典 文 学					
	ド イ ツ 近 現 代 文 学	小 黒 康 正		田 口 武 史		
仏 文 学	フ ラ ン ス 古 典 文 学					
	フ ラ ン ス 近 現 代 文 学	高 木 信 宏		宮 崎 海 子		
言 語 学	言 語 基 礎 論					
	理 論 言 語 学	上 山 あ ゆ み				
	記 述 言 語 学					
	言 語 類 型 論 学	下 地 理 則				
心 理 言 語 学	心 理 言 語 学			太 田 真 理		
	人 文 情 報 学			中 川 奈 津 子		

土 持 貴 士
蛭 沼 芽 衣
岩 元 恕 文
後 藤 真 理 子
水 谷 亮 介
Daniel CORY GALLAGHER

* [] は、人文科学研究院以外の所属で人文科学府を担当している教員である。

人間環境学研究院

2026（令和8）年4月1日現在

部門名	講座	研究分野	教授	准教授	講師	助教
人間科学部門	共生社会学	計量社会学				
		地域社会学	高野和良			
		福祉社会学			井上智史	
		家族社会学	山下亜紀子			
		社会人類学	飯嶋秀治			
	心理学	宗教人類学			高橋沙奈美	
		記憶心理学				
		知覚心理学	光藤宏行			
		感性認知学			山本健太郎	
		計量心理学	中村知靖			

*本欄は、人間環境学研究院所属で文学部の授業を担当している教員の一覧である。

職員数・学生定員・在籍学生数・外国人留学生数及び発行雑誌等

職員数

●教育職員数

2026（令和8）年4月1日現在

教授	准教授	講師	助教	計
27	24	7	7	65

学部・大学院学生定員及び在籍学生数

●学部

2025（令和7）年11月1日現在

入学定員	在籍学生数				
	1年次	2年次	3年次	4年次	計
151	157 (70,87)	162 (74,88)	161 (79,82)	199 (92,107)	679 (315,364)

() は男子学生数と女子学生数（内数）

●大学院

2025（令和7）年11月1日現在

項目	修士課程				博士（後期課程）				
	入学定員	在籍学生数			入学定員	在籍学生数			
		1年次	2年次	計		1年次	2年次	3年次	計
学府	56	45 (25,20)	51 (35,16)	96 (60,36)	28	17 (10,7)	15 (8,7)	47 (30,17)	79 (48,31)

() は男子学生数と女子学生数（内数）

外国人留学生数

2025（令和7）年11月1日現在

学部学生	大学院生	研究生	専修生	特別聴講学生	特別研究学生	計
8	57	11	0	21	2	99

九州大学文学部内発行雑誌

2025（令和7）年4月1日現在

	ISSN*	誌名	発行者	担当部門	刊行数
1	0492-8199	哲学年報 Annual of Philosophy	人文科学研究院	哲学部門	年1回
2	0386-9326	史淵 Journal of History	人文科学研究院	歴史学部門	年1回
3	0387-2823	文学研究 Studies in Literature	人文科学研究院	文学部門	年1回
4	0453-0217	Bulletin of the Faculty of Letters Kyushu University	人文科学研究院	全部門	不定期
5	1345-3904	九州大学心理学研究 Kyushu University Psychological Research	人間環境学研究院	人間科学部門	年1回
6	1346-2717	共生社会学 Sociology and Anthropology	人間環境学研究院	人間科学部門	年1回
7	2433-4855	The Journal of Asian Humanities at Kyushu University (JAH-Q)	人文科学研究院	広人文学	年1回

* International Standard Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）

各研究室刊行雑誌

2025（令和7）年4月1日現在

	ISSN*	誌名	発行者	担当研究室	刊行数
1	0285-774X	哲学論文集	九州大学哲学会	哲学・倫理学	年1回
2	1881-2074	南アジア古典学	インド哲学史研究室	インド哲学史	年1回
3	0385-6224	中国哲学論集 Studies in Chinese Philosophy	九州大学中国哲学研究会	中国哲学史	年1回
4	0288-6464	九州中国学会報 Studies in Chinese language, Literature and Philosophy	九州中国学会	中国哲学史・中国文学	年1回
5	0911-4211	デ アルテ de Arte	九州藝術学会	芸術学	年1回
6	0451-1638	九州史学 KYUSHU SHIGAKU	九州史学研究会	日本史学	年3回
7	0286-5939	東洋史論集 The Oriental Studies	九州大学東洋史研究会	東洋史学	年1回
8	0916-9601	年報朝鮮學 Annual Review of Korean Studies	九州大学朝鮮学研究会	朝鮮史学	年1回
9		地域調査報告	地理学研究室	地理学	不定期
10	0436-0982	語文研究	九州大学国語国文学会	国語学・国文学	年2回
11	0386-1910	文献探究	文献探究の会	国語学・国文学	年1回
12	0286-3715	中国文学論集 Studies in Chinese Literature	九州大学中国文学会	中国文学	年1回
13	0916-0256	九大英文学 31(1988)～前誌 CAIRN	九州大学大学院英語学・英文学研究会	英語学・英文学	年1回
14	0914-5842	九州ドイツ文学	九州大学独文学会	独文学	年1回
15	1348-1592	九州大学言語学論集 KUPL	言語学研究室	言語学	不定期
16		ポイエーシス	社会学・地域福祉社会学研究室 比較社会文化学府社会学系	社会学・地域福祉社会学	不定期
17	1881-7092	九州人類学会報	九州人類学研究会	比較宗教学	年1回
18	0386-9261	西洋史学論集 The kyushu Journal of Western History	九州西洋史学会	西洋史学	年1回

* International Standard Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）

国際交流 *International Exchange*

日本の国際化の進展とともに、文学部・大学院における国際交流も年々活発化し、教員の海外出張や海外研修、海外からの研究者訪問、本学学生の留学、海外からの留学生受け入れなど、盛んな交流が行われています。また中国文学、英語学・英文学、仏文学、独文学の各研究室には、特定プロジェクト教員（外国人教師）が配置されて教育・研究が行われています。

このような国際交流の基盤として、大学間における学術交流協定校は年々拡充されており、その数は36ヶ国・地域153機関（2025年1月現在）におよんでいます。

また、文学部と学部間の学術交流協定を結んでいる大学には、暨南大学（中国）とケンブリッジ大学（イギリス）があり、文学部・人文科学府と部局間の学術交流協定を結んでいる大学には、東義大学校（韓国）、ルール大学（ドイツ）、ヘント大学（ベルギー）があ

ります。

さらに、人文科学府の歴史学拠点コースでは、中国の北京大学、南京大学、復旦大学、山東大学、華東師範大学、中国社会科学院歴史研究所、韓国の釜山大学校、全北大学校、東亜大学校、韓国学中央研究院東北亜古代史研究所、イギリスのセインズベリー研究所、アメリカのボストン大学との間に、東アジア史研究コンソーシアムを構築して以来、教員・院生間の学術交流を深めてきました。その他、各研究室における国際交流も活発です。

日本が世界に占める位置、なかんずく九州大学がアジアに占める地理的・歴史的環境から、今後アジア近隣諸国をはじめ、欧米を含む世界各国との国際交流がますます盛んになっていくことでしょう。

【大学間学術交流協定校】(2026年1月現在、順不同)

●インド(2校)インド工科大学ボンベイ校、インド工科大学マドラス校、●インドネシア(4校)インドネシア大学、ガジャマダ大学、バンドン工科大学、ハサヌディン大学●韓国(23校)KAIST、韓国学中央研究院、高麗大学校、釜山大学校、梨花女子大学校、江原大学校、慶尚大学校、慶熙大学校、慶北大学校、ソウル大学校、西江大学校、成均館大学校、済州大学校、中央大学校、忠南大学校、全南大学校、全北大学校、東亜大学校、東国大学校、釜慶大学校、浦項工科大学校、延世大学校、漢陽大学●シンガポール(3校)シンガポールマネジメント大学、シンガポール国立大学、南洋理工大学●タイ(3校)タマサート大学、チュラロンコン大学、マヒドン大学、●中国(31校)華中科技大学、華南農業大学、華南理工大学、吉林大学、香港大学、香港中文大学、四川大学、上海交通大学、新疆師範大学、清華大学、西安交通大学、中国科学院大学、中国科学技術大学、中国人民大学、中山大学、東北師範大学、同濟大学、南開大学、南京大学、武漢大学、復旦大学、北京航空航天大学、北京師範大学、北京大学、遼寧何氏医学院、浙江大学、華東師範大学、山東大学、大連理工大学、香港科技大学、香港理工大学、●台湾(10校)国立台湾科技大学、台北医学大学、国立清華大学、国立政治大学、国立台湾師範大学、国立台湾大学、淡江大学、国立台北科技大学、工業技術研究院、国立陽明交通大学、●バングラデシュ(2校)グラミン コミュニケーションズ、ダッカ大学、●フィリピン(2校)アテネオ デ マニラ大学、フィリピン大学、●ベトナム(2校)ベトナム国家大学ホーチミン校、ベトナム国家大学ハノイ校、●マレーシア(2校)マラヤ大学、マレーシア・ブトラ大学、●モンゴル(2校)モンゴル科学技術大学、モンゴル国立医科大学●カンボジア(2校)カンボジアゴム庁、カンボジア林野庁、●ウズベキスタン(2校)ウズベキスタン国立大学、ウズベキスタン・日本青年技術革新センター、●ミャンマー(1校)ヤンゴン大学、●ブルネイ(1校)ブルネイ・ダルサラーム大学、●イスラエル(3校)エルサレム ヘブライ大学、テクニオン・イスラエル工科大学、テルアビブ大学、●トルコ(4校)アンカラ大学、中東工科大学、ビルケント大学、ボアジチ大学、●アラブ首長国連邦(1校)アラブ首長国連邦大学、●エジプト(2校)アインシャムス大学、アレキサンドリア大学、●南アフリカ(1校)ケープタウン大学、●アイスランド(1校)アイスランド大学、●英国(9校)ウォーリック大学、シェフィールド大学、ニューカッスル大学、バーミンガム大学、ブリストル大学、リーズ大学、ロンドン大学アジア・アフリカ学院、グラスゴー大学、ダラム大学、●オランダ(1校)ライデン大学、●スウェーデン(3校)ウプサラ大学、スウェーデン王立工科大学、ストックホルム大学、●ドイツ(8校)ハイデルベルク大学、ハノーバー獣医科大学、ハノーバー大学、ホーエンハイム大学、ミュンヘン工科大学、ヨハネスグーテンベルク大学マインツ、ルートヴィヒ・マクスミリアン大学(ミュンヘン大学)、アーヘン工科大学、●フランス(12校)エクス-マルセイユ大学、サントラル・スベレック、エコール・ノーマル・スーペリウール・パリ・サクレ、グルノーブル・アルプ大学、ストラスブール大学、ボルドーモンテーニュ大学、ボルドー建築景観学院、ボルドー国立農業技術学院、ボルドー政治学院、ボルドー大学、ポリテクニク・ド・ボルドー、国立東洋言語文化大学(INALCO)、●ベルギー(2校)ルーヴァン・カトリック大学、レウヴェン・カトリック大学、●ロシア(1校)サンクトペテルブルク大学、●ノルウェー(1校)オスロ大学、●オーストリア(1校)ウィーン大学、●アメリカ合衆国(20校)アラバマ大学バーミンガム校、アリゾナ州立大学、イェール大学、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、ヴァージニア工科大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、カリフォルニア大学デービス校、北アリゾナ大学、グローブシティ大学、ケンヨン大学、コーネル大学、サンノゼ州立大学、ジョージア大学、デューク大学、ハワイ大学マノア校、プリンストン大学、ペレア大学、メリーランド大学ボルチモア・カウンティ校、ロードアイランド大学、ワシントン大学、●カナダ(1校)クイーンズ大学、●チリ(1校)チリカトリック大学、●ブラジル(2校)サンパウロ大学、リオデジャネイロ連邦大学、●メキシコ(2校)グアダハラ自治大学、メキシコ国立自治大学、●オーストラリア(7校)オーストラリア国立大学、クィーンズランド大学、シドニー工科大学、ニューサウス・ウェールズ大学、ラトローブ大学、カーティン大学、モナシュ大学

【部局間学術・学生交流協定校】(2026年1月現在、順不同)

●韓国:東義大学校(人文大学)、韓国:昌原大学校(人文大学)、●中国:暨南大学(文学院)、●台湾:国立台湾大学(文学院)、●英国:ケンブリッジ大学(東洋学部)、●ドイツ:ルール大学ボーフム(歴史学部、東アジア研究学部)、●ベルギー:ヘント大学(芸術・哲学部)、●イタリア:ペルージャ外国人大学

学部卒業生・修士課程修了者の進路

学部卒業生の就職先は、公務員、教員をはじめとして、情報通信業、金融・保険業、卸売・小売業、製造業、教育・学習支援業など、多岐にわたっています。大学院進学者の割合は、例年15%前後となっています。

	卒業 者数	進 学 者 数	就 職 希 望 者 数	就 職 決 定 者 数	進 学 ・ 就 職 以 外 の 者	農 業 ・ 林 業 ・ 漁 業 ・ 鉱 業	建 設 業	製 造 業	電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業	情 報 通 信 業	運 輸 業 ・ 郵 便 業	卸 売 ・ 小 売 業	金 融 ・ 保 険 業	不 動 産 業	飲 食 店 、 宿 泊 業	生 活 関 連 サ ー ビ ス 業 ・ 娯 楽 業	医 療 、 福 祉	教育・学習 支援業		複 合 サ ー ビ ス 事 業	サ ー ビ ス 業	公 務 員		そ の 他	
																		教 員	そ の 他 の 教 育 ・ 学 習 支 援 業			国 家 公 務 員	地 方 公 務 員		
2023 (令和5) 年度 文学部																									
哲学	19	5	11	11	3			1	1				2			2					1	1	3		
歴史学	43	7	29	29	7			4	2			2	1	2					5	1		4	2	5	1
文学	31	5	24	24	2			3	3	2	2	2							2	1		2	1	6	
人間科学	57	8	45	45	4			3	2	10	2	3	6	2	2					3		4		4	4
計	150	25	109	109	16	0	0	11	2	16	4	7	11	4	2	2	0	7	5	0	11	4	18	5	
2024 (令和6) 年度 文学部																									
哲学	25	6	17	17	2		2			4		3							1		2	1	4		
歴史学	38	6	24	28	4			3	3	1	3	3	1		2			2	1		2	2	5		
文学	36	10	24	22	4			2		4	1	1			2	1	1	2			1	2	5		
人間科学	53	4	44	44	5		1	6	1	11		3	6		2	1	2				4	2	5		
計	152	26	109	111	15	0	3	11	1	18	5	10	10	1	0	6	2	5	4	0	9	7	19	0	
2023 (令和5) 年度 人文科学府																									
人文基礎	11	4	7	7	0				1	1	1					1		1	2						
歴史空間論	9	0	8	8	1					2			2						3				1		
言語・文学	15	7	7	7	1			2											3		2				
計	35	11	22	22	2	0	0	2	1	3	1	0	2	0	0	1	0	7	2	0	2	1	0	0	
2024 (令和6) 年度 人文科学府																									
人文基礎	10	4	5	4	2							1							1		1		1		
歴史空間論	9	3	6	6													1	3	2						
言語・文学	11	6	5	4	1					2									1	1					
計	30	13	16	14	3	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	5	3	0	1	0	1	0	

文 学 部

1. 教育理念

文学部の諸学問の根本は、私たちが用いる言葉を通じて、人間の本質とその営為を探究することにあります。ここで言う言葉とは、単なる情報伝達的手段ではなく、人間の精神文化を培い、表現し、蓄積する知の宝庫を意味しています。言葉に自覚的かつ批判的に関わる中で、人間存在の奥深さへと眼差しを向け、文化・歴史・社会の多様性を認識し、新たな人文学的知の創造に寄与していくことが、文学部の教育理念です。

2. 教育プログラム

教育の目的

文学部は、各専門領域の研究者である教員と学生とが教育と研究を通して研鑽を行い、人文学的な知識・思考方法を習得する活気に満ちた学部です。教育の目的は、人文学的教養と知性を身につけ、研究や仕事の場で活躍する優れた人材を養成し、社会に送り出すことにあります。

教育課程の特色

文学部は全体を一学科（人文学科）とし、哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースの下に21の専門分野が置かれています。学生は1年間基幹教育を受けた後、2年次からいずれかのコース・専門分野に所属し、専門分野の講義・演習を受講するとともに、文学部の全分野の多様な授業を履修することができます。そして最終的に、自らの関心に従って所属の専門分野からテーマを選び、4年間の勉学の集大成として、自力で卒業論文をまとめなければなりません。

人文学科の各コースの内容

● 哲学コース

哲学コースは、哲学・哲学史、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、美学・美術史の5専門分野から構成されています。東西の文化的伝統の中で、人類が生み出してきた様々な精神的所産（哲学・思想・宗教・芸

術にかかわる文献や作品）を、厳密かつ真摯に読解し、また思索することを通して真理の探求を行います。人類は東西の様々な文明圏において、多様な宇宙観・世界観・人間観・生命観・倫理観を創り出し、各時代を通じてそれを展開させてきました。また、生と死、老いと病いを見つめることで、各種の宗教を生み出し、信仰の諸形態を作り出してきました。さらに、崇高なるものを希求して豊かな美の世界を展開してきました。哲学コースを構成する各専門分野では、人類が生み出してきたこれらのものを、現代が抱える諸問題（環境問題・生命倫理・民族問題など）をも視野に入れて、主として文献と史資料に基づいて研究しています。

● 歴史学コース

歴史学コースは、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明学の6専門分野から構成されています。歴史学は、過去の探究と現代の認識との（さらには未来への見通しとの）間の相互対話の中でなされる精神的営みです。つまり、現代社会の成り立ちへの関心、現代とそれ以前の「異文化」社会との異質性・同質性への関心を重視する学問です。本コースは、特定の地域と時代における社会（経済・政治・文化の総体）の特質と相互間の共通性を、批判精神をもって実証的に、また理論的に解明することに主眼をおいています。具体的には、先学の著作を批判的に読む中で自らの問題点を鍛え直してシャープなものとし、次いで、自ら直接に史資料を解読し史跡を調査することにより、自らの視角から、ある特定の地域と時代の社会像を復原することが求められます。この過程で、人間精神の多様性を認識するセンス、論理的思考力と独創性が養われることが期待されるのです。

● 文学コース

文学コースは、国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学の5専門分野から構成されています。日本・中国・英米・独・仏の言語や文学を研究するコースで、「文学部」として最もイメージしやすいコースと言ってよいでしょう。それぞれ古典から現代までの、具体的かつ多様な文学作品（詩・小説・

戯曲・思想的著作・批評など)を精査解説し、作品の背景をなす文化や、さらには文学そのもの(ないしは、いわゆる文学性)について省察を行います。本コースでは、日本語・中国語・英語・独語・仏語など、言葉そのものを研究対象とすることもできます。ちなみに、外国文学系の専門分野には、いずれもそれぞれの言語を母国語とする優秀な外国人教師が配置され、生きた外国語による授業が行われています。

●人間科学コース

人間科学コースは、言語学・応用言語学、地理学、心理学、比較宗教学、社会学・地域福祉社会学の5専門分野から構成されています。人間を科学的に研究するコースで、社会と人間との関係の中から問題を発見し、仮説を立て、それを実験、調査、フィールドワーク、統計解析により実証するという実践的調査研究を行っています。人間の行動や心理、さらに個人と社会の相互作用にも関心を寄せ、いわば人間・社会研究の視点から教育・研究を進めており、現代社会のさまざまな現象を包括的に把握して、産業化、情報化、高齢化、国際化などをめぐって生じる問題の解決にも取り組んでいます。言語学、地理学、心理学、宗教学、社会学といった学問領域からなる本コースには、独自の学問研究の成果が期待されています。

3. 求める学生像

文学部では、自ら問題を見出し、筋道を立てて思考し、精確に表現できる学生の育成を目指しています。そのためには、自らの足で歩き、目で見、手で触れ、他の人々と対話しつつ、自らの考えを発展させていく姿勢が大切です。それゆえ、文学部で学ぼうとする者は、何よりも次の3つの資質を備えていることが望まれます。

- ・言葉への強い興味、とりわけ、文学作品や古典に対する感受性
- ・人間への飽くなき好奇心と、「私とは何か?」という真摯な問いかけ

- ・文化・歴史・社会といった、世界の多様性への開かれた関心

4. 入学者選抜の基本方針

文学部は高等学校の教育課程を尊重し、受験生の基本的知識、論理的思考力、表現能力を重視しています。

大学入学共通テストにおいては、幅広い基本的知識の習得を見るため、国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語を課しています。

前期の一般入試においては、より深い知識と論理的思考力を見るため、国語、地理歴史、数学、外国語を課し、マークシート方式の大学入学共通テストを補完する形で、記述式の問題を中心に出題しています。後期の一般入試においては、論理的思考力と表現能力を見るため、小論文を課しています。

国際コースについては、総合型選抜Ⅱを採用し、第1次選抜及び第2次選抜により行います。第1次選抜は、提出された調査書又は調査書に代わる書類及び志望理由書の総合評価により選抜を行います。第2次選抜は、第1次選抜の合格者に対し、英語小論文、英語による個人面接及び大学入学共通テストの成績の総合評価により行います。

令和8年度入学試験から、学校推薦型選抜を採用し、第1次選抜及び第2次選抜を行っています。

第1次選抜は、提出された推薦書、調査書又は調査書に代わる書類及び志望理由書の総合評価により選抜を行います。第2次選抜は、第1次選抜の合格者に対し、大学入学共通テスト及び個人面接の成績の総合評価により行います。

コースの目的

九州大学文学部は、平成30年4月に国際コース（入学定員10名）を設置し、英語による小論文、面接を含む、独自の入試を行い、学生を受け入れてきています。世界の一体化（グローバル化）がますます進んでいる昨今、日本語だけでなく、複数の外国語を用いて自らの知を磨き、その知を世界に向けて発信する力が求められています。国際コースでは、日本語と複数の外国語に自覚的かつ批判的に関わる中で、①人間存在の奥深さへと眼差しを向け、②文化・歴史・社会の多様性を認識し、③新たな人文的知の創造に寄与する人材の育成を目指しています。

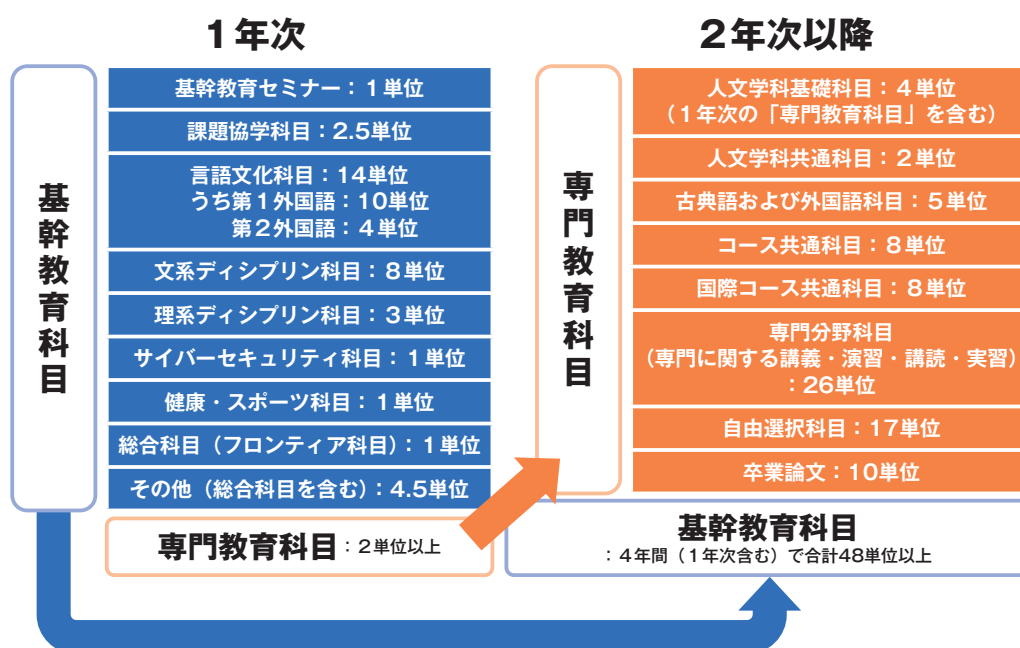
アドミッションポリシー

文学部のアドミッションポリシー（12-13頁）に加えて、国際コースには独自のアドミッションポリシーがあります。特に次のような資質を備えていることが望まれます。

1. 日本語と、複数の外国語への強い興味、ならびに文学や思想に対する感受性
2. 世界の多様な文化・歴史・社会への開かれた関心
3. 将来国際人として活躍することへの意欲

コースの特徴

国際コースの「コース」の概念は、従来の文学部の4つの「コース」とは異なり、1年次から独自の課程が存在し、2年次から、従来の「4つのコース」に分かれます。



国際コースの特徴としてはまず、1年次から基幹教育にプラスする形で、独自の課程（共創学部1年生にも開講されるIntensive Englishの授業）を履修し、英語の運用能力を飛躍的に高めるといふことがあります（第2外国語も習得します）。国際コース以外の文学部生は、1年次に第1外国語、第2外国語を合わせて8単位修得することが必要ですが、国際コースの学生は14ページの図にあるように、第1外国語10単位、第2外国語4単位の合わせて14単位を修得することが要件で、1年次に外国語の能力を飛躍的に高めます。2年次以降も、英語・第2外国語の学習に続いて（あるいは並行して）、第3外国語を習得することができます。

2年次からは国際コース以外の文学部生と同じく、哲学・歴史学・文学・人間科学の4つのコースの中の21の専門分野から、1つの専門分野を選んでその研究室に進学します。国際コースの大きな特徴としては、英語で行われる日本の歴史、美術と視覚文化、文学と言語、宗教と哲学、国際的な日本学の分析についての授業を選択必修科目として履修し、国際的な場で日本の文化を発信する能力を身につける、といふことがあります。これは14ページの図の「国際コース共通科目」に含まれるもので、International Humanities I～Xとして、次のような副題の授業が開講されています。

Introduction to Japanese History I～II

Introduction to Japanese Literature and Languages I～II

Introduction to Japanese Art and Visual Culture I～II

Introduction to Japanese Religions and Philosophy I～II

Analyzing International Scholarship on Japan I～II

これらは、国際的な場で日本の文化を発信する能力を身につけるといふ、国際コースの重要な目的に沿ったものです。これら以外にも、外国語でなされる授業や、外国語の文献等を対象とする授業の履修が推奨されます。

留学も強く推奨され、旅費援助等のシステムも構築中です。また文学部の一般学生が1年間留学した場合、4年間での卒業は難しくなりますが、国際コース学生が留学すると、「国際コース共通科目」に含まれる「人文学課題探求演習I～II」として、期間に応じて留学それ自体に単位が与えられるので、4年間で卒業することも可能になります。また、専門性の高い教育を受けているため、留学先でも自分の学ぶ対象や活躍の場所をしっかりと定めることができます。カリキュラムや留学等について、いつでも相談できるような体制を構築しています。

●従来の「文系4学部副専攻プログラム」は、2023年度より「人社系副専攻プログラム」へと拡充されました。

戦後の日本や世界の政治や経済を支えてきた枠組みが次々と崩れ不安定化し、文化的・宗教的混乱と知的動揺が世界全体に広がりつつあります。こうした不透明な現代社会において、私たちは一体全体、何を学び、それを個人や社会の未来にどう活かしていけばよいのでしょうか。

こうした根源的な問いかけに対して、人文学・社会科学が果たすべき役割はますます大きくなっています。とはいえ現代社会の新しい潮流は、これまでと同じ学問的な枠組みや学び方では正しく把握できないかもしれません。そこで九州大学の文系4学部(文学部・教育学部・法学部・経済学部)は、2018年度以来、それぞれの学問分野に蓄積された知的資産を相互に解放し、体系的に提供する「文系4学部副専攻プログラム」を実施してきました。2023年度からは工学部建築学科も加わり、「人社系副専攻プログラム」へと拡充されました。

副専攻プログラムにより、文学部で学ぶ深い専門性に加え、学部の枠を超えた人文・社会科学分野の知的広がりを獲得することができます。プログラムは、専門教育が始まる2年次からスタートします。「横断型」と「専門領域型」に分かれ、それぞれの型で複数の魅力的なプログラムが提供されます。

修了要件を満たした学生には、卒業時に、自らが所属する学部の学位に加え、副専攻プログラムの修了証が授与されます。これまで、2020年度に17名、2021年度に24名、2022年度に20名の修了者が出ています。また、各プログラムの成績優秀者には、優秀賞が授与されます。

横断型プログラム

大学入学後に、文学部の専門教育を学ぶ中で、さらに「歴史」「アジア」「情報」「ビジネス」といった現代社会を解く重要なテーマに関心を持った知的好奇心旺盛な学生に対して、文学部に籍を置いたまま2年次より上述のテーマに関して、5学部が提供する科目を広く体系的に学ぶ機会を提供します。

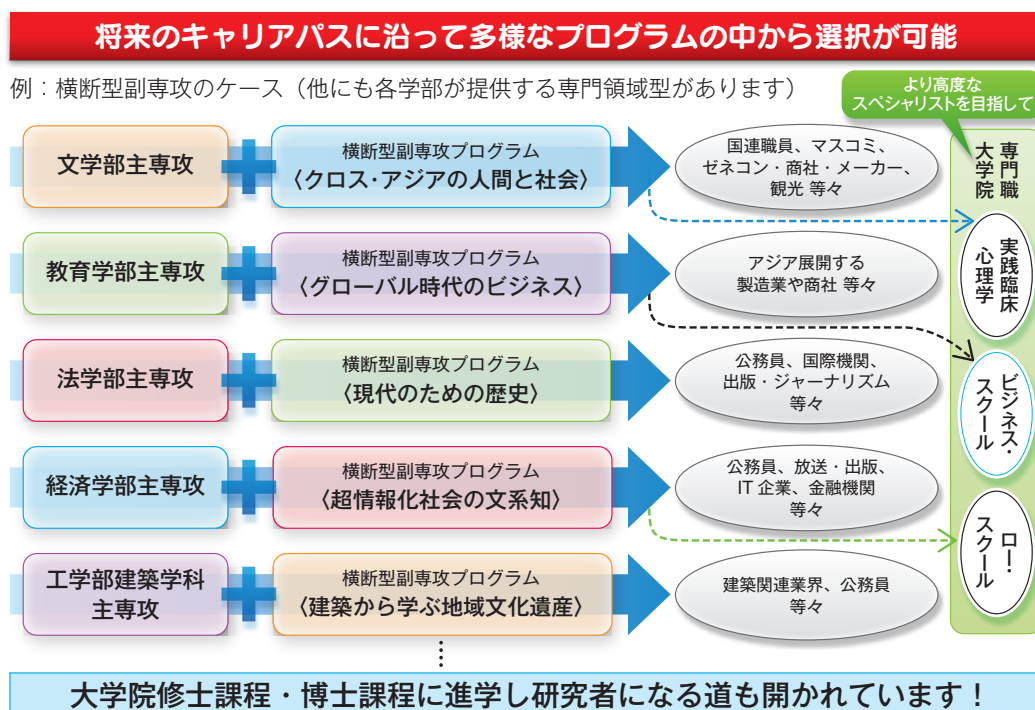
専門領域型プログラム

大学入学後に、文学部の専門領域を学ぶにつれて、さらに他の学部の専門領域にその知的好奇心が広がることはよくあるケースです。本プログラムは人文・社会科学系の分野を中心とした他学部の専門領域をより深く学びたいと考える学生に対して、文学部に籍を置いたまま2年次より他学部の専門領域を体系的に学ぶ機会を提供します。

人社系副専攻プログラム特別入試 (大学院クロス入試)

「人社系副専攻プログラム」において、他学部が提供する科目や演習（ゼミ）で学ぶ中で、当該学問分野をさらに大学院で深く学びたいと考える履修生向けに「副専攻プログラム特別入試」（大学院クロス入試）が実施されています。この特別入試は、自らが所属する学部において深い専門性を身につけたうえで、人文・社会科学系の別分野の大学院においてさらに専門性を追求し、「総合知」の獲得を目指す学生向けに、特別にアレンジされた入試です。

人文科学府では、副専攻プログラムの修了者（見込みも含む）を対象に、修士課程入学試験で「副専攻プログラム特別入試」を実施しています。



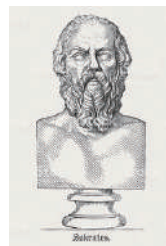
哲学・哲学史 研究室



Hegel



Leibniz



Socrates

人間と存在の本源を どこまでもたずねゆく道…。

哲学することは古来より、驚きや懐疑や不安から始まる。

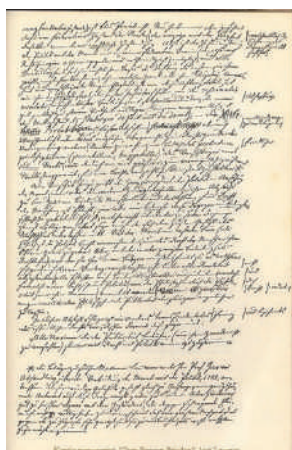
しかも驚きや不安をその根源から問い直そうとして哲学する。なぜ私がこの世に生きているのだろうか、なぜ物事は存在しているかえって無ではないのだろうか、なぜ人を殺すのは悪いのだろうか、なぜ科学は環境問題を科学によって解決しようとするのであろうか。哲学的な問いかけは、けっして抽象的な現実離れしたものではなく、むしろ根源的かつ全体的に問うことこそが、専門的かつ部分的に問うことよりもいっそう切実で具体的な問い方なのである。

研究室は、古代ギリシア哲学、中世哲学、及び近代・現代哲学の三つないし四つに大別されるとはいえ、それらは言わば多様にして一と言うべく、根本においては一つの愛智（ピロソ피아）、すなわち智（ソ피아）を愛し求める営みである。学部生と大学院生の哲学する一つの共同体として哲学研究室は、自由な雰囲気のもとに、それぞれの関心を尊重しつつ、しかも相互の対話・学的な交わりを大切にしている。

研究室では、哲学することの楽しみと醍醐味を実現するために、次のような仕方で研究や教育を行っている。第一に、哲学の原典を、例えば古代のプラトン、アリストテレス、中世のアウグスティヌス、トマス・アキナス、近代のデカルト、ヒューム、カント、ヘーゲル、現代のニーチェ、ハイデッガー、ウイットゲンシュタイン、メルロ＝ポンティ、レヴィナスなどのテキストを厳密に読み解くこと、第二に、各自の成果を口頭発表や論文の形にまとめて、自由に真剣な討論の場を創っていること、第三に、恒例行事として夏には温泉に浸かりながら二泊三日の九重・雲仙合宿をしたり、あるいはしばしば深更までシンポジウム（饗宴）をしたりすることである。



カント『純粋理性批判』第1版扉



カントの手稿「永遠平和のために」

倉田 剛

KURATA Tsuyoshi

哲学講座/教授

専門: 哲学基礎論

専門分野: 現代英語圏の分析形而上学・形式存在論、および十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての「オーストリア哲学」を主な研究領域とする。

主要業績: 『現代存在論講義Ⅰ—ファンダメンタルズ』(新曜社、2017年)
『現代存在論講義Ⅱ—物質的对象・種・虚構』(新曜社、2017年)
『日常世界を哲学する—存在論からのアプローチ』(光文社新書、2019年)
『ワードマップ現代形而上学』(共著、新曜社、2014年)

葛谷 潤

KUZUYA Jun

哲学講座/准教授

専門: 現代哲学

専門分野: フッサール現象学、メタ意味論、応用言語哲学

主要業績: 『志向性の基礎:『論理学研究』におけるフッサールのメタ意味論』(晃洋書房、2025年)
ハーマン・カペレン、ジョシュ・ディーバー『バッド・ランゲージ:悪い言葉の哲学入門』(葛谷ほか訳、勁草書房、2022年)

大西 克智

ONISHI Yoshitomo

哲学講座/教授

専門: 西洋哲学史

専門分野: 存在、自由、意志、悪、自己(意識/良心)をめぐる系譜学的探求を課題とする。哲学と倫理の、そして信と知の、渾然として未分化な淵源を探ることが最終的な目的である。

主要業績: 『意志と自由—一つの系譜学』(知泉書館、2014年)
『『エッセー』読解入門—モンテーニュと西洋の精神史』(講談社学術文庫、2022年)
『世界哲学史5—中世Ⅲ バロックの哲学』(共著、ちくま新書、2020年)
『デカルト全書簡集 第四巻(1640~1641)』(監訳、知泉書館、2016年)
『西洋哲学史Ⅲ—ポストモダンの前に』(共著、講談社選書メチエ、2012年)



雲仙夏合宿(2019年)

倫理学研究室



Max Weber

私・人間の存在と行為を、 自ら問う。

九州大学の倫理学研究室では、西洋と日本の倫理学・倫理思想が主に研究されています。授業では、古典から現代までのさまざまな文献を取り扱いますが、特に用いることが多いのは近現代のドイツ、英米および日本のものです。まずはこれらの文献を通じて、倫理的な概念・命題の基礎的な分析方法を修得するとともに、個々の倫理思想が時代・地域によって様々であることを学びます。

ただし、古典であれ現代であれ、文献は手掛かりにすぎません。本研究室では、研究テーマは個々人が自由に選ぶことを基本としています。道徳の言語を分析するもよし、倫理学史上の古典を分析するもよし、人生の意味を問うもよし、現代社会の具体的な諸問題を考察するもよしです。問題をとりまく倫理的判断や議論の構造を明晰に理解し、緻密に処理するための素養を授業では養います。培った倫理的教養を用いて、それぞれが自分の問題に向き合う主体性を重んじています。

倫理の問題は多岐にわたり、またそれらが関連しあっています。そのため、本研究室では、メタ倫理や規範倫理の諸問題、心の哲学や言語の哲学、諸宗教の倫理思想にも目配りをします。また、近年議論が盛んな脳死や臓器移植をめぐる生命倫理・環境倫理・科学技術倫理などのアクチュアルな問題に取り組む人もいます。さらに、聖書・クルアーン・論語・仏典などを比較思想的に学んだり、古代から近代にいたるまでの日本思想史を広く学ぶこともできます。

研究室は、気難しい道学者たちの集まりではなく、厳格な学問的姿勢をつらぬきつつも、率直に意見を言い合える雰囲気をもってしています。テキストを読みながら思索し、議論することが研究活動の中心です。

卒業生の進路はさまざまです。銀行やマスコミや広告代理店など一般企業に就職する人も多数いますし、公務員になる人、教育機関に勤める人、進学する人など多岐に渡ります。倫理学の専門職に就く人ばかりではありませんが、しばしば、進路先で直面するであろう特別な倫理的問題を卒業論文の研究テーマに選ぶといった形で、研究と就職が連動することもあります。進学に関しては、研究への熱意以外に動機を問いません。研究者を目指す人にもそうでない人にも広く門戸を開いています。院生は九州大学哲学会の活動として研究発表や学会誌『哲学論文集』への投稿を行うとともに、哲学倫理学研究会という発表会を主宰してもいます。また、日本倫理学会や西日本哲学会にも積極的に参加しています。



合宿にて (2025年9月)

横田 理博

YOKOTA Michihiro

倫理学講座/教授

専門: 近現代ドイツ思想、
近代日本思想、比較思想

専門分野: マックス・ウェーバーの比較宗教社会学の読み解きを基軸として、多様な文化の中での運命観、連帯観、行為の推進力などの実相を探究している。ニーチェやフロムや西田幾多郎や鈴木大拙についても考察している。

主要業績: 『ウェーバーの倫理思想—比較宗教社会学に込められた倫理観』(未来社、2011年)
「ニーチェからヴェーバーへ—『ルサンティマン』説をめぐって」(『ドイツ社会学とマックス・ヴェーバー—草創期ドイツ社会学の固有性と現代的意義』、時潮社、2012年)
「鈴木大拙の『大乘仏教概論』についての考察(上、中の一、中の一、中の一、中の一、下)」(『哲学年報』第79~83輯、2020~2024年)

飯嶋 裕治

IJIMA Yuji

基幹教育院/准教授

専門: 倫理学理論、日本思想史

専門分野: 倫理学の基礎的な理論研究として、規範性・意味という現象に注目し、解釈学的観点からの行為論・共同体論の研究に取り組んでいる。また現代の「われわれ」自身の道徳的理想像の探求の一環として、日本思想史・文化史研究も行なっている。

主要業績: 「和辻哲郎の解釈学的行為論に見る「個人」的存在の可能性—「資格」と「徳」を手がかりに」(『思想』1061、2012年)
Über die hermeneutische Struktur der „Normativität“ der Ethik Tetsurō Watsuji's – ausgehend von seiner Rezeption des Denkens Martin Heideggers (*Heidegger-Jahrbuch* 7, 2013)
『和辻哲郎の解釈学的倫理学』(東京大学出版会、2019年)

吉原 雅子

YOSHIHARA Masako

倫理学講座/准教授

専門: 現代倫理思想

専門分野: 道徳にかかわる命題の言語の観点からの研究。特に、規範命題と事実命題についての研究、決定論と責任の両立可能性をめぐる問題の研究。

主要業績: 業績「信念文が不透明である理由」(『科学基礎論研究』94、2000年)
「道徳法則の妥当性と個別主義」(『哲学年報』68、2009年)
「PAPの限界と因果的決定論」(『哲学年報』67、2008年)



Friedrich Wilhelm Nietzsche

過去の卒業論文の テーマの例

- ・行為の合理化とは何か
- ・ヒュームにおける理性と感情の関係について
- ・人格の同一性
- ・グラフィティアートにおける道徳と芸術的評価
- ・出生前診断をめぐる倫理的議論
- ・ウェーバーの「資本主義の精神」論から生き方を探る
- ・ニヒリズム克服の生き方をニーチェに探る
- ・ニーチェ思想と仏教思想の連関
- ・朱子の理気論の二元論的解釈に対する考察
- ・鈴木大拙による『大乘起信論』解釈と無明論について

インド哲学史研究室

仏教の源流へ

巷にあふれる仏教関連の書籍。しかし、多くの情報があふれ、何が真実かが見えにくくなるほど、一次資料に遡る作業が重要となる。本当のところ釈迦は何を言ったのか。インドにおける仏教の現実はどうだったのか。仏教を根本に遡って考えようとするとき、古典語であるサンスクリット語の知識は欠かせない。

人の意見を鵜呑みにせず、自分自身で思想を確認し納得する。サンスクリット語で書かれた文献に体当たり。日本における「印哲」の歴史は、「漢文を通した仏教」に満足せず、インドに始まる仏教の実際を再構築しようとしてきた作業の歴史である。インド文化圏を知的に旅するための装備一式を我々は提供する。

本講座は、インド仏教を中心に、インド文化を広く学べるよう配慮している。対象とする文献は、サンスクリット語・パーリ語・チベット語で書かれたものなら全てである。インドの古典語で書かれた経典・論書を中心に、東南アジアまで守備範囲とする。宗教・哲学のみならず、文学・医学・ヨーガ、また文献と密接に関連する美術など、カヴァーする分野は多岐に渡る。

演習・講義では、サンスクリット語などの語学と同時に、インド文化・仏教文化を広く学ぶ。また学生の興味と必要に応じて、パーリ語とチベット語の授業も開講する。各人の興味に応じて教員が卒業論文執筆を手厚くサポートする。(例えば、最近の卒業論文のテーマは、詩、密教、生理学、儀礼と様々である。)

インド学・仏教学は、国際交流も盛んである。本講座は、欧米のインド学・仏教学とつながっている。教員自身、片岡はインド・オックスフォード・ペンシルヴァニア・ウィーンに留学している。国際交流に興味ある人、いずれは海外に留学したい人にもお薦めの分野である。

専任教員は一人。片岡が各種のインド古典文献を担当。授業担当の非常勤講師のほか、1名の学振ポスドク (PD)、1名の学振DC1が集う少数精鋭のアットホームな雰囲気の中、インドの語学・文化・思想をじっくりと学べる研究室である。



片岡 啓

KATAOKA Kei

インド哲学史講座/教授

専門: インド思想史

専門分野: サンスクリット語で書かれたものなら何でも読みます。インド哲学・宗教全般、特に、聖典解釈学・認識論・仏教論理学が得意です。ヨーガ・詩文学・インド医学・密教・討論術も。サンスクリットの写本、ヒンドゥー教寺院の調査のためインド各地を旅行。現在は、ウィーン・トロント他の海外研究者と哲学文献の共同研究中。

主要業績: 『ミーマーンサー研究序説』(九州大学出版会、2011年)、『古典インドの祭式行為論』(山喜房、2004年)

Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2011年)、Meaning and Non-existence (John Taberとの共著、Verlag der Oesterreichischen Akademie der Wissenschaften, 2021年)

ひとこと: 遠回りなようですが、結局、原典まで遡らないと、自分が納得できないんですよね。あと、九重の夏合宿でのバーベキューは、やはり楽しいです。

〔最近の卒業論文のタイトル〕

「Hevajratra 注釈書 Yogaratnamālā 第一儀礼第三章及び第四章について」

「インドにおける神話的時間論について」

「古代インドの子供に関わる通過儀礼の研究」

「ヴィシュヌ・プラーナ第6部の和訳及び世界の帰滅について」

「ダットートレーヤ・ヨーガ・シャーストラ和訳研究」

「チャクラサンヴァラ・タントラ第一章～第四章和訳研究」

「古代インドの国王観」



中国哲学史 研究室



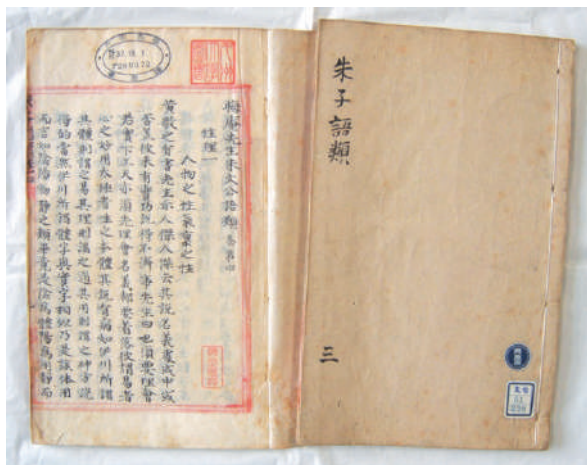
初代教授 楠本正継博士

中国思想の心を尋ねて — 学び考えるとは何か —

中国哲学史研究室では、春秋戦国時代・秦漢時代から、魏晋南北朝隋唐時代および宋元明清時代を経て、近現代に至るまでの中国の思想や文化はもちろんのこと、朝鮮や日本におけるそれらの受容と展開とをも含めて、幅広く研究している。哲学・宗教思想から政治・経済・社会思想や科学技術思想にいたるまで、扱う分野は多岐にわたる。すなわち凡そ中国におけるあらゆる思想の営為は、すべて本研究室の研究対象なのである。研究方法も多様である。伝統的なアプローチにとどまらず、社会科学の方法論や西洋哲学研究の成果を振り入れることはむしろ望ましい。ただし念のために言えば、原典の厳密な読解とそれに基づく深い思索とが、その前提として要求される。

本研究室で特筆すべきは、何と言っても初代教授の楠本正継博士以来、宋明儒学史研究の厚い伝統を誇り、日本におけるセンターの一角をなすことだ。宋明学関連漢籍の収蔵は質量ともに世界有数である。21世紀に入ってその価値はむしろ高まるばかりである。

研究室レベルの活動としては、年数回開催される「中哲懇話会」、年1回発行の『中国哲学論集』がある。また、研究室を会場にして、明代思想研究をはじめとする研究会が開かれており、近隣の大学等から研究者が集まって、原典講読や活発な討論が行われている。その場には大学院生も参加して大いに学的刺激を受けている。



朝鮮古鈔本『朱子語類』百四十卷

南澤 良彦

MINAMIZAWA Yoshihiko

中国哲学史講座/教授

専門：中国古代中世思想史

専門分野： 両漢魏晋南北朝隋唐時代の思想を研究している。特に魏晋から隋唐時代にかけての儒教思想の解明に努めている。近年は中国科学技術思想や日本漢学に研究分野を拡大している。

主要業績：『中国明堂思想研究—王朝をささえるコスモロジー—』（岩波書店、2018年）
「試論漢唐将作大匠—中国古代の科学技術と官僚制」（『第七届中日学者中国古代史論壇論文集』、中国社会科学出版社、2016年）
「日本に於ける『孔子家語』の受容—徳川時代を中心として」（『日本中国学会報』65、2013年）
「張衡の宇宙論とその政治的側面」（『東方学』89、1995年）

藤井 倫明

FUJII Michiaki

中国哲学史講座/准教授

専門：中国近世思想史

専門分野： 宋明時代の理学思想、特に朱子学の思想構造について研究。東アジアの朱子学にも関心を持ち、近年は山崎闇斎学派の朱子学についても研究を進めている。

主要業績：『朱熹思想結構探索—以「理」為考察中心』（台湾大学出版中心、2011年）
「宋代道学における聖人観の本質—道学的『無』の意味するもの」（『東方学』104、2002年）
「『流行』する『理』—朱熹の『理』再考」（『日本中国学会報』61、2009年）
「日本崎門学者的『知蔵』論探析」（『中正漢学研究』27、2016年）



慶長古活字版『史記』百三十巻



江戸写本『論語師説』十巻

美学・美術史 研究室



九州藝術学会誌「デアルテ」

美の理念を問い、 その諸相をあきらかにする

本研究室は、学部は美学・美術史、大学院は芸術学と名乗っていますが、いずれも哲学分野の「美学／芸術学」と歴史学分野の「美術史」という、2つの学問領域にまたがる研究内容を含んでいます。美について深く思索することと、芸術作品という眼前の美の様態を明らかにすることは、密接に関わり合う事柄です。美や芸術の理念やその現実の有様を、哲学的あるいは歴史的な観点から、様々なアプローチを通して、究め問いただしていくところに、私たちの研究室の特色があります。

教員陣は、研究対象と領域が古今東西にわたり、その研究方法も一様ではありません。価値観の多様化する今日、「芸術」「美術」「音楽」それ自体が既存の枠組みや概念では決して捉えることのできない広がりを持っています。しかし美学・美術史の研究は、まずは作品についてよく鑑賞し、関連する文献や哲学書の精読と作品の分析というアカデミックな方法を探りつつ、更にそこから作品をとりまく文化的・社会的な問題へと視野を広げ、今日的な問題についても思索を深めることへと向かっていくのです。多彩な教員は、それに応えうる陣容となっています。各教員の専門に関わる演習や講義のほか、フィールドワークを実践的に学ぶ実習の授業では、美術館・博物館・寺社などに出向き、作品を調査し、企画者や制作者とディスカッションを行っています。また、1950年以来、学生による自主的な研究会（金曜会）が毎週行われており、毎年恒例の研修旅行は関西・関東を中心に海外へも積極的に出かけています。

大学院生になると、個々の研究テーマを計画的に深め、ゼミや研究会における発表と議論を主導していきます。そこではなによりも、思索を続ける力と作品を理解する力、日常の研鑽が求められます。また、学内の九州大学芸術学研究会や当研究室が事務局をつとめる九州藝術学会、あるいは美学会や美術史学会、日本音楽学会、日本映像学会などにおいて、研究成果を積極的に発表しています。卒業生の多くは全国各地の大学や美術館・博物館で活躍しています。



令和3年度の研修旅行 大塚国際美術館

東口 豊

HIGASHIGUCHI Yutaka

芸術学講座/准教授

専門: 美学、音楽学

専門分野: 近現代ドイツ美学における自然の問題について研究。また、音楽やサブカルチャーもカバーする。更に美学史研究を土台にしつつ、藝術体験の存在論や社会学、先端技術の感性論等に関する新しい美学思想の構築を目指している。

主要業績: 「仮想と現実の狭間で—藝術受容の形態から見た虚構世界の意義—」(『AR技術の発展に伴う芸術学の変容』研究成果報告書、2024年)

“Can AR Technologies Have an Impact of the Definition of Art?” (AM Journal of Art and MediaStudies, No.20, 2019)

「Th・W・アドルノの音楽言語論における「沈黙」」(『哲学年報』第69輯、2010年)

“The Aesthetics of Periphery without Center—A New foundation of the Aesthetics of Nature” (International Yearbook of Aesthetics, Vol.5, 2002)



左 Rolleiflex 2.8C 右 Zeiss Ikon, Contessa 35



大作曲家の楽譜たち

伊藤 拓真

ITO Takuma

芸術学講座/准教授

専門: 西洋美術史、美術批評史

専門分野: イタリア・ルネサンス美術を中心に研究を行っている。ルネサンス期の美術は、その後の西洋における美術の在り方を形作ったともされている。その展開の歴史的・地理的特殊性を、具体的な作品および美術批評の分析によって跡付けることを目指している。また、学問領域としての美術史学の確立・発展にルネサンス美術研究が果たした歴史的役割を再検討し、今後の研究に活用したいと考えている。

主要業績: 『西洋美術史における「古典」の創出』(共著、中央公論美術出版、2021年)

“Ghirlandaio Brothers Reconsidered: The Master of the Saint Louis Madonna as Young Benedetto Ghirlandaio”, Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, LXXXIII (2020)

『オリジナルとコピー:16世紀および17世紀における複製画の変遷』(共著、三元社、2019年)

『ルネサンス期トスカナのステンドグラス』(中央公論美術出版、2017年)

石井 祐子

ISHII Yuko

基幹教育院/准教授

専門: 西洋美術史、芸術学

専門分野: 西洋近現代の美術の中でも、特にシュルレアリスムの美術をめぐる諸問題について研究。両大戦間の展覧会活動や、コラージュの理念と実践、シュルレアリスムの国際化と日英での受容など、様々な観点から考察を進めている。近年は、イギリスのモダン・アートと趣味論の関わりにも関心を広げている。

主要業績: 「「海外超現実主義作品展」(1937年)における複製写真展示の意義:シュルレアリスム「国際」展の観点から」(『藝術研究』33、2020年)

Michael Richardson, Dawn Ades, Steven Harris, Krzysztof Fijalkowski, Georges Sebbag (eds.), The International Encyclopedia of Surrealism, London: Bloomsbury, 3 vols, 2019.

『コラージュの彼岸: マックス・エルンストの制作と展示』(ブリュッケ、2014年)

「その道は、長いというより広い:1930年代のヨーク・ストリートにみるイギリスにおけるシュルレアリスム受容の一側面」(『藝術研究』28、2015年)

日本史学研究室



「世界人物図巻」より「琉球人」
(附属図書館所蔵)

世界史的規模の斬新な構想と 堅実な実証

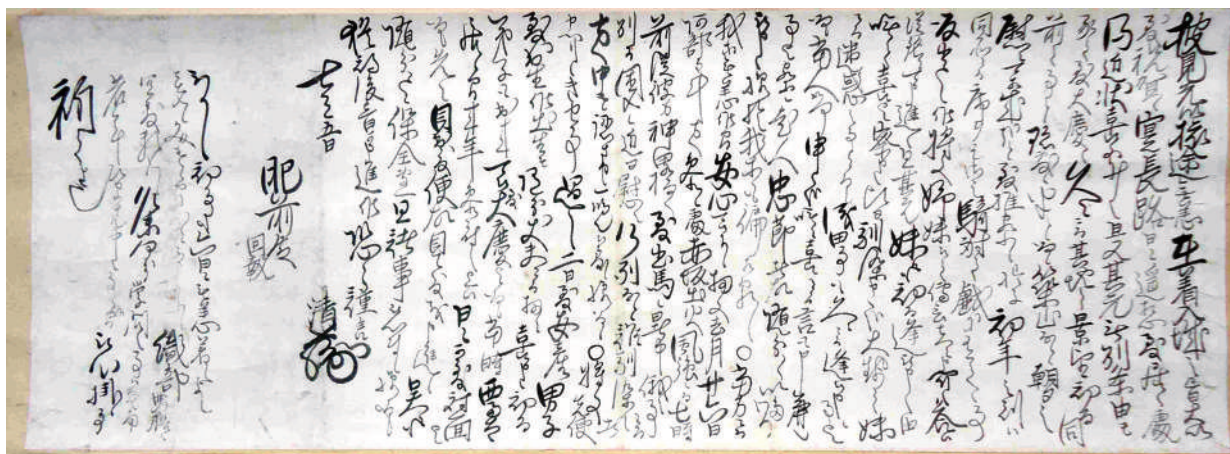
日本史学研究室は、1925年の創設以来、100年を越える歴史を有し、これまでに卒業生1,363名、修士課程修了生216名、博士後期課程修了生25名を輩出してきた（2025年3月現在）。教員・大学院生・学部生等が毎年60～70名ほど在籍する、活気に満ちあふれた研究室である。

国内史的分野とともに国際交流史研究の伝統が特色である。学生は全時代を見通しつつ、各自選択したテーマについて、歴史の「読み手」から「書き手」にまわることが要請される。そのため、講義・演習のほか、所蔵の史資料にもとづく実習、史料収集・整理などのフィールドワークが課され、春秋の構想発表会などを通じて卒業論文作成のコツを身につける。成績面では卒業論文が最も重視される。

学部在学中に中学校教諭一種免許（社会）・高等学校教諭一種免許（地理歴史）、学芸員資格を取得することができる。卒業後、専門知識を活かして教員・学芸員として活躍する者や、官公庁・民間企業の一般職として活躍する者が多い。

修士課程に進学した者は、少人数で濃密な議論を闘わせる授業や論文指導を通して、高度の専門知識と洗練された技倆を身につける。学部卒業時に中学校・高等学校一種免許を取得していた者は、所定科目の修得により専修免許を取得することができる。

博士後期課程に進学した者は、博士（文学）の学位取得を目指して研究に没頭する。近年は、学籍を置いたまま、高等学校教員・博物館学芸員などとして活躍する者も増えている。修了後、大学等研究機関の研究職として活躍する者も多い。



「松浦静山書状」(年不詳7月5日付, 当研究室所蔵)

岩崎 義則

IWASAKI Yoshinori

日本史学講座/准教授

専門: 日本近世史

専門分野: 大坂銅座の沿革と意義を柱とする近世の銅流通、および秋田・別子等の鉱山、更には貿易都市長崎の研究をすすめている。また、平戸藩の政治と文化について、楽歳堂文庫の書籍類を中心に研究を進めている。

主要業績: 『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書 資料編3 藩政資料』(長崎県、2013年)
“THE AKITA DOMAIN AND OSAKA MERCHANT HOUSES AT THE TIME OF THE ESTABLISHMENT OF THE MEIWA COPPER AGENCY”, 『Trade and Commerce in the Eastern Chinese Sea: Early Modern Sino-Japanese Copper Trade 1650-1850』, Keiko Nagase-Reimer, Brill, 2015.

荒木 和憲

ARAKI Kazunori

日本史学講座/准教授

専門: 日本中世史

専門分野: 中世日本と東アジア諸地域との交流史を研究している。特に朝鮮半島との交流史について、対馬の地域史と結びつけて理解するよう努めている。また、九州政治史、海上交通史、東アジア比較古文書学などにも取り組んでいる。

主要業績: 『中世対馬宗氏領国と朝鮮』(山川出版社、2007年)
『対馬宗氏の中世史』(吉川弘文館、2017年)
『中世日本の国際交流における海上交通に関する研究』(国立歴史民俗博物館研究報告223、編著、2021年)



日本史学実習の風景

国分 航士

KOKUBU Koji

日本史学講座/講師

専門: 日本近現代史

専門分野: 明治期以降の天皇・皇室制度について、法と政治という観点から研究を進めている。特に、明治後期・大正期に行われた皇室制度改革、議会制と天皇・皇室制度の関係、東アジア社会における恩赦制度などに関心を持っている。

主要業績: 「明治立憲制と「宮中」」(『史学雑誌』124編9号、2015年)
「大正初期の「剰余金支出」問題」(『史林』98巻3号、2015年)
「大正期皇室制度改革と「会議」」(御厨貴編著『天皇の近代』、千倉書房、2018年)

内田 敦士

UCHIDA Atsushi

日本史学講座/講師

専門: 日本古代史

専門分野: 日本古代の仏教儀礼について研究している。日本の仏教とそれに関する文化を、東アジアだけではなく、アジア全体の中に位置づけることで、日本の国家と社会の特質を明らかにすることを目指している。

主要業績: 「南京三会の成立に関する再検討」(『日本歴史』795、2014年)
「平安時代の仁王会」(『ヒストリア』265、2017年)
「称徳朝における章疏の勸経」(『仏教史学研究』63-1、2020年)



『世界人物図巻』より「阿蘭陀船」(附属図書館所蔵)

東洋史学 研究室



海外の研究者による講演会

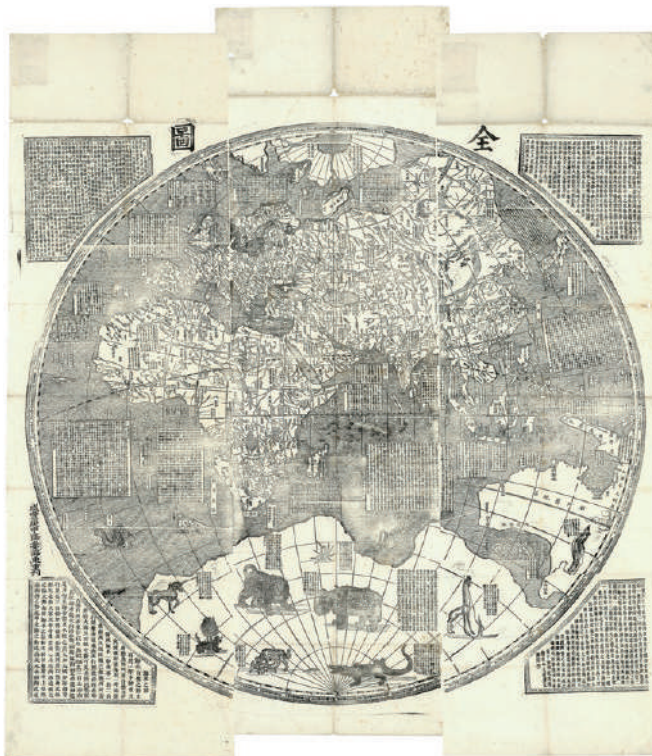
アジアの今を 四千年の歴史に学び・考える

東洋史学研究室は、九州福岡が地理的・歴史的に中国大陸や朝鮮半島との交流の窓口であったことに注目しつつ、中国史を中心とした歴史研究を重視してきました。

その研究は中国史料を中心として行われます。しかし、一口に中国史研究といっても、殷周、春秋・戦国、秦漢、三国・晋南北朝、隋唐、五代宋、遼金元、明清、近現代と区分される時代ごとに、文献資料の文体も違えば、木簡・竹簡・紙といった文書資料の材質にも違いがあり、そうした文献資料の分析技術が必要となります。また歴史学一般にいえることですが、史料分析から歴史学的論理構成、歴史叙述の過程では地理学・社会学・人類学・考古学・宗教学・経済学・法学等の隣接諸学問の理解も求められます。

東洋史研究においては従来、古代以来の中国と周辺諸民族・諸国家との関係史や近代・現代中国史、及び、中国を中心とした東アジア世界史の考察・研究が重視されてきました。また、九州から朝鮮半島・中国大陸周辺の東シナ海から大陸南方、インドシナ半島、インドネシア諸島に至る環シナ海地域は古来中国商人とインド商人・アラビア商人との通商の世界であり、それに日本人も加わって複雑な地域社会・文化を形成してきています。

東洋史学研究室は、これまでこうした観点からの歴史学的考察に取り組み、数多くの成果をあげてきているところです。



「坤輿全図 全図」(東洋史学研究室蔵)
1674年にフェルディナント・フェルビースト(南懷仁)が北京で刊行した世界図を、
1850年にソウルで再刊したもの

中島 楽章

NAKAJIMA Yoshiaki

東洋史学講座/准教授

専門：中国社会史・東アジア海域史

専門分野：中国社会史では、文書史料なども活用して、宋元・明清時代の社会結合や、商業活動の展開を検討している。東アジア海域史では、15～18世紀の九州・中国・東南アジア海域の貿易・交流を、日・中・欧の史料を利用して研究している。

主要業績：『明代郷村の紛争と秩序—徽州文書を史料として』（汲古書院、2002年）
『徽州商人と明清中国』（山川出版社、2009年）
『寧波と博多』（共編著、汲古書院、2013年）
『南蛮・紅毛・唐人—一六・一七世紀の東アジア海域』（編著、思文閣出版、2013年）
『大航海時代の海域アジアと琉球—レキオスを求めて』（思文閣出版、2020年）
『アジアの海を渡る人々—一六・一七世紀の渡海者』（共編著、春風社、2021年）



広東省上川島、16世紀の密貿易拠点、フランシスコ・ザビエルの逝去地



安徽省南部、徽州盆地の村落（中国）



草原で馬群を放牧する遊牧民（モンゴル国ウブスハンガイ県）

朝鮮史学研究室



「朝鮮八道全図」

日本で唯一の専門研究室！ 朝鮮学の新たな構築へ

朝鮮半島にむきあう九州の地には、大陸と半島のヒトと文物がいきかい、文化遺産が蓄積しました。本研究室は、このヒトの交流と文化の蓄積の根底にある朝鮮の歴史・文化の探究をめざして、1974年の発足以来、研究・教育に大きな成果をあげてきました。近年、韓国・朝鮮への関心がたかまり、朝鮮半島をめぐる国際情勢も大きく動くなか、さらなる発展が期待されるところです。

これにこたえて本研究室では、国内外で刊行された研究資料を日本屈指の規模で架蔵しています。海外からの研究者の訪問や留学生も多く、研究室は国際的な交流の場となっています。教員・院生・学部生の各メンバーも、積極的に朝鮮半島やその他の関連地域におもむき、現地調査や学会参加、あるいは留学をつうじて、歴史の舞台に対する理解をふかめ、感性をみがいでいます。

また研究室では、九州大学朝鮮学研究会を組織して学術誌『年報朝鮮学』を刊行しているほか、自主的な勉強会も活発におこなわれており、各自のニーズに応じた学習が可能です。

その学問においては、史料を博搜し、これを精密に読解する堅実な文献実証を基礎にすえつつ、“書齋”から飛びだして現地の社会とふれあうことで、朝鮮半島に生きてきた人々の息吹が伝わってくる、“活きた歴史像”の構築をめざしています。朝鮮史学をこころざす皆さんも、ぜひ“行動派の本の虫”であってください。



朝鮮時代の文書作成マニュアル『儒習必知』（研究室架蔵）

専門: 朝鮮中近世史、 朝鮮半島の環境史

専門分野: 朝鮮中近世の国際関係や政治社会を研究。具体的には、東アジア諸地域との外交、文化交流、陸海の交通、およびそのもとで展開した国家の史的特質について追究してきた。近年は韓国で社会問題となった内水面の環境をめぐるヒトとの関係史について、漁撈、舟運などの資源利用を軸に考察している。

主要業績: 『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(山川出版社、2011年)
『中近世の朝鮮半島と海域交流』(編著、汲古書院、2013年)
『モンゴル覇権下の高麗—帝国秩序と王国の対応』(名古屋大学出版会、2013年)
『朝鮮の王朝外交—“ややこしさ”からの気づき』(編著、集英社新書、2026年)
「朝鮮時代の洛東江上流における官営漁梁と資源をめぐる相克—礼安県の事例から」(『朝鮮学報』259、2022年)



春の一日旅行(英彦山)

専門: 朝鮮近代史

専門分野: 植民地時代の朝鮮民族運動を研究。とくに、同時代の日本、中国、台湾の思想状況や運動との相互影響関係に着目しながら、朝鮮民族運動をグローバルな視点で描くことを目指してきた。それと並行して近年は、スポーツイベントや部活動を中心とする文化史、教育史研究も進めている。

主要業績: 『朝鮮独立運動と東アジア 1910-1925』(思文閣出版、2013年)
『帝国日本と朝鮮野球—憧憬とナショナリズムの隘路』(中央公論新社、2017年)
『韓国「建国」の起源を探る—三・一独立運動とナショナリズムの変遷』(慶應義塾大学出版会、2021年)



韓国での学生交流(全北大学校にて)

考古学研究室



佐賀県唐津市宇木汲田遺跡出土
銅剣・銅矛



長崎県壱岐市カラカミ遺跡土器
出土状況（弥生時代）

物質・人間・文化 —— 東アジアからの視点

日本の先史・古代文化を東アジアからの視野で研究している。近年では、北部九州の古墳時代遺跡の発掘調査を毎年実施している。また、韓国では資料調査を継続的に行うとともに、中国やモンゴル国での海外発掘調査を積極的に行っている。考古学研究室付設の陳列室には、九州考古学の基礎資料を大量に所蔵している。これは、本研究室が九州考古学の礎をなしたことを物語っている。



福岡県嘉穂郡桂川町大平古墳にて（2025年9月）



福岡県天神山古墳の発掘調査（2022年9月）

辻田 淳一郎

TSUJITA Jun'ichiro
考古学講座/教授

専門: 日本考古学

専門分野: 日本列島の古代国家形成過程に関する比較考古学的研究。物質文化の分析を基礎として、社会の複雑化の実態解明やその相対化を目指しつつ研究を行っている。

主要業績: 『倭の五王の時代を考える』(編著、吉川弘文館、2025年)
『鏡の古代史』(角川選書、2019年)
『同型鏡と倭の五王の時代』(同成社、2018年)
『鏡と初期ヤマト政権』(すいれん舎、2007年)



長崎県壱岐市カラカミ遺跡出土
半島系三韓土器・楽浪系土器

鈴木 舞

SUZUKI Mai
考古学講座/准教授

専門: 東アジア考古学

専門分野: 古代中国をはじめとする東アジア世界の形成過程について、青銅器など金属器の技術史的観点から研究。

主要業績: 『殷代青銅器の生産体制—青銅器と銘文の製作からみる工房分業—』(六一書房、2017)
『契丹金工品の調査と研究—日本所蔵コレクション資料を中心に—』(編著、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、2022) など



長崎県壱岐市カラカミ遺跡出土土骨



福岡県飯塚市山の神古墳出土土衝角付甗



福岡県刈田町番塚古墳出土土須恵器器台・壺

西洋史学研究室



長寿吉初代教授像（西洋史学研究室蔵）

時間の厚みを通して ヨーロッパを探究する

過去について考えることは、無限の可能性を秘めた「知の冒険」です。異文化や他者についての考察は、自身の省察と変容へと導かれる実践的行為でもあるのです。

西洋史学研究室は、九州帝国大学法文学部の発足時に設置された数少ない講座の一つです。明治以降の日本では、西洋文明を「模倣すべき」対象としてきたからですが、その後、日本の「西洋史学」は、世界でもまれな独自な変容を遂げ続けました。現在では、異文化としての欧米文明の実証研究を、世界中の同僚たちとともに押し進めるとともに、歴史学の批判的な検討、社会の中での歴史学の意義（公共性）などの諸問題を、理論的、実践的に問う「知の前衛」にも位置しています。

「九大西洋史」は、伝統的に、最新の問題関心や方法論を共有しながら、欧米と同じレベルの実証研究に早期から取り組んできました。また、欧米に多くの留学生を送り出すとともに、海外の学界、研究者との交流を続けてきた特異な研究室です。現在でも、学内外の多様な研究者たちとともに、共同研究や比較史などの試みを実践しながら、学界や社会に独自の貢献を果たしています。



研究室の辞典類



第一次世界大戦の犠牲者を追悼する記念碑
(ドイツ・コブレンツ=ギュルスのザンクト・セルヴァティウス教会)

足立 孝

ADACHI Takashi
西洋史学講座/教授

専門: スペイン中世史

専門分野: 中世盛期イベリア半島を時間的・空間的枠組みとし、征服=入植運動、封建制、商業といった、それぞれ固有の研究の伝統をもつ社会経済史的な問題系を、定住史的かつ空間編成論的な方法を駆使して一挙に連結すると同時に、現地文書館で猟した文書史料の綿密な分析にもとづく実証研究にとりくむことによって、マクロ・ミクロ両面からイベリア半島はおろか中世地中海史、ひいては西欧中世史そのものの刷新を模索している。

主要業績: 『辺境の生成: 征服=入植運動・封建制・商業』(名古屋大学出版会、2019年)
「14世紀前半バレンシア=アラゴン王国境界における村落共同体と流通回路: ピリャエルモータとプエルトミンガルボ①②」『史学研究』第310号(2021年)、第311号(2022年)
Une critique génétique du compte seigneurial: idéal et réalité de l'exploitation d'un domaine épiscopal de Huesca au XIIIe siècle, in Entre texte et histoire. Études d'histoire médiévale offertes au professeur Shoichi Sato (Paris, 2015)



研究室ゲーム大会の様子

今井 宏昌

IMAI Hiromasa
西洋史学講座/准教授

専門: ドイツ現代史

専門分野: 物理的・肉体的な暴力の経験が、時代状況とのかかわりの中でどのように変容し、また逆にその当事者や社会をどのように規定していったのかという問題関心から、第一次世界大戦後ドイツにおけるパラミリタリ(準軍隊)組織・義勇軍とそのメンバーのバイオグラフィを、経験史の観点から分析している。またこれと並行し、第一次世界大戦中に福岡県久留米市に設立されたドイツ兵俘虜収容所の世界を、「下からのグローバル・ヒストリー」の視点から再考している。

主要業績: 『暴力の経験史: 第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918~1923』(法律文化、2016年)
「ヴァイマル末期における「赤い伯爵」と労働者世界: 『下からのドイツ』をめぐって」水野博子/川喜田敦子編『ドイツ国民の境界: 近現代の時空から』(山川出版社、2023年)
「ドイツ義勇軍経験とナチズム運動: ヴァイマル中期における「独立ナチ党」の結成と解体をめぐって」鍋谷郁太郎編『第一次世界大戦と民間人: 「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響』(錦正社、2022年)
「ドイツ革命期における「武装せる市民」: ハレ住民軍を事例に」『軍事史学』(特集 一九二〇年代再考)第56巻第4号(2021年)
「ヴァイマルと向き合う: 戦後日本のドイツ研究における「教訓の共和国」」『ドイツ研究』(シンポジウム ヴァイマル100年: ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ)第54号(2020年)



卒論構想発表会の様子

イスラム文明史学 研究室

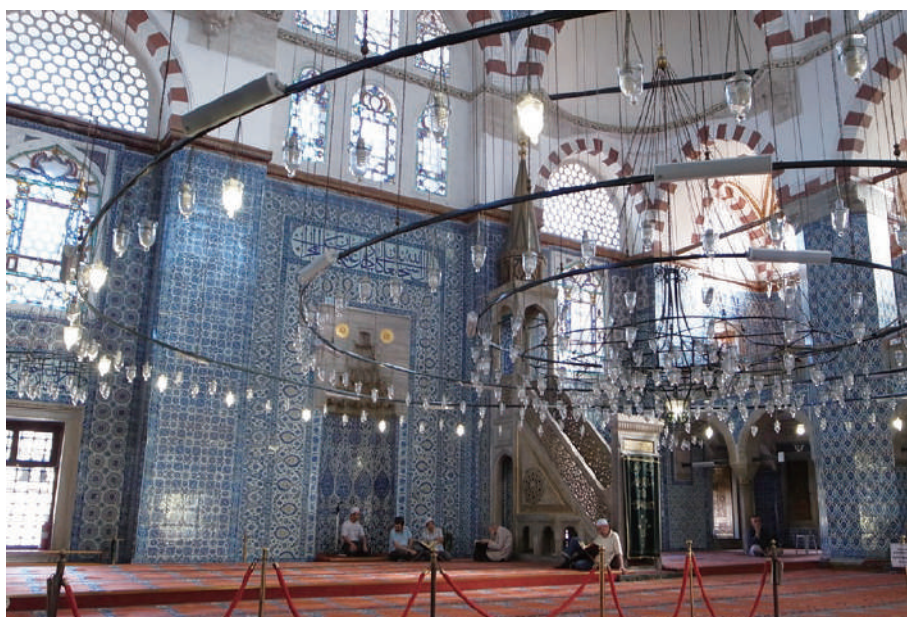


ダマスカスのモスク

我が国ではじめてつくられた イスラム文明史研究の拠点

イスラム文明は、地中海から中央アジアにいたる諸文明が交差することで生まれた、史上屈指の文明である。その核となるイスラムは、単に人々の心のよりどころとなるだけではなく、政治・経済・社会の諸制度の形成に中心的な役割を果たしてきた。本研究室は、このようなイスラム文明の諸現象を歴史学的に解明するために創設された。異なる文明の異なる意識や価値観と向き合うため、ここでは、何よりも一次史料にふれることを大切にしている。アラビア語、ペルシア語、トルコ語といった現地語史料を通じて、対象とする時代や地域社会のあり方を学ぶのである。

一方、自由闊達な研究が、本研究室のモットーでもある。教員の研究分野や授業内容にとらわれず、自ら新しい研究分野に挑戦し、新しい問題意識を開拓する意欲ある学生をこそ求めている。異文化の歴史に対する旺盛な好奇心をもち、自主性に富んだ諸君とともに、新しい歴史学を生み出したい。



トルコのモスク

清水 和裕

SHIMIZU Kazuhiro

イスラム文明史学講座/教授

専門: アラブ史、初期イスラム史

専門分野: アッバース朝を対象として政治史、軍事・行財政制度、そして社会における民衆の運動などを研究。近年はカリフ体制論を中心に、書記官僚による行政技術や、シーア派活動におけるシンボリズムのあり方などを検討している。

主要業績: 『イスラム史のなかの奴隷』(山川出版社、2015年)
『軍事奴隷・官僚・民衆—アッバース朝解体期のイラク社会』(山川出版社、2005年)
「ヤズデギルドの娘たち—シャフルバーヌー伝承の形成と初期イスラム世界」(『東洋史研究』67-2、2008年)

小笠原 弘幸

OGASAWARA Hiroyuki

イスラム文明史学講座/教授

専門: オスマン帝国史

専門分野: オスマン帝国を専門とし、特に帝国の前近代における歴史叙述のあり方について、ペルシア語歴史叙述との関係にも注意を払いつつ研究している。最近では、近代やトルコ共和国初期における歴史認識の問題についても考察を進めている。

主要業績: 『イスラム世界における王朝起源論の生成と変容—古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐって』(刀水書房、2014年)
『オスマン帝国—繁栄と衰亡の600年史』(中公新書、2018年)
『トルコ共和国 国民の創成とその変容—アタテュルクとエルドアンのはざままで』(九州大学出版会、2019年、編著)



研究室の風景



イエメンの街角



トルコの古書店

国語学・国文学 研究室



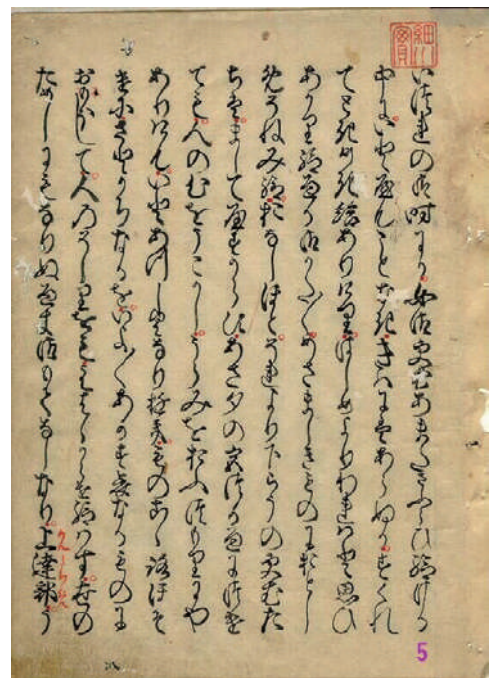
『伊勢物語』
(近世初期写、九州大学附属図書館支子文庫蔵)

文献からの出発

全国屈指の蔵書量を誇り、資料に即した実証主義的学風が本研究室の特色である。地方であることは、この情報化時代にあってもはやマイナスではなく、むしろ中央を相対化する視点をもたらしてくれると考えてよい。またグローバル化の時代でもあるが、母語やそれによって構築され蓄積されてきた文化に対する深い理解と明確な価値観が、より一層求められていると確信する（それらをことさら特別視し祭り上げる風潮には与しないが）。同時に世界への発信を急務と考え、海外からの留学生の積極的な受け入れにも努めている。

このような基本姿勢のもと、国語学（日本語研究）の分野では日本語の時間的変容（日本語史）と空間的変容（方言）の研究を中心とする課題に据え、これまでの学問的蓄積の継承・発展を期するとともに、時代の趨勢を踏まえた様々なアプローチを行っている。また、国文学（日本文学研究）では、堅実な文献学・訓詁注釈に立脚した実証主義を貫き、各時代にわたる文学作品の内実を解明するとともに、それをとりまく社会状況の精神史的意味の追究を行っている。

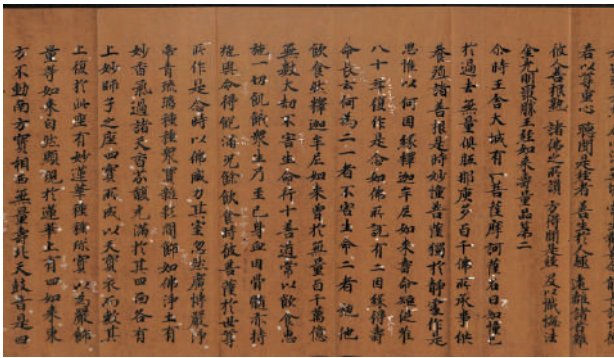
授業の多くは演習形式で行われ、資料の読解や、各自が持ち寄ったテーマについての討議が中心となる。大学院においては、修士論文や博士論文の目標をしっかりと定め、その進捗状況を定期的に発表することが課せられる。各自の研究テーマは自主性に任されており、提出される論文は時代・分野・方法も多種多様である。スタッフ一同は、教科書的知識の習得ではなく、新たな知識を得るための方法論、そして、真理にむかって自由に研究を楽しむ喜びを、ここで知ってほしいと願っている。



古活字版『源氏物語』
(近世初期刊、九州大学附属図書館蔵)



『山の幸』（1765年刊、九州大学附属図書館雅俗文庫蔵）



『金光明最勝王經』（奈良時代写、九州大学附属図書館春日文庫蔵）

川平 敏文

KAWAHIRA Toshifumi

国語学・国文学講座/教授

専門：近世文学・思想史

専門分野：17～18世紀における思想と文学の動態の研究。特に徒然草の受容史、俳文学史（俳論・俳文中心）、近世随筆、学者・文人の伝記研究など。

主要業績：『兼好法師の虚像—偽伝の近世史』（平凡社、2006年）

『徒然草の十七世紀—近世文芸思潮の形成』（岩波書店、2015年）

『徒然草 無常観を超えた魅力』（中公新書、2020年）

『武士の道徳学—徳川吉宗と室鳩巢『駿台雑話』—』（角川選書、2024年）

青木 博史

AOKI Hirofumi

国語学・国文学講座/教授

専門：日本語史

専門分野：語形成、ヴォイス、複文など、多岐に亘る文法現象の歴史的研究。中世末期言語資料の文献学的研究。

主要業績：『語形成から見た日本語文法史』（ひつじ書房、2010年）

『日本語文法の歴史と変化』（編著、くろしお出版、2011年）

『日本語歴史統語論序説』（ひつじ書房、2016年）

『文法化・語彙化・構文化』（共著、開拓社、2020年）

古川 大悟

FURUKAWA Daigo

国語学・国文学講座/講師

専門：古代語文法

専門分野：推量・推定の助動詞を中心とする古代日本語助動詞の研究。

主要業績：「助動詞マシの意味」（『国語国文』88-1、2019年）

「『推量』認識の史的展開」（『国語語彙史の研究 42』和泉書院、2023年）

「推量の助動詞の意味的体系性について—萬葉集の用例解釈から—」（『萬葉』237、2024年）

「古代語「む」の連体用法の意味について」（『日本語文法史研究7』ひつじ書房、2024年）

岡田 貴憲

OKADA Takanori

国語学・国文学講座/准教授

専門：中古文学

専門分野：平安時代物語・日記文学の研究。特に、『源氏物語』ほか作り物語の注釈的研究、および平安仮名日記の資料的研究。

主要業績：『『和泉式部日記』を越えて』（勉誠出版、2015年）

『ひらかれる源氏物語』（共編著、勉誠出版、2017年）

『『堤中納言物語』滴注』（共著、新典社、2023年）

『平安仮名日記本文考』（武蔵野書院、2023年）



『源氏物語歌絵』（近世中期写、九州大学附属図書館支子文庫蔵）

中国文学 研究室



研究室にて



春休みの研修合宿



研究室が刊行する機関誌「中国文学論集」

四〇〇〇年分の叡智と感動を あなたの人生の羅針盤として

「文明」という言葉は、中国を起源とする漢語です。本来は、文字、そしてそれを綴り合わせた文章によって人々を教化して国を治めることを言います。

では、「文学」という漢語は何を指すのでしょうか。——中国では黄河文明が発祥して以来、過去の重大事件や優れた人の言葉を、文字・文章で書き遺し、同時代を生きる人々や後世の人々への教訓、戒めにして来ました。例えば、儒教の祖である孔子が編纂したとされる中国最古の書物『書経』『詩経』は、国家や政治のあり方、人間の行うべき道のあり方を示す道標として学ばれて来ました。文字や文章から学ぶこと、これが「文学」という漢語の意味する所なのです。

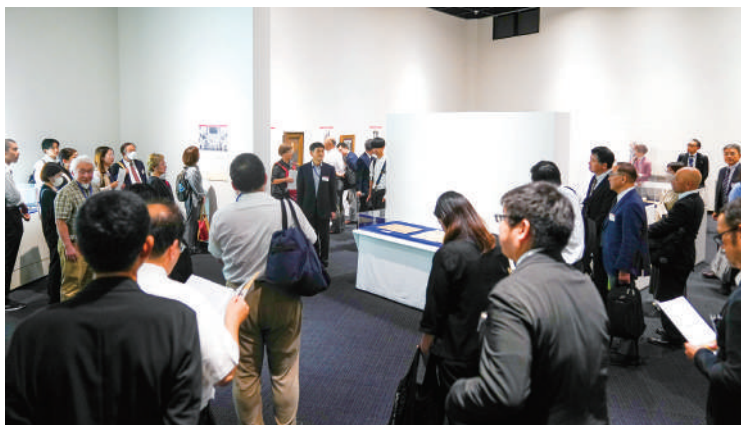
悠久の長い歳月をかけて、中国文学は、詩歌や散文、戯曲や小説など、さまざまなジャンルの作品をはぐくみました。恋の悩み、仕事の苦しきから、生きることの喜びまで、人生に対して先人達が思い巡らした洞察を、文字を辿りつつ共有し、時に思いもかけないひと言から学びを得るのも楽しいものです。

私たちの研究室では、中国の各時代のさまざま名作を原文で精読したり、作者の生い立ちや歴史背景を学びながら、作品に対する深い理解を得て行きます。時には教員と討論し、また学生同士で語り合いながら、広い視野を身につけてゆきます。そして学生自身が作品と向き合う中で、自分なりの解釈を見つけることを目指しています。

本研究室では、中国文化に対する幅広い知識と中国語の能力を修得することができます。また、中国文学を学ぶことは、日本を飛び出て異文化を知ることでもあり、日本の文化のルーツを知ることでもあります。まもなく100周年の歴史に達する本研究室の卒業生・修了生は、大学や高校の教員をはじめ、近年ではその語学力と柔軟な発想力を活かし、世界規模で展開する企業で活躍している人もいます。



九州大学本『三国志伝』の挿し絵



フジギャラリー「九州大学100年の中国学研究」(2025)

静永 健

SHIZUNAGA Takeshi

中国文学講座/教授

専門: 中国古典文学

専門分野: 漢魏六朝文学研究(『文選』『玉台新詠』など)、唐代文学研究(李白、杜甫、白居易など)、東アジアというグローバルな視点から捉え直した中国古典文学研究

主要業績: 『唐詩推敲:唐詩研究のための四つの視点』(研文出版、2012年)
『海がはぐくむ日本文化』(東京大学出版会、2014年、共著・主編)
『目加田誠「北平日記」:1930年代北京の学術交流』(中国書店、2019年、共著・主編)
『目加田誠北平日記』(鳳凰出版社、2022年、共著・主編、上の書籍の漢語訳)
『白文課本『史記』項羽本紀:悩める若き英雄の物語』(花書院、2020年)
「1930年代の九大アジア研究と北京」(九州大学中央図書館パンフレット、2019年)
「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釈」(『中国文学報』95、2022年)
「白居易「旧枕故衾誰与共」句の伝播と消滅」(『東方学』147、2024年)
「モニタージュされた美女—「長恨歌」楊貴妃論」(『中国文学論集』53、2024年)
「音読和漢朗詠集漢詩句初稿」(『中国文学論集』51-54、2022-2025年、共著・主編)



留学生と手作り餃子パーティー

孫 琳淨

SUN Linjing

外国人教師/講師

専門: 中国古典小説、漢文学、中国語学

専門分野: 『水滸伝』と曲亭馬琴『南総里見八犬伝』を中心とした、中国古典小説の近世日本への伝播・影響に関する研究

主要業績: 『日本近世における白話小説の受容:曲亭馬琴と『水滸伝』』(汲古書院、2021年)
『響きあう文学:長安から江戸まで』(汲古書院、2025年、共著)
「石渠閣補刻本『忠義水滸伝』の日本における受容の一側面—馬琴と北静廬を手がかりに—」(『中国文学報』91、2018年)
「『南総里見八犬伝』における『水滸伝』の受容—犬坂毛野を中心に—」(『和漢語文研究』17、2019年)
「日本近世文学における白話語彙の識別基準に関する考察:『新編水滸画伝』の使用語彙を例に」(『中国文学論集』52、2023年)
「『新編水滸画伝』の執筆から見た曲亭馬琴の白話学習」(『文学研究』121、2024年)
「『花関索出身伝』訳注(1)(2)」(『和漢語文研究』22-23、2024-2025年、共著)



授業の一コマ

英語学・英文学 研究室



重厚な伝統と 柔軟なパースペクティヴ

英語学・英文学研究室は、現在学部には3名、大学院には5名の専任教員と1名の外国人教師、2～3名の学内外からの非常勤講師、学部生40名、大学院生20名程を擁する、文学部でも有数の大所帯です。教育・研究はイギリス文学、アメリカ文学、英語学の3分野にわたり、各分野とも充実した内容を持っています。イギリス文学では第一次テキスト重視の重厚な文学研究の伝統が継承され、現在では18世紀以降の小説研究に力点が置かれています。アメリカ文学では19世紀及び20世紀の主要作家を中心に教育・研究が進められています。英語学では事実の理解と理論的考察をともに重視し、統語論、英語構文論、生成文法理論研究、ならびに語用論、意味論、音声学等の講義が行われています。

これら三分野にわたり英文研究室は、九州内外の大学で教育研究に活躍する数多くの人材を輩出しています。大学院の機関誌『九大英文学』はすでに50年を超える実績があり、質量ともに国内有数の研究誌として高い評価を得ています。また近年は学部生・大学院生ともに長期海外留学も盛んであり、言語・文学研究の国際的視野を培っています。



鵜飼 信光

UKAI Nobumitsu

英語学・英文学講座/教授

専門: イギリス文学、特にイギリス小説

専門分野: エミリー・ブロンテ、オースティン、ディケンズ、ハーディ、ワイルドなどの19世紀の小説家、ウルフ、E. M. フォスターなどの20世紀の小説家を研究している。

主要業績: 『一九世紀「英国」小説の展開』(共著、松柏社、2014年)
『背表紙キャサリン・アーンショー—イギリス小説における自己と外部』(九州大学出版会、2013年)
『ディケンズ文学における暴力とその変奏』(共著、大阪教育図書、2012年)

高野 泰志

TAKANO Yasushi

英語学・英文学講座/教授

専門: アメリカ文学

専門分野: アーネスト・ヘミングウェイをはじめとするアメリカ小説、およびセクシャリティ研究、アメリカ文化研究など。

主要業績: 『下半身から読むアメリカ小説』(松籟社、2018年)
『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』(松籟社、2015年)
『引き裂かれた身体—ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』(松籟社、2008年)

前田 雅子

MAEDA Masako

英語学・英文学講座/准教授

専門: 英語学

専門分野: 統語論、生成文法理論、特にカートグラフィー、削除現象

主要業績: 「日本語における相対的最小性の欠如について」(『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』開拓社、2022年)
『カートグラフィー(最新英語学・言語学シリーズ5)』(共著、開拓社、2020年)
Derivational Feature-based Relativized Minimality (Kyushu University Press, 2014)

トーマス・バッチェラー

Thomas BATCHELOR

英語学・英文学講座/准教授

専門: 英語学

専門分野: 言語接触と言語変化、特に、オーストラリア・クリオール語の文法研究、言語政策

主要業績: *The Verb Phrase in Kununurra Kriol: Contact and Change in a Multilingual Community*. PhD dissertation, University of Cologne, (2024).
“Cultural resilience in the face of language shift in Kununurra, Western Australia,” *Australian Studies Journal / Zeitschrift für Australienstudien* 42, (2025), pp.53-70.
“Caring for dat land…., as mob bin teik keya of dat Kantri longtaim” (co-authored) *In Fire, Water and Land in Indigenous Australia*. Cologne: Cologne University Press, (2019), pp. 81-97.

中村 嘉雄

NAKAMURA Yoshio

基幹教育院/教授

専門: アメリカ文学

専門分野: 近現代アメリカ、テクノロジーと人間、クロスメディア
(主に文学、SF、映画、写真分野)

主要業績: 『モダンの身体: マシーン・アート・メディア』(共編著、小鳥遊書房、2022年)
『ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤』(共著、小鳥遊書房、2022年)
『ヘミングウェイ批評 三〇年の航跡』(共著、小鳥遊書房、2022年)
『アメリカン・モダニズムと大衆文学—時代の欲望/表象をとらえた作家たち』(共著、金星堂、2019年)
『Inside and Out—American Culture and Society』(共著、金星堂、2022年)
「優生学エリートの皮肉—「エリオット夫妻」におけるイェーガー・バスローブとマシーン」(『ヘミングウェイ研究』第24号、2023年) 55-64頁

大塚 知昇

OTSUKA Tomonori

言語文化研究院/准教授

専門: 英語学

専門分野: 生成文法、特にミニマリストプログラムにおける理論研究、フェイズ理論、対併合の研究

主要業績: *Radical Free Merger* (九州大学出版会、2023)
On Weak-Phases: An Extension of Feature-Inheritance (九州大学出版会、2017)
“On Internal pair-Merge and Ambiguous Chains” (*English Linguistics* 39, 2023)



独文学研究室

ことば

詩と化した魂と思索 — 内面の探究 —

〔専門分野〕

本研究室では、主としてドイツ語圏（ドイツ・オーストリア・スイス）の文学、思想、語学についての研究活動を行っています。近年では、マイスター・エックハルト、啓蒙主義、ゲーテ、シラー、シュレーゲル、E. T. A. ホフマン、クライスト、ハインリヒ・マン、トーマス・マン、ヘッセ、ムージル、ヘルタ・ミュラー、体験話法の研究が盛んです。

〔教育方針〕

文学研究は何よりも「ことば」を対象とする人間と世界の探究ですから、一言一句にいたるまで作品を味読することが、指導の基本方針です。微細なことばの実証的詮索から深遠な人間精神の営為に迫ることを目指して、論文指導を行っています。実践的なドイツ語運用能力の育成にも力を入れており、交換留学制度（ミュンヘン大学、ハイデルベルク大学など）やドイツ学術交流会を通じて、常に数名の学生がドイツに留学中です。

〔研究環境〕

本研究室はドイツ文学に関して全国でも有数の蔵書を誇り、中世ドイツ語文献の貴重なコレクション「雪山文庫」、高橋義孝元教授の蔵書からなる「高橋文庫」、今後貴重資料となることが目される「東ドイツ文学文庫」を有します。機関誌『九州ドイツ文学』を有する九州大学独文学会の研究活動も盛んです。

〔就職先（研究職）〕

平成17年：東北大学、愛知教育大学、長崎外国語大学、平成18年：北九州市立大学、拓殖大学、福岡経済大学、平成21年：松山大学、平成22年：東京工業大学、平成23年：九州大学（助教）、平成24年：長崎外国語大学、松山大学、平成25年：佐賀大学、平成26年：九州大学（助教）、平成27年：駒澤大学、平成28年：新居浜高専、平成29年：南山大学、愛媛大学、平成30年：長崎外国語大学、令和4年：九州大学（助教）、令和5年：横浜市立大学、令和6年：小樽商科大学、令和7年：九州大学（助教）。



2016年9月、作家の多和田葉子さんと



2022年7月、作家の平野啓一郎さんと



2026年2月、卒論修論発表会後の独文研究室にて

専門: ドイツ近代文学・現代文学、
ドイツ思想

専門分野: 主として①トーマス・マン(黙示録、アレゴリー、『魔の山』)、②「水の女」(ロマン派、インゲボルク・バッハママン)、③ルードルフ・カスナー(観相学、エッセイ)、④ヘルタ・ミュラー(『心獣』、『呼び出し』)、⑤第三帝国以前の第三の国(ネオ・ヨアキム主義)を考察の中心に据えながら、近現代ドイツの文学ならびに思想の研究に取り組んでいる。

主要業績: 『黙示録を夢みるとき—トーマス・マンとアレゴリー』(単著、鳥影社、2001年)
『水の女—トポスへの船路』(単著、九州大学出版会、2012年;新装版2021年)
ヘルタ・ミュラー『心獣』(翻訳、三修社、2014年)
マルティン・ヴィーラント『王子ビリンカー物語』(翻訳、同学社、2016年)
ヘルタ・ミュラー『呼び出し』(翻訳、三修社、2022年)
フケー『皇帝ユリアヌスと騎士たちの物語』(翻訳、同学社、2023年)
『対訳 ドイツ語で読む「魔の山」』(編著、白水社、2023年)
『100分de名著 トーマス・マン『魔の山』』(単著、NHK出版、2024年)
『「第三帝国」以前の「第三の国」ドイツと日本におけるネオ・ヨアキム主義』(単著、九州大学出版会、2025年)
『トーマス・マン『魔の山』の新ルート—刊行百年記念論集』(編著、同学社、2025年)
トーマス・マン『トニオ・クレーガー』(翻訳、岩波文庫、2025年)



独文研究室のクリスマス

専門: ドイツ近代文学・文化学、
民衆文学

専門分野: フォルク(民族・国民)概念、民衆啓蒙運動、民衆文学・伝承文学を巡る文化現象、体育を中心とする近代教育思想、18-19世紀におけるパトリオティズム/ナショナリズムの研究に取り組んでいる。

主要業績: 著書:『R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動—近代的フォルク像の源流』(鳥影社、2014年)
編著:『旅と啓蒙—近代黎明期のドイツ文学における旅の表象とその変遷—』(日本独文学会研究叢書 119、2016年)
共著:『「神話」を近現代に問う』(勉誠出版、2018年)
共著:『人はなぜ神話〈ミトス〉を語るのか:拡大する世界と〈地〉の物語』(文学通信、2022年)
論文:「ゲーツムーツの体育教育と近代」(『福岡大学研究部論集 A:人文科学編』第22巻、2022年)

ヤニック・レオン・ヴァインケルマン

WINKELMANN, Yannick Leon

独文学講座/准教授

専門: ドイツ古典文学・近代文学

専門分野: ヴィルヘルム・ハインゼ、18-19世紀ドイツ文学の美学的研究に取り組んでいる。

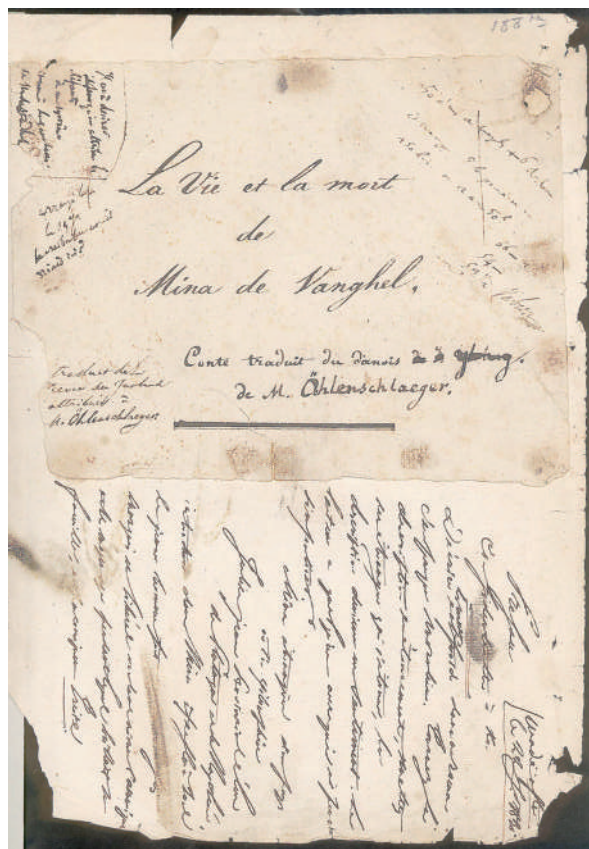
主要業績: 論文: Wilhelm Heinse in Opposition zu Immanuel Kant? Heinses Ardinghello und die glückseligen Inseln (1787) vor dem Hintergrund Kants Grundlegung zur Metaphysik der Sitten (1785) gelesen: Reflexionen zu der Funktion des ‚Metaphysischen Diskurses‘ sowie der Gründung des utopischen Idealstaats auf Paros und Naxos. (2024)
共著: Bamberger, Gudrun & Winkelmann, Yannick: Wie geht man sinnvoll mit der Koexistenz mehrerer voneinander abweichender, aber gleichermaßen autorisierter – bzw. unautorisierter – Textfassungen um? (erscheint mit modifiziertem Arbeitstitel voraussichtlich 2025/26 bei De Gruyter, ebd. ‚Beihefte zur Editio‘)

仏文学研究室



他者と出会い、自分を知る 異邦への旅

歴史は鏡であるとは、よく知られた言葉ですが、その意味を本当に分かるには多くの書物や史料にあたり、歴史に推参する労が必要でしょう。いにしえの人々の暮らしを知り、考え方や感情の機微について丹念に思いを凝らすことが、なにももまして大切なはずです。異文化についても事は同じではないでしょうか。ネット検索は確かに便利ですが、ひとつの言語に習熟し、人々の生活から生まれた表現の数々に時間をかけて親しみながら、想像力を駆使して多様な相違に対する感受性を鍛えなければ、歴史や文化を異にする他者を深く理解することは叶わないでしょう。文学作品が私たちに開く世界もまた、そうした遭遇を可能にする豊穡な大海にほかならず、人間という存在をめぐり思索を深めてきた作家たちの著作を読み進むうち、私たちは知らず知らずに自らの省察へと導かれるはずです。その意味では、他者を知ることは、じつは自分自身を知ることと異なりません。当研究室が仏語原典の厳密な読解をなによりも重視する理由は、もはや説明するまでもないでしょう。もちろん実用的な語学力の向上にも力を注いでおり、フランス人教師が周到にメニューを組んだ語学演習を開講しています。その成果は、仏語検定試験上級合格者の輩出という実績だけでなく、毎年2、3名の学部生が本学の交換留学プログラムによりボルドー大学やエクス=マルセイユ大学に留学するという形で現れています。そのなかにはフランス文化への探究心が高じて、外務省の専門職員になった強者もいるほどです。もちろん大学院の門戸を叩く者も動機は同じでしょう。院生たちは学部時代に会った作家や作品についての考究を深めるために、修士課程では実証的な研究方法を身につけ、専門領域の研究史を体系的に学び、学術論文の執筆技術を実践的に習得します。さらに博士後期課程では留学により本場の学問的環境を経験しつつ、フランス本国の専門家に伍して研究を進める力を涵養するのです。このように仏文学研究室では、皆さんの先輩たちがフランスとの出会いを通じて自らをよく省み、自らに問いかけ、様々な形で自らの力を試し、鍛えています。



スタンダールの草稿

高木 信宏

TAKAKI Nobuhiro

仏文学講座/教授

専門: フランス文学 (19世紀)

専門分野: 19世紀フランスの作家スタンダールを対象として、テキスト成立の背景となる政治体制や価値観の変遷などに関連づけつつ、生成論やテーマ論などの分析手法を援用しながら、多角的な観点から小説作品の研究をつづけています。近年では、その文学の受容に関心をもち、オノレ・ド・バルザックやポール・ヴァレリー、小林秀雄などがスタンダールを論じることで、いかなる批評的な意義を提示したのかについて考究しています。これと併行して、『パルムの僧院』の著者自家用本(シャペール本、ロワイエ本、アザール本)に残されたスタンダール自身の書き込みを網羅的に考察し、第2版出版に向けた修正過程の研究にも取り組んでいます。

主要業績: Annotated images of Stendhal's own copy of "La Chartreuse de Parme" (Kyushu University Library, 2024)

『スタンダール—小説の創造』(慶應義塾大学出版会、2008)

« "Lettre" de Julien Sorel : Essai d'analyse thématique » (HB. Revue internationale d'études stendhaliennes, no 25, 2021)

« Valéry et "Lucien Leuwen" » (HB. Revue internationale d'études stendhaliennes, no 24, 2020)

« Texte et correction : une remarque sur le caractère de Mme de Rénal » (HB. Revue internationale d'études stendhaliennes, no 23, 2020)



学位記を手に

宮崎 海子

MIYAZAKI Kaiko

仏文学講座/准教授

専門: フランス文学 (20世紀)

専門分野: 「歴史と文学」の観点を大枠とし、特に第二次世界大戦(ドイツ占領下の対独協力、レジスタンス、強制・絶滅収容所、ユダヤ人大虐殺)の記憶が文学作品においてどのような手法や文体で表現されてきたか、またその表象や表現方法がどのように変遷してきたかをフランス社会(や左派インテリ層)における思想史や記憶の変遷の歴史に照らし合わせて考察しています。具体的にはヴェルコール、デュラス、ペレック、パシエ等の作品群を中心に研究していますが、バックグラウンドとしてはナチス収容所の証言文学(アンテルム、ヴィーゼル、プリモ・レヴィ等)も人間理解への熱意をもって読み続けています。

主要業績: « Abahn Sabana David, ou l'initiation du processus de judaïsation dans l'œuvre de Marguerite Duras » (Textuel, n° 67, 2012)

« Duras et le génocide juif » (Les Lectures de Marguerite Duras, PUL, 2005)

« Les parias des houillères du Chikuhō : assimilation ou surdiscrimination ? » (Cipango, n° 23, 2020)

菅野賢治/合田正人監修、小幡谷友二/高橋博美/宮崎海子訳、Léon Poliakov編著『反ユダヤ主義の歴史』第五卷(筑摩書房、2007年)

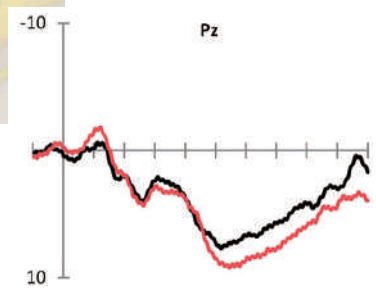


マルグリット・デュラス

言語学・ 応用言語学研究室



脳波実験の様子



日本光電製デジタル脳波計EEG-1200で測定したERP波形(脳波)

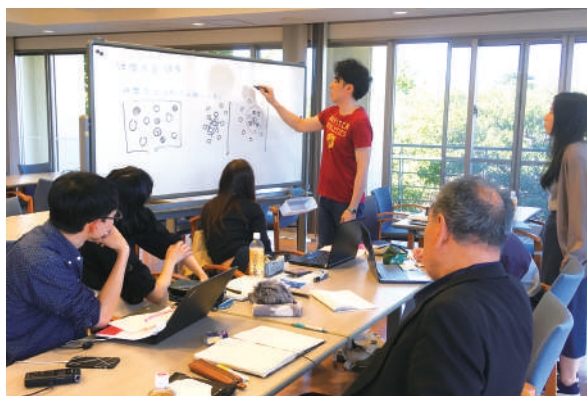
人間をことばから科学する

幼い頃には、「そんな言葉づかいをしてはいけません」と注意されることはあっても、「それは文法的に間違っています」と言っただけで叱られることはありません。もちろん、言葉を話しはじめたばかりの幼児は、文法的に間違っただけの言い方をすることがあります。しかし、「言葉づかい」は意識的に直されるのに対し、いわゆる「文法」は本人の気付かないうちにいつのまにか直っています。

言語学の重要な研究領域の一つに、無意識のうちに身につけた文法を解明しようとするものがあります。たとえば人種・民族が違っていても、日本語が話されているところで生まれ育ったら日本語を話すようになり、スワヒリ語が話されているところで生まれ育ったらスワヒリ語を話すようになります。ですから、日本語にもスワヒリ語にも英語にも、そしてどんな言葉にも共通する「文法」(「普遍文法」)というものを、頭の中に持って生まれてくるのではないかと考えられています。

人間が共通して頭の中に持っている文法とは、いったいどういうものなのでしょう。そしてそれは経験的に習得する個々の言語の文法と、どのような関係にあるのでしょうか。さらに、言語とそれを使用する人間との関係は、どのようなものなのでしょう。これらは人間と言語に関わる根元的な問いです。この問いに答えるためには、具体的な言語データの収集と分析を通して、様々な言語現象を理論的に説明していかなければなりません。九州大学言語学研究室は、この壮大なプロジェクトに取り組んでいる研究者の集団です。

主な活動として、「九州大学言語学研究会」を組織し、年に数回様々な分野の研究者を招いて研究会を開催しています。また、『九州大学言語学論集』や『Kyushu University Working Papers in Linguistics』で、統語論、意味論、音韻論、形態論から心理言語学や言語類型論、言語習得まで幅広い領域において研究の成果を発信しています。



方言調査風景(沖縄)



授業の一コマ

上山 あゆみ

UEYAMA Ayumi

言語学講座/教授

専門: 理論言語学、統語意味論

専門分野: 母語である日本語の観察を基盤にして、生成文法の観点から文の構造及び意味解釈と構造の関係を研究している。生成文法は、従来、英語に関する研究が先行しており、日本語の分析も英語の分析を修正・適用するものが多いが、英語における成果に依存せずとも実証的に示せる理論構築を目標としている。

主要業績: 『はじめての人の言語学—ことばの世界へ』(くろしお出版, 1991年)
『生成文法の考え方』(共著, 研究社, 2004年)
Model of Judgment Making and Hypotheses in Generative Grammar (Japanese/Korean Linguistics 17, 2010)
『統語意味論』(名古屋大学出版会, 2015年)

下地 理則

SHIMOJI Michinori

言語学講座/教授

専門: 琉球語、日本語諸方言、言語類型論

専門分野: フィールドワークにもとづく個別言語の記述をベースとしつつ、個別言語の実証的データから通言語的・理論的一般化を行う言語類型論を専門とする。個別言語の記述に関しては、琉球語を中心に日本の危機言語・危機方言の総合的記述に取り組んでおり、音韻から統語・談話にいたる言語の全体像を描き出す記述文法書の作成に力を入れている。

主要業績: An Introduction to Ryukyuan Languages (共編, ILCAA, 2011)
Quasi-Kakarimusubi in Irabu (Japanese/Korean Linguistics 18, 2011)
Foot and Rhythmic Structure in Irabu Ryukyuan (『言語研究』135, 2009年)
『南琉球宮古語伊良部島方言』(くろしお出版, 2018年)
An Introduction to the Japonic Languages (Brill, 2022)

太田 真理

OHTA Shiri

言語学講座/准教授

専門: 言語脳科学、心理言語学

専門分野: 脳波や機能的磁気共鳴画像法などの脳機能イメージングと、経頭蓋電気刺激法などの非侵襲的脳刺激法を用いて、言語の神経基盤の研究を進めている。生成文法を中心とする理論言語学の仮説を、神経科学の実験により検証することで、言語学と神経科学を統合した言語処理の脳内モデルを構築することを目標としている。

主要業績: (Dis)similarities between semantically transparent and lexicalized nominal suffixation in Japanese: An ERP study using a masked priming paradigm, In Koizumi, M. (Ed.), Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives: Interaction between Linguistic and Nonlinguistic Factors (共著, De Gruyter Mouton, 2023)
Dissociating the processing of empty categories in raising and control sentences: A self-paced reading study in Japanese (共著, Frontiers in Language Sciences 2, 2023)
Modeling dyslexia in neurotypical adults by combining neuroimaging and neuromodulation techniques: A hypothesis paper (共著, Frontiers in Human Neuroscience 19, 2025)

地理学研究室



エクスカージョン風景（下関市・赤間神宮）

生活の場と 世界をつなぐ想像力

地理学の出発点には、身近な日常生活の場に対する関心と同時に、山の稜線や大海原の彼方に、いったいどんな世界があるのかを知りたいと思う好奇心があったといえるでしょう。人間の豊かな想像力と旺盛な行動力は、世界を多様な地図に描き出し、またその仕組みを大きく変えてきました。現在の私たちの経済活動や政治、社会生活や文化は、ローカルな場所での日常的な相互関係とともに、世界的規模に広がった空間関係によって営まれており、この多様なつながりは今後ますます拡大、深化するでしょう。ただしそれは、グローバル化する環境問題や地域紛争など我々の生活を根本から脅かす事態を伴っています。地理学とはこうした諸問題を、社会とその基盤である場所、空間、環境の複雑な関わりから研究する学問であり、現在を生きる私たちの「位置」をよりよく知るための「知」であるといえます。

私たちの研究室では、こうした近現代社会の諸問題を、理論と実証の両面から探究することを目指しています。特に重視している点は、地理学の枠に閉じこもるのではなく、広く人文・社会科学との関連で地理学の認識論や方法論を検討することと、それを抽象的な議論に終わらせることなく、具体的なフィールドワークを通じて実証研究と有機的に結びつけることです。そのため授業では、英独仏のテキストの読解や地理情報システムなどを利用した情報解析の作業に加えて、フィールド調査が必修となっています。

これまで九州各地の山村、漁村、都市、離島をフィールドとして学部生と院生が共同で調査を行い、その成果を「地域調査報告」として刊行してきました。また、研究の基盤となる書籍や雑誌類も豊富で、特にフランス語圏の文献は国内でも有数の蔵書を備えています。新たな問題意識を開拓し、自らのフィールドで得た知見を、日本にとどまらず世界に向けて発信していくことが私たちの目標です。



中国・中山大学との合同エクスカージョン風景（広東省・広州）

遠城 明雄

ONJO Akio

地理学講座/教授

専門: 人文地理学、都市研究

専門分野: 近代および現代の日本や第三世界の都市を対象として、人々の社会生活がどのような論理によって営まれているのか、またそれが国家や資本の動きとどのような関係にあるのかを、特に創り出された景観、空間、場所の分析を通して研究しています。また都市や空間をめぐる理論研究の学説史的検討も行っています。

主要業績: 『新修福岡市史資料編 近現代3 モダン都市への変貌』(共編、福岡市、2024)

Sur la modernisation des pays non européens: L'Asie dans la pensée géographique de Vidal de la Blache (*Cahiers de géographie du Québec*, vol. 66, 2021).

Decolonising and Internationalising Geography (共著, Springer, 2020).

Power Relations, Situated Practices, and the Politics of the Commons. (編著, Kyushu University, 2017).



自然地理学実習(測量実習)



カール・リッター『エルトクンデ』(1822~59)と
エリゼ・ルクリュ『人間と大地』(1905~1908)(研究室所蔵)

伊藤 千尋

ITO Chihiro

地理学講座/准教授

専門: 人文地理学、アフリカ地域研究

専門分野: ザンビア・ジンバブウェを対象にして、都市-農村間の相互作用やそれらが自然環境にもたらす影響を解明する研究を行っています。国内では、農山村を対象にして、地域間ネットワークと自然資源利用に注目して地域社会の変化を読み解く研究を行っています。近年では、地理教育や地域社会への還元にも関心を持っています。

主要業績: 「採集物を食べるための知識・技術とその継承」(単著、地理、2023年)

「高校地理教科書における『人種』に関する記述の問題点:差別・偏見を生まない地理教育に向けて」(単著、E-journal GEO、2021年)

「'African Potentials' for Wildlife Conservation and Natural Resource Management: Against the Image of 'Deficiency' and Tyranny of 'Fortress」(共編, Langaa RPCIG, 2021)

『ザンビアを知るための55章』(共著、明石書店、2020年)

『都市と農村を架ける:ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』(単著、新泉社、2015年)

外戸保 大介

SOTOHEBO Daisuke

基幹教育院/准教授

専門: 人文地理学、経済地理学

専門分野: 日本や欧米の成熟した産業地域や企業城下町を主なフィールドとして、進化経済地理学の検討を通じて、地域産業を進化の視点で読み解く研究を行っています。また、理論研究と接合を図りながら、地域イノベーションや産学連携、まちづくり、ツーリズムなどの実態把握や政策研究も進めています。

主要業績: Trajectory of path creation theory in evolutionary economic geography: expansion of research from manufacturing and producer services to tourism. (単著, Evolutionary and Institutional Economics Review 22 (2), 2025)

「地域レジリエンスと経路創造の進化経済地理学—立地調整論の拡張へ向けて—」(単著、『地理学評論』97 (5)、2024年)

『新経済地理学概論』(共著、原書房、2022年)

『進化する企業城下町—進化経済地理学からのアプローチ』(単著、古今書院、2018年)

心理学研究室



心理学教室旧館の大理石の表札
「心理学教室」(近藤雪竹筆)。
現在は心理学コース大学院生室
(E-A-322)の入口に設置している。

「こころ」とは何かを 科学的に追究する

心理学という学問は、一般に、ヒトやその他の動物の行動を支えている内的過程（こころ）のメカニズムを実証的な手続きによって解明することを目標としている。心理学で扱う「こころ」に関する問題には様々なものが存在するが、本研究室では特に、感覚・知覚、記憶・思考・情動、個人差といった基礎的なテーマについて研究している。すなわち、人間が外界から情報をどのように受容し、処理・統合し、評価しているか、その情報処理プロセスとメカニズムを実験・調査・シミュレーションによって解明するといった研究を行っている。

具体的には、感覚・知覚の領域では、特に視覚に関わる空間知覚、眼球運動、視覚イリュージョン、色、明るさといった問題を扱い、記憶・思考・情動の領域では、画像や言語情報の認知過程、知識の構造及びその運用のしくみ、認知過程と情動との関係、また個人差の領域では、学力やパーソナリティ特性の測定方法といった問題を扱っている。

さらに、本研究室では、基礎的研究によって得られた知見を利用して、芸術学や建築学と関連のある感性研究、法学と関連のある目撃者記憶研究、医学と関連のある高次脳機能研究、コンピュータ科学や統計科学と関連のあるコンピュータテスト研究といった、応用を中心とした学際的研究にも積極的に取り組んでいる。

また本研究室では、国家資格として制定された「公認心理師」に対応したカリキュラムを整備しており、受験資格取得のために大学で修める必要がある授業科目を提供している（詳しくは学生便覧等を参照）。



4年生と教員の集合写真

中村 知靖

NAKAMURA Tomoyasu

心理学講座/教授

専門: 計量心理学、テスト理論、
多変量データ解析

専門分野: 能力や性格を測定するための質問紙法による心理テストの開発ならびにテストに関する統計的方法の開発を研究テーマとしている。具体的には、自閉スペクトラム症スクリーニングテスト、言語能力テスト、発達に関する縦断データ分析、因子分析・構造方程式モデリング・項目反応理論といった潜在変数を利用したモデルにおけるパラメタ推定法、心理特性測定のための適応型テストシステムについて研究を行っている。

主要業績: 『臨床心理学スタンダードテキスト』(共著、金剛出版、2023年)

Development of literacy skills for Japanese deaf and hard-of-hearing children (共著、Child Development、2023年)

乳幼児期における社会的認知能力の発達軌跡(共著、発達心理学研究、2022年)

山本 健太郎

YAMAMOTO Kentaro

心理学講座/准教授

専門: 実験心理学、認知科学、
時間認知

専門分野: 人の主観的な認識や行動を作り出す心的過程について、主に「時間」を切り口として実験的に研究を行っている。具体的には、経過時間の評価、感覚情報の統合、動きの認識などの研究を通して、人の安定的な経験を支える心的基盤の解明を目指している。

主要業績: How many categories are there in crossmodal correspondences? (共著、PLOS ONE、2023)

Cue integration as a common mechanism for action and outcome bindings (単著、Cognition、2020)

Effect of motion coherence on time perception relates to perceived speed (共著、Vision Research、2016)

光藤 宏行

MITSUDO Hiroyuki

心理学講座/教授

専門: 知覚心理学、視覚科学

専門分野: 人間の奥行き知覚に関わる、感覚・視覚情報処理機構を明らかにする研究を行っている。具体的には、両眼立体視・運動視に関する錯視現象の発見、およびそれらの現象の心理物理学的検討を、三次元眼球運動の計測等と組み合わせて行っている。

主要業績: Aesthetic Evaluation and the Perceived Properties of Chinese Characters (共著、Plos One、2025)

The Gender-based Facing Bias in 3-D Biological Motion Perception (共著、Perception、2023)

『意識的な行動の無意識的な理由』(共著、創元社、2018年)



箱崎キャンパス時代の研究発表会の様子



伊都におけるオープンキャンパスの様子



旧箱崎文系キャンパスをミニチュア風写真に加工した画像

比較宗教学研究室



中国、広東省、広州の仏教寺院

宗教の内へ そして宗教を超えて

本研究室の活動には二本の柱がある。ひとつは、人類の知恵の蓄積が現代世界の激しい変化のなかで、どのような形をとるかを考えること（対象としての宗教とその周辺）。もうひとつは、生きられた経験と生活世界のほうから、あくまで現場をふまえて実証的に考えること（方法としての文化人類学）。そのいずれか一方にかたよらないことが理想である。

構成員（2025年度）は、教員2名、院生1名、研究生1名、学部生25名である。卒業論文執筆のための演習に加えて、調査実習の演習と、外部の非常勤講師を招聘しての集中講義がある。

本年度の調査実習は、熊本と鹿児島 of 正教会を中心に集団調査を行っている。身近でよく知っているように思える事柄であっても、よくよく目を凝らして観察し、話を聞いてみれば、驚くほど多くの発見があることを授業を通して体感することができるだろう。

卒論演習では、日常生活の中で気に留まるような小さな疑問から、研究に値する問いを立て、独自の調査を行うことを目指す。2年生では先行研究の読み方から自らの卒業論文の問いをたて、3年生では各自のフィールドワークを行い、4年生で卒業論文の形に成形する。そのため進学希望者は、2年進学時にはある程度の読書を済ませ、何を研究したいかがあきらかになっていることが望ましい。また3年進学時には現地調査を行うので人との関わりを疎んじない姿勢が好ましい。

大学院生になると、研究テーマを深め、調査の目を国外にも向ける必要も生じる。ゼミ内での発表と議論を経て、研究会・学会など学外での活動にも羽を大きく広げていくことになる。学会活動としては、事務局としては九州人類学会を支え、『九州人類学会報』を中心に盛んな活動をおこなっている。また西日本宗教学会では、例会を中心として、積極的な貢献を果たしている。



インド、オリッサ州、プバネシュワールの野菜売り

飯嶋 秀治

IJIMA, Shuji

共生社会学講座/教授

専門: 共生社会システム論、
調査地は日本、バリ、オーストラリア

専門分野: 現在は主にオーストラリア先住民アランタの研究を行っている。主な関心は、人が危機に直面した時にその危機といかにつきあうのか、ということにある。その危機とのつきあい方の1つに宗教が大きく関わってくる。但し、世界社会と言われる現代において、調査地と調査者とは、既に幾つもの関わりの中を生きてしまっている。そうした関わりの中で、適切な言葉を与えて関係を見やすくすること、また、そこから立ち現われる生の可能性の共有を思索している。

主要業績: 『言語と身体—聖なるものの場と媒体』(共著、岩波書店、2004年)
『福の民 暮らしのなかに技がある』(編著、福岡市、2010年)
『フィールドワークの安全対策』(共著、古今書院、2020年)



ドイツ、フランクフルト・アム・マインのロシア系正教会

高橋 沙奈美

TAKAHASHI Sanami

共生社会学講座/准教授

専門: 宗教社会学、
東方正教会のグローバルな展開

専門分野: 宗教は普遍的価値に基づいた信者集団の連帯を説くトランスナショナルな性格を持つ一方で、土着の要素を取り込んで特定集団のアイデンティティと記憶を担保するナショナルな性格を持つ。現在の研究テーマとして、①戦時下における正教会の分断と越境性、②ロシアにおける宗教と犠牲者意識ナショナリズムの問題、③モビリティーズの概念を軸とした東方正教会のグローバルな展開について取り組んでいる。宗教と国家権力が緊密な協力関係を築いている時代と地域において、宗教的共同体が果たしうる公共的な役割の可能性と限界について考えていきたい。

主要業績: 『迷えるウクライナ—宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』(単著、扶桑社新書、2023年) 2024年ロシア文学会選考委員特別賞受賞。
『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観—社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』(単著、北海道大学出版会、2018年) 第8回地域研究コンソーシアム登竜賞受賞。
『宗教遺産テキスト学の創成』(共著、勉誠出版、2022年)。



オーストラリア、北部準州のキリスト教会



鹿児島、文化人類学演習中の参与観察

社会学・地域福祉 社会学研究室



社会的リアリティーとの遭遇！

社会学・地域福祉社会学は何を研究しているのでしょうか。第1には、現代社会の様々な変化・変動の調査研究です。少子化、高齢化、メディア環境の激変、子どもをめぐるいじめや自殺の問題、青少年のニートやフリーター現象、格差社会やジェンダー問題…。現代社会には新しい社会問題や課題がたくさん現れています。こうした問題の原因や理由を、理論やモデルを使った方法、そしてさまざまなフィールドワーク（アンケート調査や意識調査のような量的な調査や、参与観察やインタビューなどの質的な調査など）の社会調査方法をもちいて調べています。第2には、こうした社会に関わり、社会を変えようとする人びとや集団、組織を調査研究しています。いわば社会の変化・変動の担い手たちを、同じくさまざまな社会調査の方法を用いて調査研究しています。第3に、人びとの活動が、具体的に社会のどこをどう変えていくのか、その社会の変化・変動の測定を理論的かつ科学的に行っています。

このように、現代社会の変化・変動の最先端のさまざまな問題や課題を、理論的かつ実証的に調査研究しながら解明しようと取り組んでいるのが社会学・地域福祉社会学なのです。社会学・地域福祉社会学の学生は、社会学の理論、社会調査の理論や方法を学びながら、それを社会問題や地域の福祉課題へと応用していくことになります。そのため社会調査実習を通して実社会での調査研究の方法を学びます。これは将来、行政やマスコミ、教育や研究の分野へ進む上でも役立つ技能となることでしょう。



社会調査実習で宇部市の高齢者地域ケアプランを検討している様子



社会調査実習で訪問した山口市にて

高野 和良

TAKANO Kazuyoshi
共生社会学講座/教授

専門: 地域福祉社会学

専門分野: 地域高齢化、過疎・農山村、地域福祉に関する社会学的研究

主要業績: 『人口減少時代の生活支援論—地域のつながりを維持・再生する』(ミネルヴァ書房、2024年)
「人口減少時代における地域共生社会の展望—過疎地域の協働と共生の視点から」(『福祉と協働』、ミネルヴァ書房、2023年)
『新・現代農山村の社会分析』(学文社、2022年)
『生活者の視点から捉える現代農村』(農山漁村文化協会、2022年)

井上 智史

INOUE Satoshi
共生社会学講座/講師

専門: ジェンダー・セクシュアリティ研究、福祉社会学

専門分野: ジェンダー・セクシュアリティに関する社会学的研究

主要業績: 「性的少数者にとって家族とはどのような存在か」(『ジレンマの社会学』、ミネルヴァ書房、2020年)
「HIV・エイズ予防啓発活動における疫学者とゲイNGOの協働体制の展開」(『福祉社会学研究』17、2020年)

山下 亜紀子

YAMASHITA Akiko
共生社会学講座/教授

専門: 家族社会学、福祉社会学、地域社会学

専門分野: ケアに関する社会学的研究、地域問題や地域活性化に関する社会学的研究

主要業績: 「第1章家族社会学入門—家族社会学の現代的地平」「第3章障害児のケアを行う家族」(『入門・家族社会学—現代的課題との関わりで—』、学文社、2024年)
「母親たちの頼みの綱となる障害児親の会—宮崎県の障害児・障害児家族の団体A,Bを事例として—」(『社会の変容と暮らしの再生』、学文社、2022年)
「家族によるケアと地域の共同性—高齢者・子ども・障害児のケアから—」(『社会分析』48、2021年)



熊本地震後の西原村へのフィールドワーク調査



卒論題目検討会の様子

先輩からのメッセージ *Message from Students*

文学部、そして中国哲学のおおらかさ

哲学コース

石野 愛華 *Aika Ishino*

中国哲学史 2022年度入学



九州大学の文学部にはたいへん魅力的な専攻分野が揃っており、何を選ぶか迷われる方も多いかと思います。じっさい、入学の時点では専攻をすでに決定している人、まだ学びたいことが見つからない人、なんとなく方向性は決まっているけれど具体的な分野が決まっていない人など、さまざまです。1年次の基幹教育を通じてじっくり自分と向き合い、時間をかけて専攻を決定できるのが、九州大学文学部の強みのひとつです。また一度専攻を決定しても、ほかの分野の講義にも原則として自由に参加できるので、どんどん自分の世界を広げてゆくことができる学部でもあります。私は中国哲学史研究室に所属していますが、専攻分野にとどまらないたくさんの領域についての講義を履修してきました。具体的には西洋の哲学や日本中世史、アジアの考古学、宗教学、ドイツ文学、ラテン語にいたるまで、人文学を形成するさまざまな分野に触れ、刺激的な文学部生活を送っています。

自分自身、専攻を決定したのは入学後でした。1年次のときに参加した講義で、中国哲学史という学問の深淵さを知ったことがきっかけです。中国哲学史講座では、おもに儒教や道教といった中国の伝統思想や東アジアにおけるその影響を対象にした研究が行われています。やや堅苦しく権威的な印象を受けるかもしれませんが、中国哲学は近代的・西洋的なものの見方のなかで生きる我々の世界をさらに広げてくれる学問であり、何よりも儒教は日本人の精神性形成にも深い影響を与えてきた思想です。ちなみに私は、明代末期から清代にかけての中国におけるイエズス会宣教師たちの布教活動について研究しており、儒教とカトリックというふたつの思想

体系の邂逅と互いへの反応について紐解くことを試んでいます。

儒教の祖である孔子は紀元前500年前後、つまり今から2500年ほど前の中国を生きた思想家です。数千年の歴史を経て今に伝わる思想は、それだけ多くの人の共感を集め、愛されてきた思想ということでしょう。そんな彼らのことは、時に現代社会で思い悩む我々の励ましとなり、ヒントとなることがあります。学問をしているうえでふっと救われるような気持ちになる分野というのも、なかなか珍しいのではないのでしょうか。

九州大学の文学部は長い伝統に基づいた膨大な資料を揃えており、どのような専攻分野でどのような興味・関心を抱いたとしても自由に研究を行える環境が整っています。皆さんにもぜひ自然豊かなキャンパスで、のびのびとした大学生活を送ってほしいと願っています。

モノに触れる学問

歴史学コース

北村 仁乃 *Nino Kitamura*

考古学 2022年度入学



私は歴史学コースの考古学研究室に所属しています。考古学では、歴史書のような文字資料ではなく、土器や古墳などの「モノ」を使って歴史を研究していくことができます。そのような「モノ」はそれ自身では歴史を語ることはできないので、研究者がどのようにそれらに語らせるかが大事だと考古学ではよく言われています。

研究室の授業では、考古学の研究手法や学史について学ぶ講義や、論文の要約と批判をする演習、英語・韓国語の文献を読む講読などの授業があります。九州大学の立地を活かして中国・韓国考古学について学ぶ機会も多くあります。また、研究室が所蔵している遺物について調べる授業や、遺物の図化の方法を学ぶ実習の授業では、実物の土器・石器などに触れることもできます。長期休暇の時期に研究室で古墳の発掘調査が実施されることもあります。このように、実際に遺跡に直接行ったり実物の遺物に直接触れて近くで観察したりする機会もたくさんあり、そこで図や写真からでは得られない情報を得ることができます。このように直接的な観察を行って

資料から情報を読み取っていくのが考古学の面白い点だと思います。

また、どの研究室に配属されても卒業論文と研究は行わなければなりません。考古学研究室でも、研究室での授業を通して獲得した知識やスキルを使って、自分なりの問題意識のもと卒業論文を書いていきます。授業で習った専門的な知識をフルに使って新しいことを提示していく経験は、研究者にならなくても将来に有用な経験だと思います。実際に卒業論文を書いてみて、本当に小さな新しい発見を提示するだけでもかなり大変だと感じました。今まで教科書で習ったような史実は、先行研究のこのような途方もない研究の積み重ねで生まれたんだと実感できます。

以上のように、研究室では授業を通して得られた知見で自分の将来に活かせる研究をすることができます。皆さんが研究を楽しみ、豊かな大学生活を送ることを願っております。

保坂 柚花 Yuzuka Hosaka

言語学 2023年度入学



「言語学」と聞いて、どんなイメージを持つでしょうか。とにかく色々な言語を学んでいて、何か国語も喋れるようになる…そんな想像をする人もいるかもしれません。しかし、実際は違います。

言語学とは、簡単に言えば言語の構造や使われ方を科学的に分析する学問です。私が所属している人間科学コースの言語学・応用言語学研究室では、中学・高校までの英語の授業のように各言語の正しい使い方を学ぶのではなく、言語がどのように成り立っているか、その仕組みそのものを多角的に研究しています。

たとえば現代日本語に焦点を当て、単語の意味や使われ方を分析して分類したり、フィールド調査を通じて方言の文法構造を記録したり、言語活動に脳がどう関わっているのかを実験を通じて研究している先生もいます。

私は「言葉を研究するのが面白そう」という単純な興味で言語学を志望したのですが、実際に研究室に入って学んでいくうちに、思っていた以上に奥が深い学問だと気付きました。私たちは母語を話す時、特段文法や規則を意識して喋っているわけではありません。しかし少し深掘してみると、言語には非常にシステムチックに説明できる側面が多くあります。普段何気なく使っている言葉が実は複数の規則の上に成り立っているものだと気付くことができ、そしてそれを理論的に説明できるようになるところに、言語学の面白さがあると私は感じています。それでいて、言語は生き物ですから、時代の変化や文脈に応じて違った様相を見せることもあり、すべてが単調に説明できるとは限らないのも面白さの一つです。

では、この研究は何の役に立つのか?と思う方もいるでしょう。私も実際、聞かれたことがあります。確かにこの研究によって実用的なモノを開発できるかという、そうではありません。これは言語学に限らず、文学部に

所属する学問すべてに共通して言えることだと思います。しかし、文化の解明や記録、保存という側面では、非常に重要な役割を果たしていて、決して無意味なものではないと私は考えています。それは今後の更なる文化の発展や、未来の学問の礎になると思うからです。何より、こうした人類の文化の結晶に触れることは、人生を豊かにしてくれると思いませんか。

九大文学部での日々は、私に多くの気づきを与えてくれました。皆さんがこれから送る大学生活が、自分の世界を広げてくれる豊かな気づきに溢れたものであることを祈っています。

?が! に変わる瞬間

愛媛大学准教授(文学コース卒業生)

野村 優子 Yuko Nomura

独文学



研究の醍醐味は、疑問に思っていた事柄「?」が、明らかになる瞬間「!」にあると思います。ベルリン留学中、ずっと気になっていた場所がありました。ソニーセンター(現:ポツダム広場センター)という現代的な複合商業施設の一角に、王侯貴族を思わせる豪華な部屋が保存されており、その場違いな様子に不思議な感覚を抱いたまま時は過ぎていました。それが先日、研究の中で偶然、ここがどういう場所だったのか判明したのです。

この辺りは、20世紀初頭まで「ティーアガルテン地区」という瀟洒な邸宅が立ち並ぶ高級住宅地で、保存されていた部屋は、かつてここに建っていた高級ホテル「エスプラナーデ」の一部でした。この地区は、ナチス・ドイツの都市計画で多くの邸宅が撤去され、さらには第二次世界大戦の爆撃によって、その姿を完全に失いました。霧のように霞んでいた謎が解け、頭の中に新たな見取り図が立ち現れたとき、えも言われぬ満足感に満たされます。

この人は何を研究しているのだろうかと思われたかもしれません。私は現在、世紀転換期のドイツで展開された装飾芸術運動について研究しています。美術史研究者だと自認していますが、学会発表は独文学系が多く、大学ではドイツ語も教えているので、ドイツ学研究者と言えなくもありません。こうした学際的な立ち位置にあることが、私の研究の特徴です。

美術史とドイツ学という分野横断的な研究基盤を築くことができたのは、九大文学部の柔軟な研究体制があったからです。ベルリン留学後、私は修士課程を芸術学研究室に在籍して美術史研究の基礎を固め、博士課程では専攻を独文学へと改めて、語学力とドイツに関する知識を深めました。専攻変更という大きな決断を、

快く引き継いでくださった二人の恩師には、感謝の念に堪えません。ここで培った二つの専門分野が、現在の研究職へと繋がっています。

大学や大学院生活に不安を感じる人も多いでしょう。私の場合は、社会人になってからの大学院進学だったため、不安はひとしおです。しかし、研究室で苦楽を共にした仲間の多くは研究者として活躍しています。自身の関心を深め、研鑽を続けければ、道は開けるとお伝えたいです。

九大文学部で得られるのは知識だけではありません。研究生生活を支え合える仲間との出会いも大きな財産です。私も何でも相談できる頼もしい仲間恵まれ、その中の一人とは「ドイツ語圏女性文化研究会」を結成し、フェミニズム関連本の翻訳など、楽しみながら活動を続けています。大学とは、自分なりの研究スタイルを探す場です。皆さんの大学生活も爽り多いものとなりますように。

III

大学院人文科学府

沿革と組織

History & Structure

1953（昭和28）年、新制大学院の設置にともない九州大学大学院文学研究科が開設されました。発足当初の9専攻に加え、1968（昭和43）年には言語学専攻が設置されて10専攻となりました。九州帝国大学時代からの伝統を継承して西日本地区における人文学研究の拠点として豊かな成果を挙げ、西日本地区のみならず、全国の大学、短大、その他の研究機関等の要請に応えるべく多くの人材を養成してきました。

2000（平成12）年には、大学院重点化、学府・研究院制度の導入で、人文基礎、歴史空間論、言語・文学の3専攻、10分野、18専修からなる大学院人文科学府

として再編成され、今日に至っています。2004（平成16）年4月の国立大学法人九州大学の発足を経て、2007（平成19）年からは、21世紀COEプログラムの成果を基に、歴史空間論専攻に人文科学府・比較社会文化学府にまたがる「歴史拠点コース」を設置し、21世紀における世界的な研究拠点をめざして、ますますの発展を重ねています。また、2011（平成23）年10月に、グローバル30（文部科学省による国際化拠点整備事業）の一環として、英語による授業の履修だけで修了可能な広人文学コースが開設されました。

文学部との対応関係

専攻	分野	専修	対応する文学部の専門分野
人文基礎	哲学・倫理学	哲 学	哲 学 ・ 哲 学 史
		倫 理 学	倫 理 学
	東洋思想	イ ン ド 哲 学 史	イ ン ド 哲 学 史
		中 国 哲 学 史	中 国 哲 学 史
	芸 術 学	芸 術 学	美 学 ・ 美 術 史
広 人 文 学 コ ー ス			
歴史空間論	日 本 史 学	日 本 史 学	日 本 史 学
	ア ジ ア 史 学	東 洋 史 学	東 洋 史 学
		朝 鮮 史 学	朝 鮮 史 学
		考 古 学	考 古 学
	広域文明史学	西 洋 史 学	西 洋 史 学
地 理 学	イ ス ラ ム 文 明 史 学	イ ス ラ ム 文 明 史 学	
言語・文学	日本・東洋文学	地 理 学	地 理 学
		国 語 学 ・ 国 文 学	国 語 学 ・ 国 文 学
	中 国 文 学	中 国 文 学	
	西 洋 文 学	英 語 学 ・ 英 文 学	英 語 学 ・ 英 文 学
		独 文 学	独 文 学
		仏 文 学	仏 文 学
言 語 学	言 語 学	言 語 学 ・ 応 用 言 語 学	

歴史空間論専攻に歴史学拠点コースを置く。

九州大学における学府・研究院制度について

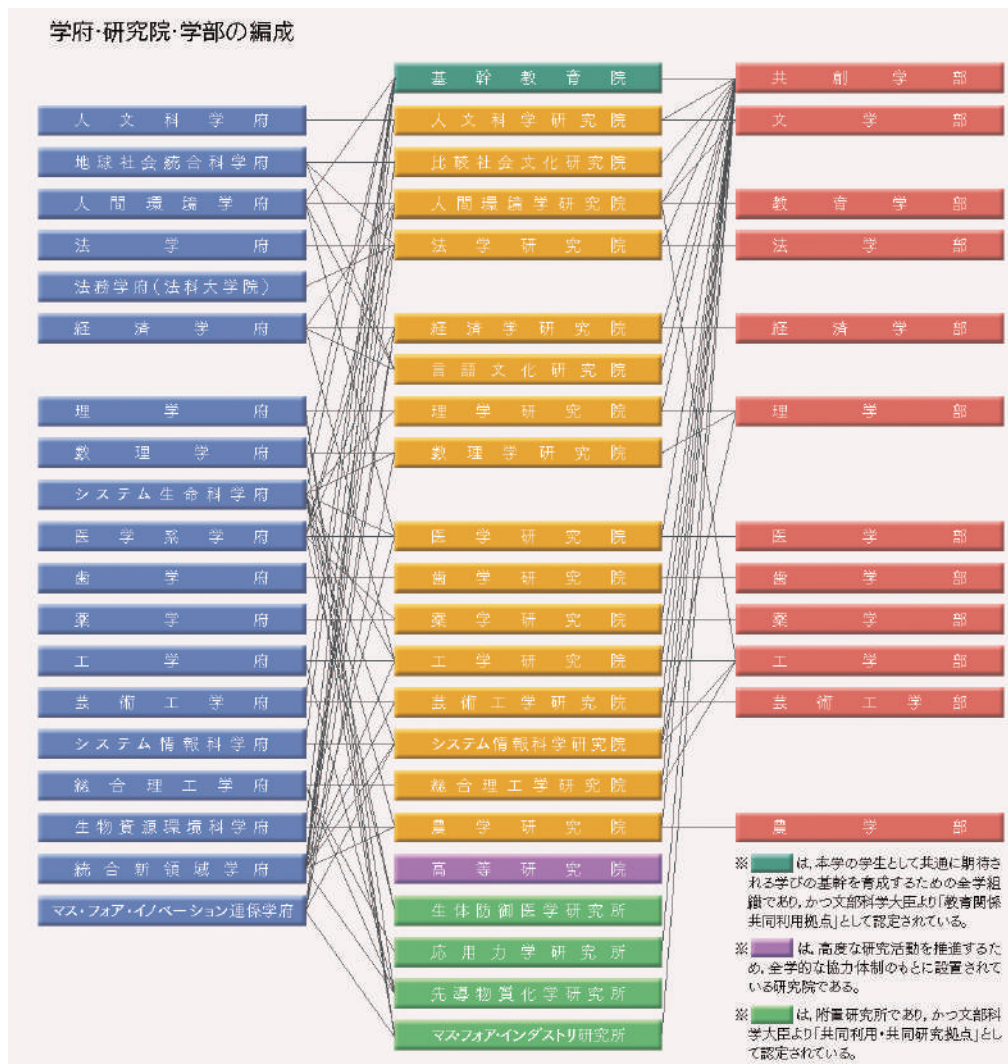
九州大学における学府・研究院制度は、2000（平成12）年4月の「全学大学院重点化」の完了と同時に、全国で初めて導入されました。これは、大学院の教育研究組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」（Graduate School）と、教員の所属する研究組織である「研究院」（Faculty）とに分離し、相互の柔軟な連携を図るものです。

従来の大学院では、「研究科」という形で教育組織と研究組織が一体となっており、新しい人材を育成する必要から「研究科・専攻」を再編する場合、教員組織の再編を不可欠とし、「講座」の分割・移動を余儀なくされてきました。

こうした教育組織と研究組織の摩擦を解消し、九州大学の改革の「大綱案」に謳われている「自律的に変革し、活力を維持し続けるシステム」を形成するため

に、1999（平成11）年5月に学校教育法が改正されたのを機に、九州大学では、大学院の教育組織と研究組織をそれぞれの必要から独自に再編できるように、両者を分離したのです。教育組織と研究組織との関係は下に示す図の通りです。

文学部を担当する教員の多くは、人文科学研究院に属し、大学院では人文科学府を担当していますが、心理学研究室、比較宗教学研究室、社会学・地域福祉社会学研究室的教員は、人間環境学研究院に属し、大学院では人間環境学府を担当しています。また考古学研究室の教員は、大学院では地球社会統合科学府も兼担しています。また、基幹教育院・比較社会文化研究院、言語文化研究院の教員の一部が、大学院では人文科学府を担当しています。



アドミッションポリシー

Admission Policy

人文基礎専攻

1. 教育理念

本専攻は、人間文化の根本原理を究めることを目標としていますが、それと同時に、人間文化の多様な展開に関する専門的な研究を通じて、現代社会の提起する諸問題を、根源的に考察できる人材を養成することも目標としています。修士課程と博士後期課程の修了は、所定の単位取得と論文作成をもって認定します。

2. 教育プログラム

本専攻は、哲学、倫理学、インド哲学史、中国哲学史、芸術学、広人文学コースの6つの専修に分かれており、学生はいずれかの専修を選択して、指導教員（1名）と副指導教員（複数名）のもとで研究指導を受けます。修士課程は論文指導2単位を含めた合計30単位以上の取得と修士論文、博士後期課程は論文指導4単位の取得と博士論文が修了要件となります。

3. 求める学生像

本専攻は、真・善・美という人類の最も基本的な価値を研究することが特色ですので、学生は、ものごとを根本から思索する能力が求められます。そのために、過去の偉大な古典を厳密かつ正確に読解する能力が必要とされます。

4. 入学選抜の基本方針

入学選抜に当たっては、なによりも本専攻の教育理念にふさわしい人材の確保を基本方針とします。そのために、研究計画書あるいは論文の提出を求めるとともに、各専修に必要な専門知識や語学力を問い、さらに口頭試問を課します。

歴史空間論専攻

1. 教育理念

本専攻は、歴史的条件や地理的条件によってさまざまに異なる社会（経済・政治・文化の総体）に関する専門的な研究を通じて、国際的な交流や相互理解に必要不可欠な知識を提示できる人材を養成することを目標としています。修士課程と博士後期課程の修了は、所定の単位取得と論文作成をもって認定します。

2. 教育プログラム

本専攻は、日本史学、東洋史学、朝鮮史学、考古学、西洋史学、イスラム文明史学、地理学の7専修から構成され、また修士課程における分野横断的な教育カリキュラムとして歴史学拠点コースを置いています。学生はいずれかの専修を選択して、指導教員（1名）と副指導教員（複数名）のもとで研究指導を受けます。修士課程は論文指導2単位を含めた合計30単位以上の取得と修士論文、博士後期課程は論文指導4単位の取得と博士論文が修了要件となりま

す。また歴史学拠点コースの学生は、所定の関連科目を4単位以上取得しなくてはなりません。

3. 求める学生像

本専攻では、現代社会の成り立ちを、時間的あるいは空間的な社会の多様性への関心を通じて、見通すことを目標とします。具体的には、自ら史資料を収集・解析することで、特定の地域や時代における社会の特質を、実証的に、また理論的に解明する能力が求められます。その過程においては、人間精神の多様性を認識するセンスと、論理的思考力および独創性を養っていくことが期待されます。

4. 入学選抜の基本方針

入学選抜に当たっては、何よりも本専攻の教育理念にふさわしい人材の確保を基本方針とします。そのため、論文あるいは研究計画書の提出を求めるとともに、各専修に必要な専門知識や語学力を問い、さらに口頭試問を課します。

言語・文学専攻

1. 教育理念

本専攻は、言語および言語文化について、その多様なあり方を究めることを目標とします。そしてまた、それらの研究を通して、現代社会の提起する諸問題に対しても、根源的に考察しうる人材を養成することを目標としています。修士課程と博士後期課程の修了は、所定の単位取得と論文作成をもって認定します。

2. 教育プログラム

本専攻は、国語学・国文学、中国文学、英語学・英文学、独文学、仏文学、言語学の6専修から構成されています。学生はいずれかの専修を選択して、指導教員（1名）と副指導教員（複数名）のもとで研究指導を受けます。修士課程は論文指導2単位を含めた合計30単位以上の取得と修士論文、博士後期課程は論文指導4単位の取得と博士論文が修了要件となります。

3. 求める学生像

本専攻は、言語という人類の最も基本的な知についての研究を特色とすることから、学生は、ものごとを根本から思索する能力が求められます。そのためにまた、現代の言語現象のみならず、過去に蓄積された重要な文献、とりわけ古典と呼ばれる文献を、厳密かつ正確に読解する能力も必要とされます。

4. 入学選抜の基本方針

入学選抜に当たっては、何よりも本専攻の教育理念にふさわしい人材の確保を基本方針とします。そのため、論文あるいは研究計画書の提出を求めるとともに、各専修に必要な専門知識や語学力を問い、さらに口頭試問を課します。

教育の特色 *Education*

履修方法

修士課程

- 1年次 4月末(10月入学者は10月末)
「研究計画書」提出、指導教員・副指導教員の決定
- ↓
- 2年次 4月末(10月入学者は10月末)
「研究計画書」提出
- 11月末(10月入学者は5月末)
「修士論文題目届」提出
- 1月8日(10月入学者は7月3日)
「修士論文」提出締切
- 2月(10月入学者は7月20日~24日)
最終試験

指導教員の授業科目8単位以上、
人文科学府共通科目2単位以上、
自専攻および他専攻の授業科目18単位以上、
論文指導2単位以上、合計30単位以上の単位取得

博士後期課程

- 1年次 4月末(10月入学者は10月末)
「研究計画書」提出、
指導教員・副指導教員の決定
- 1月下旬(10月入学者は6月下旬)
「博士課程論文作成計画書」提出
- ↓
- 2年次 4月末(10月入学者は10月末)
「研究計画書」提出
- 4月(10月入学者は10月)
「博士論文作成予備資格」
- ↓
- 3年次 4月末(10月入学者は10月末)
「研究計画書」提出
- 12月27日(10月入学者は6月30日)
「博士論文」提出締切
最終試験

論文指導4単位取得、
博士演習4単位取得

※博士後期課程の編入学時期として10月も可能です
(本学府修士課程9月修了者の進学を含む)。

人文科学府共通科目

人文科学府では共通科目として、「アカデミックプレゼンテーション」と「データサイエンス基礎」を設定しています。

この授業は、自らの研究を他分野の人々にも説得力をもって説明する能力と、人文学でも必須となった

データ分析能力の向上を目指して開設されたものです。

修士課程の学生はその専攻を問わず、共通科目から2単位以上を取得することが義務づけられています。

広人文学コース



Fieldwork (Futagoji)

日本の内外から日本を眺める

The International Master's Program (IMAP) and International Doctorate (IDOC) in Japanese Humanities

The International Master's Program (IMAP) in Japanese Humanities (founded 2011) and the International Doctorate (IDOC) in Japanese Humanities (founded 2017) are the only two graduate programs conducted in English within Kyushu University's Graduate School of Humanities. Both programs are MEXT-certified and each enrolls a select group of international and Japanese students. All students have full access to the educational strengths and facilities of a world-class Japanese university and benefit from the rich array of academic resources it offers.

Both MA and PhD candidates study with specialists in Japanese history, architectural history, art history and visual culture, literature, religion, and other facets of the humanities. Students enroll in rigorous seminars on general and specialist topics—many of which incorporate study at cultural and historical sites within Japan. The IMAP and IDOC in Japanese Humanities are characterized by closely supervised instruction and small seminars customized to meet the long-term academic goals of each student. Seminars taught by primary faculty generally emphasize premodern Japan and its relationship to East Asia; these are supplemented by courses offered by affiliated and guest faculty in topics ranging from Japanese film to archaeology. There are also courses in field-specific methodologies, research methods, and premodern languages (including *kobun* and *kanbun*).

Among other requirements, all IMAP and IDOC students are required to write a thesis in English under the guidance of primary and secondary academic advisors. Depending on their Japanese-language proficiency, MA candidates may select additional courses from the Graduate School of Humanities or other graduate schools within the university; PhD candidates are required to enroll in graduate courses taught in Japanese.

So far, students have come to the program from all over the world, including from within Japan. Every year the program also hosts a number of “courtesy students” who may join selected seminars and activities. These include exchange students from partner universities (advanced undergraduate and graduate students) as well as research students (supported by MEXT and other organizations, or self-funded). This rich mix of backgrounds and cultures distinguishes the IMAP and IDOC programs. As Japanese students study alongside international students, non-native English speakers hone their skills in academic English writing and reading, while others enhance their Japanese language skills—with all students focused on graduate-level Japanese humanities research.

Upon graduation, MA recipients might continue their study at the PhD level in Japan and overseas, or secure employment in journalism, public service, teaching and research positions, tourism, and information technology.

PhD candidates will typically seek academic or research positions.

The IMAP and IDOC in Japanese Humanities offer many activities and opportunities for students such as research excursions and interactions with scholars from around the world. Visiting faculty give intensive courses or special lectures. These visiting scholars rank among world experts in their fields; they are chosen to enhance the curriculum or to support the research pursued by a particular student or students. Students also assist in planning and implementing these important gatherings and benefit from the expertise, curricular variety, and network of introductions to the world of Japan Studies scholarship that these visitors provide. Lectures and courses frequently include field trips to historic sites, museums, and other cultural activities. These may be in Fukuoka or nearby Dazaifu, or we may travel to more distant destinations. Excursions or multi-day trips have included the study of history and sites on the islands of Ōshima and Tsushima; ceramics studios and the ruins of Nagoya castle near Karatsu; temples and shrines on the Kunisaki peninsula; Usa Hachimangū shrine; Hosokawa clan history in Kumamoto; Nagasaki with visits to the Atomic Bomb Museum, Ōbaku Zen temples, Dejima, and Japan's Christian legacy; and many other places in Kyushu or nearby Busan (Republic of Korea).

IMAP and IDOC faculty also oversees the English-language *Journal of Asian Humanities at Kyushu University (JAH-Q)*. *JAH-Q* is an open-access, Scopus-indexed, double-blind peer-reviewed journal. It features scholarly essays and reviews in all fields of the humanities in Asia from scholars around the world and has been published by the School of Letters, Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities at Kyushu University since 2016.



The *Journal of Asian Humanities at Kyushu University (JAH-Q)*



Fieldwork
(University Art Museum, Tokyo University of the Arts)

アントン・シュヴァイツァー Anton SCHWEIZER

広人文学コース/教授

専門: 日本美術史・建築史、
美術・芸術における国際交流

専門分野: At the center of Schweizer's research is the deployment of artifacts in space, especially site planning and interior decoration in the widest sense during the late medieval and early modern periods. This focus is accompanied by a strong interest in issues of materiality, manufacturing technologies, and temporality. A second area of interest comprises manifestations of otherness (depictions of Asian, African, and European foreigners; courtesans; and samurai), transcultural picture migration, and export art (especially lacquer). He is a corresponding member of the Azuchi Castle Screens Research Project and, together with IMAP faculty member Yu Yang, a PI of the Getty-funded project "Shared Coasts, Divided Historiographies."

主要業績: - "Bridges into Metaphorical Space: Hideyoshi's Imperial Landscape at Osaka," in *Landscape and Authority in the Early Modern World* (University of Pennsylvania Press, 2023), 139–72.
- "Puppets for the Margravine: Japanese Ephemera and their (Re)Construction in Eighteenth-Century Chinoiserie," *21: Inquiries into Art, History, and the Visual* 2:1 (2021), 3–46.
- "The Elector's Japan: Reading Export Lacquer in Baroque Germany," in *Production, Distribution and Appreciation: New Aspects on East Asian Lacquer Wares*, vol. 1 of *European Studies in Asian Art and Archaeology* (Brill, 2018).
- *Ōsaki Hachiman: Architecture, Materiality, and Samurai Power in Seventeenth-Century Japan* (Reimer, 2016).
- *Japanische Lackkunst für Bayerns Fürsten: Die Japanischen Lackmöbel der Staatlichen Münzsammlung München*, co-edited with Martin Hirsch and Dietrich O. A. Klose (Staatliche Münzsammlung München, 2011).
- "Translating Visions: A Japanese Lacquer Plaque of the Haram of Mecca in the L. A. Mayer Memorial Museum, Jerusalem," with Avinoam Shalem, *Ars Orientalis* 39 (2010), 148–73.

エレン・ヴァン=フーテム Ellen VAN GOETHEM

広人文学コース/教授

専門: 日本古代史、思想史

専門分野: Van Goethem specializes in the history and archaeology of the Asuka, Nara, and early Heian periods. Her primary focus is on Kanmu Tennō, on the layout of Japan's ancient capital cities, and on inscribed wooden tablets. She has also published on site divination and on the influence of fengshui thought on contemporary Japanese architecture. In her current research, an institutional and social history of Heian Jingū, she investigates issues related to the reconstruction of long-lost buildings, the deification of emperors, the presence of Chinese cosmological symbolism in Shinto shrines, and changes in perceptions of Heian Jingū since its founding in the late nineteenth century. Van Goethem teaches courses in pre-modern Japanese history, archaeology, material culture, and thought; research methods and digital humanities; and East-West encounters.

主要業績: - *Journal of Asian Humanities at Kyushu University* (JAH-Q), Editor 2016–2020, Editor-in-Chief 2023–.
- 「時代祭の起源—禍転じて福となす」図書10月号 (2023), 22–24.
- 「宮都の敷地選定と風水」日本の都城と東アジア (Vietnam National University, Japan Foundation, 2022), 57–70.
- "Animated City: Life Force, Guardians, and Contemporary Architecture in Kyoto," in *Spirits and Animism in Contemporary Japan* (Bloomsbury, 2019), 81–94.
- "Heian Jingū: Monument or Shintō Shrine?," *Journal of Religion in Japan* 7.1 (2018), 1–26.
- "Of Trees and Beasts: Site Selection in Pre-modern East Asia," *Journal of Asian Humanities at Kyushu University* (JAH-Q) 1 (2016), 1–7.
- "Interroger le paysage: À la recherche des quatre divinités protégeant les capitales japonaises de style chinois," in *Dispositifs et notions de la spatialité japonaise* (Presses Polytechniques Universitaires Romandes, 2014), 80–100.
- "Feng Shui Symbolism in Japan: The Four Divine Beasts," in *Theory and Reality of Feng Shui in Architecture and Landscape Art* (Hum-

boldt-Universität zu Berlin, 2013), 35–48.

- 「歴史資料・資源としての木簡 ―長岡京の場合―」交響する古代II (明治大学古代学研究所, 2012), 35–40.

- “The Four Directional Animals in East Asia: A Comparative Analysis,” in *Feng Shui (Kan Yu) and Architecture* (Humboldt-Universität zu Berlin, 2011), 201–16.

- *Nagaoka, Japan’s Forgotten Capital* (Brill, 2008).



Fieldwork (Kumano magaibutsu)

ケイレブ・カーター

Caleb CARTER

広人文学コース/准教授

専門: 日本の宗教史、仏教学

専門分野: Carter specializes in the religions of Japan with a focus on mountains. He recently published a book on the historical formation of Shugendō. In addition, Carter has published articles on ‘dark’ pilgrimage in the Edo period and the contemporary phenomenon of ‘power spots’ (*pawāsupotto*). His current research concerns intersections between mountain worship and mountaineering in Japan’s modern period as well as a project on sacred graffiti at temples and shrines in the country. Carter’s teaching revolves around issues including space and place, narrative and folklore, women and gender, and ecology.

主要業績: - *A Path into the Mountains: Shugendō and Mount Togakushi* (University of Hawai’i Press, 2022).

- “Mountains,” in *The New Nanzan Guide to Japanese Religions*, eds. Jolyon B. Thomas and Matthew D. McMullen, 213–28 (Nanzan Library of Asian Religion and Culture, University of Hawai’i Press, 2025).

- “The Metamorphic Spirit: Mountaineering, Secularity, and Spirituality at the Turn of Japan’s Twentieth Century.” *Religion* 55.2 (2024), 393–410.

- “From Hucksters to Holy Men: Reimagining the Mountain Ascetic in Late Medieval Japan.” *Journal of Religion in Japan* 12.2 (2023), 127–51.

- “The Spread of Shinto and Shugendō in the Eighteenth Century: An Introduction to and Translation of the *Shugen Ichijitsu Reisō Shintō mikki*.” *Japan Review* 37 (2022).

- “The Demonic Landscape: *Oni* Legends and the Making of Japan’s Early Modern Countryside,” *Japan Forum* 31.4 (2019), 467–86.

- “Power Spots and the Charged Landscape of Shinto,” *Japanese Journal of Religious Studies* 45.1 (2018), 145–73.

- “Constructing a Place, Fracturing a Geography: The Case of the Japanese Tendai Cleric Jōin,” *History of Religions* 56.3 (2017), 289–310.

- 「乗因の作り変えた山王一実神道―戸隠山の位置をめぐる」季刊日本思想史82 (2017), 90–106.

楊 昱 (ヤン・ユウ)

Yu YANG

広人文学コース/講師

専門: 日本近代建築史・都市史・美術史

専門分野: Yang specializes in architecture, urbanism, and visual culture of modern Japan. Her current working manuscript examines Japanese architectural activities and urban culture in colonial Manchuria. She is also interested in the exchange of people, artifacts, and ideas within the Japanese empire during the first half of the twentieth century. Yang teaches courses in modern Japanese art and architecture, urbanism, and visual culture of modern East Asia. She is also a Co-Principal Investigator, together with IMAP faculty member Anton Schweizer, of the Getty-funded research project “Shared Coasts, Divided Historiographies.”

主要業績: - 「歴史資料としての満洲の地図」『歴史資料としての視覚文化』東洋英和女学院大学メディア・コミュニケーション研究所 (春風社、2025)、167-91.
- 「反思城市規劃與都市空間研究的烏托邦視角: 從歷史地圖考察長春近代都市空間 (1899-1932)」藝術理論與藝術史研究11 (2023), 94-122.
- 「圖像與空間: 長春近代商埠地的空間形成與發展」藝術理論與藝術史研究 10 (2022), 103-20.
- “Shadows of Urban Utopia: Japanese Housing in Colonial Manchuria,” *Proceedings of the 35th World Congress of Art History- Motion: Transformation* (2021), 317-22.
- “Touring Buildings of Colonial Modernity: Architecture and Tourism in Manchuria (1905-1945),” *Proceedings of EAAC 2015 Gwangju Practical History* (2015), 895-98.



Fieldwork (Hakozakigū)

ダーヴィッド・ヴァイス

David WEISS

広人文学コース/講師

専門: 日本文学、日本思想史

専門分野: Weiss's research focuses on the history of ideas, especially the mythology of ancient Japan and its function in Japan's cultural memory, including its utilization in modern nation-building and in justifying colonial rule. More broadly, he is interested in the intercultural transfer of ideas (especially within the Sinosphere) and questions of identity formation (perceptions of self and other). His current research project situates the emergence of ethnology in Japan as an academic discipline in its global historical context. Weiss teaches courses in premodern Japanese literature, intellectual history, classical Japanese (*bungo* and *kanbun*), and cultural memory studies.

主要業績: - *Korea, Japan, and the Vienna School of Ethnology* (Korea Europe Review 6), co-edited with Juljan Biontino and Bernhard Scheid, 2024.
- *Religionspolitik und politische Religion in Japan und Europa: Debatten um Polytheismus, Nationalismus und Kolonialismus*, co-edited with Michael Mandelartz (J. B. Metzler, 2024).
- *The God Susanoo and Korea in Japan's Cultural Memory: Ancient Myths and Modern Empire* (Bloomsbury Academic, 2022)
- 「神国の境界: スサノオと日鮮同祖論について」立教大学ドイツ文学論集 ASPEKT 54 (2021), 3-11.
- “Slaying the Serpent: Comparative Mythological Perspectives on Susanoo's Dragon Fight,” *Journal of Asian Humanities at Kyushu University (JAH-Q)* 3 (2018), 1-20.
- “Die politische Dimension der japanischen Mythologie: Forschung und Ideologie,” in *Religion, Politik und Ideologie: Beiträge zu einer kritischen Kulturwissenschaft*, eds. Michael Wachutka, Monika Schimpf, and Birgit Staemmler (Iudicium, 2018), 338-49.



Fieldwork (Okinawa)



The IMAP Research Room

歴史学拠点コース

歴史学拠点コースとは？

人文科学府では、地球社会統合科学府と協力し、歴史学関係教員を結集して、両学府にまたがる「歴史学拠点コース」を設置しています。ここでは、両学府の歴史学関係の科目を相互乗り入れにし、専門領域が異なる複数教員による合同演習「領域横断ゼミ」を開講しています。歴史学拠点コースを選択した大学院生は、これを履修し、歴史学の幅広い視野と知識・方法を身につけた研究者や高度専門職業人を目指します。

歴史学総合のための「領域横断ゼミ」

歴史学拠点コースでは、専修ごとの必修科目に加えて、「領域横断ゼミ」（「領域横断研究」「領域研究」）が専修横断的に開講されており、4単位以上の修得が必須となっています。

開講科目一覧

東アジア考古学・先史学領域横断研究

東アジア史領域横断研究

イスラム史領域研究

西洋史領域研究

空間論領域研究



東アジア史領域横断研究（中世）の風景



領域横断ゼミ（拡大版）の風景

生活・研究活動を支援する制度等

日本学生支援機構による奨学制度

日本学生支援機構(旧日本育英会)をはじめ都道府県等の地方公共団体の奨学制度を利用することができます。

●日本学生支援機構奨学金貸与の種類及び貸与金額等(2025(令和7)年度)

種類	貸与月額	対象学年	貸与期間
第一種奨学生 (無利子貸与)	50,000円又は88,000円	修士課程	2年
	80,000円又は122,000円	博士後期課程	3年
第二種奨学生 (有利子貸与)	5万円・8万円・10万円・13万円・15万円から選択	修士課程 博士後期課程	2年 3年
入学時特別増額貸与奨学金	有利子 金額 (一時金)	100,000円、200,000円、300,000円、400,000円、500,000円 ①上記5種類の金額から選択できます。 ②第一種奨学金又は第二種奨学金申込者で所定の条件を満たす者	

●日本学生支援機構奨学金貸与者数(人)

		2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度	2025 (令和7) 年度
修士課程	第一種	8	7	11	18	21	21
	第二種	3	0	0	1	4	6
博士課程	第一種	1	8	9	9	10	6
	第二種	0	0	0	1	1	2

日本学術振興会のPD及びDC研究員

博士課程修了者(PD)及び博士課程在学者(DC)等で、優れた研究能力を有し、大学その他の研究機関で研究に専念することを希望する者を「特別研究員」に採用し、研究奨学金を支給する制度です。

●日本学術振興会の研究員(PD・DC)採用者数(人)

	2019 (令和元) 年度	2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度	2025 (令和7) 年度
PD	2	0	0	1	3	1	0
DC	8	3	2	5	4	4	5

TA制度

ティーチング・アシスタント(TA)制度は、修士課程及び博士後期課程の学生を対象とし、教育補助業務等により、学部教育の充実を図るとともに、指導者としての機会を提供しようとする制度です。

●ティーチング・アシスタント(TA)の採用者数(人)

	2018 (平成30) 年度	2019 (令和元) 年度	2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度
TA	58	61	58	78	61	61	59

RA制度

リサーチ・アシスタント(RA)制度は、博士後期課程の学生を対象とし、人文科学研究院において行う研究プロジェクト等の補助業務等を担うことにより、研究体制の強化と若手研究者の育成等を図ろうとする制度です。

●リサーチ・アシスタント(RA)の採用者数(人)

	2018 (平成30) 年度	2019 (令和元) 年度	2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度
RA	19	17	48	69	38	40	44

長期履修制度

文学部・人文科学府には、様々な理由で長期にわたり修学に相当な制限を受ける学生のための「長期履修学生制度」があります。この制度は、通常の教育課程(学部生：4年間、修士学生：2年間、博士後期課程学生：3年間)を計画的に延長して履修できるようにするものです。

申請資格や手続きなど制度の詳細につきましては、「学生募集要項」あるいは「学生便覧」をご覧ください。また、不明な点がございましたら、人文社会科学系事務部教務課までお尋ねください。

学会発表支援事業に係る奨学金

本奨学金は、大学院生の研究発信を支援するため、学生が国内外の学会で研究発表をする際、それに要する費用の全部または一部を支給するものです。

外国人留学生研究支援事業に係る謝金支給

本謝金は、外国人留学生の研究活動をより円滑化すると同時に、日本人学生と留学生の積極的な交流を促し、教育・研究のグローバル化を図ることを目的に、人文科学府学生が留学生の学位論文などを校閲、校正する場合に支給するものです。

先輩からのメッセージ

Message from Graduates

大学で出会った新しい世界

田中 優奈 Yuna Tanaka

博士後期課程 (芸術学)



私は学部2年生から大学院博士後期課程の現在に至るまで、美学・美術史研究室に所属しています。この研究室は美学と美術史という2つの学問領域を対象にしていますが、私は美術史、その中でも西洋美術史（特に18世紀フランス美術）を専門に学んでいます。そして現在は大学院生として研究を続けながら、神戸市の学芸員として働いています。

私が美術史という学問に出会ったのは大学に入学してからです。九州大学の文学部では、最初の1年間は専門を決めずに様々な分野の授業を受けることになります。その1年間の中で、美術史の授業を初めて受け、研究室訪問で自身の研究について生き生きと語る先輩方の姿を目にし、この美学・美術史研究室を選びました。美術史の最大の魅力であり特徴は、研究対象が今も存在している美術作品であるということです。この研究室での学生生活を通して、作品を見ることの喜びと、そこからじっくり考えることの大切さを知りました。福岡は多くの美術館・博物館に恵まれた地でもあるので、展覧会を見に行くのにも良い環境です。

また、美学・美術史研究室の特徴として、「金曜会」の存在が挙げられます。学生による研究発表会のことですが、多種多様な時代・地域・作者・様式の作品について発表を聞くことができるため、とても刺激になります。自分が発表をする回は準備がいつも大変ですが、それ以上に得るものが多い貴重な機会です。

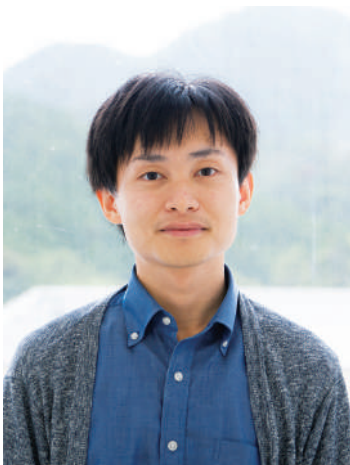
研究を深めていくためには、作品をよく見た上で様々な文献・史料を読み込むことが必要不可欠ですが、それは日本語や英語に限りません。特に私はフランス美術を専門にしているので、フランス語の語学力が必要でした。そのため大きな経験のひとつがフランス留学です。私は交換留学で約1年間パリに留学しました。言語の壁は高く辛い時期も多くありましたが、日本には見られない重要作品を数多く見られたこと、海外での生活を体験したことは、私の大きな糧となっています。また留学支援に限らず、九州大学には大学院生をサポートするための制度が多くあり、私は博士後期課程で生活費や研究費の支援を受けました。

こうした経験を経て、現在は博士号取得を目指して研究を続けながら学芸員として働いています。美学・美術史研究室は、大学入学前には想像もしなかった世界に私を連れて行ってくれました。それだけの多様な選択肢と可能性、それを叶えるサポート体制が九州大学には用意されています。

人文科学府で学ぶということ

宮岡 大 Hiroshi Miyaoka

鹿児島大学 法文教育学域法文学系・助教 (言語学修士)



私は学部と大学院の9年間、言語学研究室に所属しました。日本語方言の文法システムについて研究しています。この冊子を読んでいる皆さんなら、現在いわゆる人文社会系の大学院に進むこと、特にそこを出た後の厳しさについては、色々とお聞きでしょう。私の経験や感覚としてもそれは間違っていないと思います。以下、それは前提として皆さんにメッセージを記します。

人文科学府で学ぶことのメリットとデメリットについて、私の経験と思うところをお伝えしようと思います。メリットとしてはまず、教職員の方が皆さんを全面的にサポートしてください。言うまでも無く、各分野のプロフェッショナルである先生方からは多くのことを学べるでしょう。各部署にいらっしゃる職員の方々も、修学するための諸手続や奨学金の制度など、多方面で支えてくださいます。次に、ご自身と同じ境遇の学生が多くいます。ゼミや研究室単位でも大学院全体をみても、学生数は多いほうだと思います。研究分野によらず、先輩・同期・後輩の存在は私にとって様々な側面で大きいものでした。そして、図書館の所蔵文献がとても充実しています。私の研究では、必要になった文献の多くは図書館にありました。もし所蔵が無かったとしても、取寄の手続がすぐ簡単にできます。

デメリットとして挙げられるのは、首都圏や京阪神との距離です。分野によるかもしれませんが、昨今はオンライン開催も増えてはいますが、大規模な学会や研究会の多くは大都市で開催されると思います。そのような会に気軽には行けないうでしょう。同分野の研究者と対面でお話しして、顔と名前や研究内容を覚えてもらったり、色々な情報を入手したりという機会は得づらいと思います。加えて、そのようにして人との交流が少なくなってしまうことは、自分の研究や所属組織だけに閉じ込められてしまう蝸壺化を引き起こして視野が狭くなってしまう、万が一そこで何かあった時に外部の方に相談できなかつたりするという危険性があります。ただ、これについては様々な支援や考え方があってと思います。学会で発表する場合、人文科学府では旅費支援があったので活用しました。また、大都市との距離は、時流に軽々に流されず腰を据えて研究できる環境、と考えることもできるかもしれません。

このようなメリットとデメリットを把握して総合的に考慮した上で、大学院に進むか否か、人文科学府で学ぶか否か、判断することをおすすめします。これを読んだ皆さんの何かしらの参考になれば幸いです。

研究の先にあった教壇 踏切直しの修士課程

高橋 毅 Tsuyoshi Takahashi

福岡雙葉中学校・高等学校・常勤講師（歴史学修了）



私は現在、海域や植民地をめぐる戦争、および多様な立場の人々が織り成すせめぎ合いに着目しながら、近世イギリス帝国の国制とその実態を研究しています。かつては学部2年生から修士課程まで5年間、九州大学西洋史学研究室で過ごし、研究に没頭しました。とはいえ、はじめから歴史研究に興味を持っていただけではありません。

学部1年次には、かねてより世界史の教員志望だったため、教職過程を履修しました。また、陸上競技部に所属し、三段跳やりレーの選手としてグラウンドを駆け回っていました。しかし、2年次に研究室に配属され、西洋史学演習で「海軍強制徴募」というテーマに出会いました。それ以来、歴史研究の面白さにも次第にのめり込んでいきます。研究室で仲間や先生方と時にはぶつかり、時には共感し合いながら、多様な意見が行き交う中で皆で「知」を深めるのが楽しくてたまらなかったのです。

ターニングポイントは4年次でした。コロナ禍で卒業論文執筆と教員採用試験の準備を進める中で、自身の未熟さを痛感します。「まだまだ研究し足りない」「やるからには上を目指したい。」そういった想いで、修士課程は教員専修免許の取得ができることもあり、「研究者かつ教員」を志して、進学を決めました。

修士1年次の研究生活は私の想いと裏腹に順風満帆なものにはなりません。膨大な数の先行研究に振り回され、読んでも読んでも知識が足りない、研究対象もうまく定まらない、投稿論文のリジェクト、学会発表の失敗、コロナ禍で疲弊…何をやってもうまくいかない毎日でした。自身の存在価値を見失い、無力感に苛まれました。

そんな私が再び立ち上がるきっかけとなったのは、修士2年次に中高の非常勤講師として教壇に立ち始めたことです。研究を続けながらの教員は人生で最も忙しい日々でした。しかし、生徒たちの素朴な優しさに触れる中で、なぜ歴史を学ぶのか、なぜ過去の「人」と向き合うのかに気づかされました。言葉の専門性は違えど、生徒たちとともに学びたいこと、論文や学会発表で深めていくことは、本質的には同じだと気づいたのです。自分の人生と重ねながら、約300年前にアメリカの東海岸で生を紡いだ船乗りの日記を、虚心坦懐に読んでいきました。すると、不思議と学会報告も、論文の執筆も、少しずつうまくいくようになっていきました。

無事、修士論文の執筆を終えて社会人になってからは、修士課程のときには叶わなかった論文投稿に成功します。そして現在も、中高社会科の科目を幅広く担当しながら、ときおり史料と向き合う日々を過ごしています。

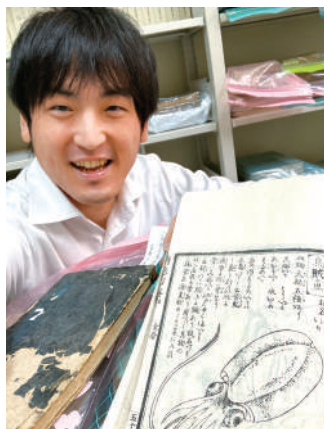
このような経験を通して培った問の立て方、史料の読み方、文章の書き方、そして「人」との向き合い方は、日々の教育活動に活かされている実感があります。私にとって、歴史研究と歴史教育は車の両輪のようなものだという事です。二つの車輪を回せるようになったのは、修士課程の2年間あってこそだと思っています。

我が国では残念ながら、研究職で生計を立てられるのはごく一部の人もかもしれません。しかし、「生涯学習」が提唱される今、研究の技術を身につけることは、全ての職業、とりわけ中高の教員にとって必要な経験になり得ます。ぜひ、九大の大学院を活用してみたいかでしょうか。

学ぶことの面白さ、地道な努力の大切さ

吉田 宰 Tsukasa Yoshida

尾道市立大学・准教授（国語学・国文学修了）



私は大学生（学士課程）から大学院生（修士課程、博士後期課程）まで、九州大学および同大学院の国語学・国文学研究室に所属していました。現在は広島県尾道市で大学教員として日本近世文学（江戸時代の文学）を専門に、とくに18世紀頃の文学や本屋の出版活動などを研究しています。また当時の文学が同時代の思想や自然科学とどのように関わっているのかにも興味があります。

大学や大学院では知的欲求にしたがって、自分が気になることを比較的自由に研究することができます。私の場合はもともと日本の古典文学に関心があり、とりわけ大学院では質・量ともに非常に恵まれた環境のもと学びを深めることができました。

たとえば全国屈指の総合大学である利点を活かし、九州大学附属図書館には時代や国、学問領域を問わず、様々な資料が膨大に所蔵されています。その中の1つに江戸時代の古典籍を数多く収蔵した「雅俗文庫」があります。大学院生の頃、私はその文庫の整理作業を指導教員のレクチャーを受けながら、ほかの大学院生と一緒に毎週1回（約3時間）行っていました。その整理作業では今から200～300年ほど前の（時にはさらに昔の）古典籍原本に直接触れ、著者は誰か、いつ頃作成されたのか、どのような内容か、といった情報を書誌カードに記録していきます。この経験は何ものにも代えがたく、この作業をとおして古典籍に関する専門的な知識を修得しつつ、それ以上に、本物の古典籍に向き合うことの面白さを思う存分味わうことができました。作業を進めるたびに自分の知らない古典籍の数々を目にし、「次はどのような古典籍に出会えるのかな」といつもワクワクしていました。

なお、今でも日本各地や海外に所蔵される古典籍を実地調査する際は胸が躍ります。また調査中に思いもよらない発見をした時の喜びと興奮は一度味わうと忘れられず、これも学問の醍醐味だと思います。

大学教員になった現在は研究・教育・校務などに忙しくしながらも、充実した日々を過ごしています。そして、今でも私の中では九州大学大学院で学び培ってきた経験が生き続けています。もっとも楽しいことだけでなく、辛く苦しい思いもしてきました。しかし、覚悟を決めて邁進し、その時々でできる努力を1つ1つ積み重ねていけば、大抵のことは意外と何とかなるものです。また思うようにいかなかったとしても、それまでに積み上げてきた努力は自らの糧となり、決して無駄になることはありません。

皆さんがこれから少しずつでも歩みを進め、ご自身の希望を叶えられることを心から願っています。

地域を知ることへの探究心に素直に向き合う

秋野 隆士 Takahito Akino

公益財団法人九州経済調査協会 情報研究部・研究主査 (地理学修士)



私は2019年度に歴史空間論専攻地理学専修の修士課程を修了し、現在は、九州地域の経済社会に関する調査研究機関である公益財団法人九州経済調査協会に勤めております。大学院での専門分野は農村地理学で、私の地元である福岡県柳川市の水路（クリーク）の地域的な維持管理の仕組みの解明をテーマとして研究しております。

私は学士課程では九州大学法学部に所属しており、行政学ゼミで地域政策や行政組織についての知見を深めました。一方で、元々大学入学時から地理学にも関心があり、入学以降毎年教養科目や他学部受講枠で地理学の授業を受け、研究室に入り浸っていました。そうした中で、今一度腰を据えて地理学を学び、複合的な視点からより深く地域を理解したいという思いを強くし、人文科学府に進学することを決意しました。

地理学研究室では、日々の授業での精読やゼミでの議論等を通じた先生方の丁寧なご指導のおかげで、地理学を構成する概念とじっくり向き合い、地域を多角的な視点から読み解く能力や姿勢を身につけることができました。そして、地理学の特徴であるフィールドワークの実践を通じて、現場に実直に向き合い、事実を丹念に積み上げ、理論と照らしつつ価値ある情報としてまとめあげる能力を培うことができたと考えています。修士論文の完成に至るまで幾度となく図書館に籠り資料を探索し、何十回と現場に足を運び、水路の維持管理や水門操作の担い手の方々に話を聞いて回った日々は、大変ながらも充実したものでした。研究室生活では、地理学愛溢れる先輩・同期・

後輩とともに学び、踏査したことがとても大きな思い出となっています。就職した今でもありがたいことに継続的につながりを持つことができ、研究室の巡検に参加させてもらったり、後輩と自主的にフィールドワークを行ったりしています。

就職後は、各種経済効果分析や脱炭素、循環経済、商店街活性化、公共空間の利活用など、九州経済に関わる幅広いテーマの調査分析業務に従事しています。大学院の時は異なる分野や視点に向き合う日々ですが、そうした中でも、現地に足を運び、観察し、話を聞いて情報を丹念に収集・読解する重要性を再認識する機会が多くあります。こうした普遍的な調査スキルや姿勢を大学院で学ぶことができたことは幸運であったと実感しています。

業務の中で新たな分野に挑戦できること、また、多方面で活躍する専門家や企業人・地域のプレイヤーと接して大なる刺激を受けながら、調査研究を通じて地域のために貢献できることに、現在大きなやりがいを感じています。これからも、大学院での学びと経験を活かしつつ、九州地域の発展に寄与できるよう、日々精進して参りたいと思っています。

どのような将来を目指す場合でも、大学院での学びはきっと皆様の土台となってくれます。ぜひ知的好奇心を存分に発揮され、充実した大学院生活を送られることを願っています。

Studying Japan From Within

ヌラディ ラディティヤ ハリマン NURADI Raditya Halimawan 国立歴史民俗博物館特任助教 (広人文学修士)



I imagine many of you are familiar with certain anime and manga titles, including *Demon Slayer* or *One Piece*. I would not be surprised if your experience with these fascinating stories and characters draws your interest to Japan. When I first came to Japan—to Fukuoka—over ten years ago, I knew nothing about Japanese culture, history, language, or the ever-changing world of Japanese popular culture. And now, I am a scholar of Japanese religions, specializing in religion and popular culture. My research explores what is commonly referred to as anime pilgrimages, which are these journeys and visits to significant sites featured in anime or manga.

My interest in my research topic stems not only from my experience living in Japan, but also from the interdisciplinary nature of my training in the International Master's (IMAP) and the International Doctorate (IDOC) Programs in Japanese Humanities at Kyushu University. Lectures by Japan Studies specialists from various institutions all over the world, fieldtrips to various historical sites, including temples and museums, and, more importantly, the experience of studying Japan while living in Japan. Many of my ideas as a scholar and my approach to research have been influenced by being exposed to the interdisciplinary and international environment provided through the program. Academia as a career path remains one of the most perilous career choices one could possibly make, and despite being a full-time Assistant Professor at a research institution in Japan, I would still recommend people to steer away from an academic career. But if you enjoy doing research, and you think an academic career is right for you, then there is truly no other program that can provide you with the kind of experience and training that the IMAP/IDOC program can.

The graduate school experience in a standard program at a Japanese university offers a very different experience from those in the United States or the United Kingdom. While there is not enough space here to discuss all the differences, the IMAP/IDOC program can give you access to the resources, including texts, objects, and people, necessary in Japanese humanities research, while keeping you connected to the international Anglophone research community. These are opportunities that, unfortunately, remain unavailable for most Japanese Studies graduate programs. If you do end up choosing to study at Kyushu University, I have one final suggestion: Get out of class and explore Fukuoka! It truly is a wonderful city and one that I have been fortunate enough to call home.

博士論文一覽 *Doctoral Dissertations*

(2025 (令和7) 年4月現在 過去4年分を掲載)

● 課程博士(2024(令和6)年度)

氏名	専修	論文名
李 宜葉	芸術学	元代水墨人物画の研究—画僧による作品を中心に—
横山 慎悟	中国哲学史	清華簡伊尹文獻に関する研究
Raditya Halimawan Nuradi	広人文学	Travel, Pray, Play: Anime Pilgrimages in Contemporary Japan
石川 充ユージン	独文学	説教者マイスター・エックハルトの合一に関する研究
後藤 真理子	哲学	精神疾患の存在論的身分に関する検討——その実在性について
前田 佳那	芸術学	北宋建国期における都開封の山水画
林 義大	日本史学	近現代日本と宗教法人
松尾 大輝	日本史学	中世北部九州における地域権力形成過程の研究—宗氏・少弐氏を事例として—
王 自強	国語学・国文学	近世後期詩壇の研究—性霊詩風の形成と漢詩の日本化—
汪 洋	中国文学	趙翼詩歌研究
末永 広大	英語学・英文学	The Interface-Based Analysis of Subject Movement under Free Merger (自由併合下における主語移動のインターフェイスに基づく分析)
尹 伊萌	英語学・英文学	Power of Illness in the Brontë Sisters' Novels: Infection, Desire, and Women's Resistance (フロンテ姉妹の小説における病の力: 感染、欲望と女性の抵抗)
陳 禔璇	中国文学	唐汝詢『唐詩解』に関する研究

● 課程博士(2023(令和5)年度)

氏名	専修	論文名
千 受珉	朝鮮史学	近代朝鮮における愛国婦人会の活動
辻 大地	イスラム文明史学	前近代アラブ・イスラム社会における〈同性愛〉概念の誕生
武 夢茹	芸術学	近代中国の洋画家関紫蘭の女性像の研究
森 結	芸術学	ルネサンスの社会と古代趣味
韓 相一	日本史学	明治後期における日本の対韓政策の展開
吉田 智史	日本史学	朝鮮通信使の通航と迎接に関する研究
李 寧	考古学	青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の生成と展開
古田 龍啓	国語学・国文学	抄物資料を活用した日本語文法史研究
千葉 直人	国語学・国文学	「とりかへばや」の研究
松下 紗耶	英語学・英文学	Performing Whiteness: Racial Representations in Selected Works of William Faulkner
森竹 希望	英語学・英文学	Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications
松岡 葵	言語学	福岡県柳川市方言の記述研究
宮岡 大	言語学	日本語諸方言における「ラ行五段化」の総合的研究

● 課程博士(2022(令和4)年度)

氏名	専修	論文名
夏 歆	東洋史学	明代後期、東南沿海地域の交易と海防—胡宗憲の倭寇対策と南澳島密貿易—
王 丹凝	言語学	南琉球宮古語城辺町新城方言の文法
DANIEL CORY GALLAGHER	言語学	Investigation of the neural basis of second language acquisition: An electroencephalography and transcranial electrical stimulation study (第二言語獲得の神経基盤の解明: 脳波と経頭蓋電気刺激による研究)
越坂 裕太	日本史学	近世大名による献上行為の儀礼化に関する研究
中島 潤	言語学	Neural basis of morphologically complex word processing: EEG studies (脳波実験による形態的に複雑な語処理の神経基盤の研究)

● 課程博士(2021(令和3)年度)

氏名	専修	論文名
田中 美佳	朝鮮史学	近代朝鮮における出版文化の形成と日本——出版社新文館(1908-1922)を中心に
王 昊聰	中国文学	陸機史傳體文學研究
前田 修輔	日本史学	近現代日本と国葬
譚 永超	考古学	殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開
隈部 歩	英語学・英文学	Speaking the Unspoken Tales: The Image of Woman and the View of Life and Death in George MacDonald's Works (語られなかった物語を語る——ジョージ・マクドナルド作品における女性像と死生観)
渡邊 裕子	英語学・英文学	The Power of Re-Creations: A Consideration of the Interaction between Stories and Readers in J. R. R. Tolkien's Works (再創造の力: J. R. R. Tolkien作品における物語と読者の相互作用に関する考察)
岩下 いずみ	英語学・英文学	Forming Community in James Joyce's Works: The Recurrence of Classical Themes and Visual Culture (ジェイムズ・ジョイス作品における共同体形成——古典テーマの反復と視覚文化——)
吉村 幸	英語学・英文学	William Faulkner in the 1940s: The Writer's Dilemma between the South and the United States of America (1940年代におけるウィリアム・フォークナーの創作活動の軌跡—国家と南部に揺れる作家の苦悩)
大澤 遼可	独文学	ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」——「自己感覚」から「心情」へ——
金 アリン	国語学・国文学	徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究
米良 ゆき	芸術学	ヨハン・マッテソンの音楽論——音の感覚的認識を通じた形而上的展開——
占部 由子	言語学	南琉球八重山語石垣島白保方言の記述研究

● 論文博士(2024(令和6)年度)

氏名	専修	論文名
川上 貴子	芸術学	国家珍宝帳の書
福満 正博		中国演劇の成立と巫覡
有木 芳隆	中国文学	南九州における中世仏神像彫刻の研究
井形 進		薩摩塔の基礎的研究

● 論文博士(2023(令和5)年度)

氏名	専修	論文名
主税 英徳	考古学	高麗陶器の生産と消費の研究

● 論文博士(2022(令和4)年度)

氏名	専修	論文名
團迫 雅彦	英語学・英文学	Availability of Functional Categories in Child Grammar: Movement Effect in English and Japanese (幼児文法における機能範疇の利用可能性: 英語と日本語における移動効果)
鶴島 博和	西洋史学	長い11世紀のイングランド: 北西ヨーロッパ海域におけるその構造と位置c. 960~1135年
田島 優子	英語学・英文学	Woman and Sympathy in Nathaniel Hawthorne's Works: From the Romance to the Real (ナサニエル・ホーソーン作品における女性とシンパシー—ロマンスから「現実」へ)

● 論文博士(2021(令和3)年度)

氏名	専修	論文名
坂本 信道	国語学・国文学	王朝物語史序説
増田 正彦	言語学	漢語北部方言のトーンサンディー
中村 嘉雄	英語学・英文学	ユージェニック・ヘミングウェイ

Overview of the School of Letters and Graduate School of Humanities

History

What we call now Kyushu University was first established as Kyushu Imperial University on January 1, 1911. A decision had been made previously that an Imperial University should be founded in Kyushu in addition to the two existing institutions in Tokyo and Kyoto; accordingly, Fukuoka Medical College, a branch of Kyoto Imperial University, was founded in Fukuoka in April 1903. This became the forerunner of Kyushu Imperial University.

The Faculty of Letters was founded by imperial decree as a section within the Faculty of Law and Letters in September 1924. At the same time the titles of its subdivisions and number of chairs were tacited. In 1947, the ordinances governing Japanese Imperial Universities were reformed and at that time, Kyushu University gained its present name and status as a national university. April 1949 saw the separation of the faculties of Law and Letters, and at this juncture the Faculty of Letters became an independent entity. The following month, sweeping reforms of the Japanese educational system took place and although Kyushu University retained its name, a new educational format was introduced under the School Education Law. In April 1953, Kyushu University's Graduate School was established comprising eight divisions, one of which was the Division of Letters (*bungakukenyūka*).

The Faculty of Letters began as an amalgamation of twenty subdivisions (*kōza*) in 1924; by 1998, this number had grown to twenty-four. In April 2000, the undergraduate school was reorganized into the School of Letters consisting of twenty-one subdivisions, grouped broadly into the sections of Philosophy, History, Literature, and Human Sciences. At the same time, the graduate school was reorganized into its present form, consisting of eighteen specialties within three major departments: Philosophy, History and Geography, and Languages and Literature. Following the reorganization of national universities to University

Corporations in 2004, the undergraduate and graduate schools of Kyushu University's Faculty of Letters were renamed the School of Letters and the Graduate School of Humanities, respectively. At Present the Schools as a whole boast more than fifty full-time faculty members who are actively engaged in research projects and a book collection of over 500,000 volumes.

A total of 11,063 men and women have received an under-graduate degree from the School of Letters since 1928. Prior to the sweeping reforms of 1953, the Graduate School awarded 43 doctoral degrees. Between then and March 2025, 2,324 master's degrees and 296 doctoral degrees have been granted. A further 303 doctorates were granted based on an external examination of a dissertation. Graduates are active in the fields of education, civil service and, increasingly, in the world of business.

Structure

The School of Letters

The Section of Philosophy

This undergraduate Section is subdivided in Western Philosophy / the History of Western Philosophy, Ethics, the History of Indian Philosophy, the History of Chinese Philosophy, and Aesthetics / the History of Art. By examining scholarly traditions past and present and pursuing inquiry into basic, underlying principles, the disciplines in this Section provide the fundamental elements of humanistic scholarship.

The Section of History

This undergraduate Section is subdivided in Japanese History, Asian History, Korean History, Archaeology, Western History, and the History of Islamic Civilization. Each discipline specializes in a different tradition, but shares emphases on the handling and interpretation of original historical materials and on the investigation of historiographic theory.

The Section of Literature

This undergraduate Section consists of Japanese Language and Literature, Chinese Literature, Anglo-American Language and Literature, German Literature, and French Literature. Each discipline takes as its object the language and literature of one or more peoples, offering specialized lectures and research on each.

The Section of Human Sciences

This undergraduate Section comprises Linguistics/Applied Linguistics, Geography, Sociology, Psychology, and Comparative Religion. The Linguistics division studies individual and universal aspects of language. The Geography division concerns theories and study of the human spatial environment. The Sociology division concentrates on theoretical and empirical studies of modern society. The Psychology division aims to clarify the mechanisms of the human mind. The Comparative Religion division is centered on the field study of various religions.

The Graduate School of Humanities

The Department of Philosophy

This graduate Department is subdivided in Philosophy, Ethics, the History of Indian Philosophy, the History of Chinese Philosophy, and Art Studies. Since October 2011, the Department also offers the English-taught International Master's Program (IMAP) in Japanese Humanities.

The Department of History and Geography

This graduate Department comprises Japanese History, Asian History, Korean History, Archaeology, Western History, the History of Islamic Civilization, and Geography.

The Department of Linguistics and Literature

This graduate Department is divided into six specializations: Japanese Language and Literature, Chinese Literature, English Language and Literature, German Literature, French Literature, and Linguistics.

International Exchange

Kyushu University has kept pace with the progressive internationalization of Japan by encouraging a broad range of exchanges between researchers and students here and abroad. The fruits of these efforts are reflected partly in the growing number of scholarly exchange agreements we have entered into with foreign universities: 153 at the university level and six at the faculty level, located in thirty-six countries. There are at present eighty-eight foreign students enrolled in the Schools.

九州大学 文学部・人文科学府案内図

Guide Map & Built-up Area



交通アクセス

- 福岡空港→(地下鉄空港線)→[姪浜駅(JR筑肥線へ乗換)]→[九大学研都市駅]→昭和バス→[伊都キャンパス イーストゾーン]
※西唐津行き、筑前前原行きに乗車した場合は、姪浜駅での乗り換えは不要。
- 福岡空港→(地下鉄空港線)→[博多駅]→西鉄バス→[伊都キャンパス ビッグオレンジ]



作品解説：徐冰《新英文書法：九州大学文学部》2007年

徐冰(1955～)は、躍進めざましい中国現代美術の旗手のひとり。1980年代後半、自ら創作した4000字の偽漢字による《天書》を発表して注目される。その後、アルファベットを漢字風に組み合わせた「新英文書法」による一連の作品で東西文化の融合を象徴する作家として国際的な評価を確立した。この作品は、岡村繁名誉教授より贈られた寄付金をもとに作者に制作を依頼したもので、「School of Letters, Kyushu University(九州大学文学部)」を新英文書法で表している。

2026年4月発行

発行者 九州大学文学部・大学院人文科学府
文学部長・人文科学府長 青木 博史
編集者 文学部・人文科学府 広報委員会

表紙デザイン 芸術学研究室



徐冰《新英文書法：九州大学文学部》2007年

Xu Bing 《New English Calligraphy: School of Letters, Kyushu University》2007

岡村繁氏寄贈 九州大学文学部所蔵



A Guidebook 2026

School of Letters, Kyushu University

Graduate School of Humanities, Kyushu University